

お別れ編

悔やみ慣れ

学生の頃、野口兄に「長島は悔やみ慣れしている」と言われたことがあります。その頃、世慣れていたのは野口兄の方が上だったと思いますが、柔道部の先輩にご不幸があったときなんか、代表でご挨拶したり、先輩方に応対しているのがそういう印象を与えたのだろうと思っています。ところがその後は何だか本当に悔やみの多い人生で、「悔やみ慣れ」してしまっただよな気がします。そう言った機会に遭遇することが多かった、ということ。それだけ大切に思っている人との別れが多かった、辛い時間を沢山持った、とも言えるのではないだろうか。

一九七六年の義弟の岡崎信夫のときは、ロンドンにいて何も出来ず、諸兄にお世話になりました。四カ月後に帰国してから様子を聞くと、死因が「風邪薬が原因の薬物中毒」ということになっていて、その風邪薬を買って来た妹の慶が、岡崎が死んだのは自分の

所為だ、と思い込んでいた節があったので、これを払拭するのを主目的に、発病後の病院の治療に対する疑問を訴えて医療裁判を起こしました。馬場兄の助言も得て事実上の勝訴を勝ち取り、慶に少なからぬ補償金を取ってやったのがせめてものお手伝いと言うことになったのではないでしょうか。この件はこの性質上、あまり公にしたことがありませんでした。岡崎家でも多加士さんにお話した程度でしたが、もう時効に属する頃でしょうからご披露しても良いでしょう。

次の年の渡辺の時は随分お手伝いが出来ました。倒れたことを聞いてすぐに京都まで様子を見に出かけ、一旦帰って来て翌朝出社したらすぐ奥さんから訃報が来て、そのまま、京都に向けて飛び出したのですが、偶然、新幹線の車中でお姉さんや妹さんと一緒に同行することになったので、何となく打合せしている内に、自然と世話役をやることになったのです。ご存知の通り、渡辺家は奥さんの実家も含めてチャキチャキの下町の江戸っ子。これが京都式の葬式をするのですから大変でした。京都と言うところは古いだけあって、しきたりに煩いところ。京都で葬儀社をやるようになったら全

国どこでも出来る、なんてプライドを持っている葬儀社の親父と、江戸の下町ではこんなことはやらない、というご家族の間に挟まって、調整が大変でした。お兄さんは柔道は強かったけれど、弟思いが強過ぎてグシャグシャになってしまつて役に立たないし、もっぱらお姉さんが相談相手でした。それでも京都というところは大したところ。通夜にも葬儀にも参列者全員が黒のダブルでピシッと決めて来るので、通勤用の服で飛び出して来た私は表に出るわけに行かず、お兄さんを表に立てて裏方をやっていました。全てが終わってから、お姉さんに「長島さんに送ってもらつて、マー坊が一番喜んでいてしょう」と言われたのが忘れられません。通夜の晩、皆で飲み明かして、本番の翌日の葬儀の時、大変な二日酔いで苦しかつたのを覚えています。

七八年に一番仲の良かった母方の叔母が亡くなったときも、大分やりました。叔母の連れ合いの親父さんという人が、三菱銀行の出身で旧三菱重工の常務をしていた、という怖い人だったので、この人に頼りにされて、最初から最後までやることになりました。二月の初めて大変に寒い日だった印象が強く残っています。

八一年四月の先の家内のときは、自分では殆ど何もせず、皆さんのご厚情に縋っていただけ、と言うことになりそうですが、二ヶ月後の親父のときは全部やりました。出張に引っ掛けて、最後の看病をしようと病院に行ったら、父の顔には白い布。私が移動中に亡くなったのでした。死に目には遭えませんでした。これは最初から最後まで面倒を見る事が出来ました。社葬と合同と言うことになったので、親族代表の挨拶までやる羽目になりました。ご挨拶の中に「若し生まれ変わるものなら、同じ親父と同じお袋の子として生まれたい」と言う一節を入れたらこれが評判になって、色んなところで「ぜひ分長い間話題にされました。親父の時は宗派の問題が大変でした。元々長島家は浄土真宗のお西さんと言われる宗派で、本家のお寺が上野の池之端にあるので、親父の生前はここに良くお参りに行ったものですが、親父の長崎での生活が長くなるにつれ、母方のご先祖の墓参りに行っている内にここのお寺の和尚さんと仲良くなってしまい、自分が死んだらこの和尚さんにお経を詠んで貰いたい、なんてことになりました。この寺の宗派が浄土宗なのです。仕方がないので、葬式は親父の希望通りということにし、戒

名もこの浄土宗の和尚さんに付けてもらったのですが、納骨は上野に持つて行かねばなりません。お骨を抱えて上野のお寺に行ったら真宗の和尚さんに叱られたこと叱られたこと。散々に謝って、納骨はさせて貰うことにしたものの、お経は勿論、戒名では詠んで貰えず、俗名で詠んで貰いました。その後、長崎に住み着いて、長崎が好きになった親父の気持ちを考えて、お墓は長崎に作ることにし、結局、親父のお骨は上野の墓から引つ張り出して、長崎に作った墓に入れたのですが、困ったのはその直前に入れた、前の家内の喜美子の分。こちらは浄土真宗の法名を持っていますが、一人だけ本家の池之端のお墓に残すのは可哀想なので、一緒に持つて来ました。ですからその時点で、浄土宗のお墓の中に、浄土真宗の法名を持ったお骨が入ることになりました。

八六年暮れの母のときも、出張に引つ掛けて長崎に行つて、最後の一夜の付き添いを勤め、臨終に立ち会つたので、これも最初から最後までやりました。暮れの十二月二十八日に亡くなったものですから、法事の段取りが忙しくて大変でした。全国各地から集っている兄弟の都合を考えて、翌年の正月三日に四十九日の法要をやることにしたら、

正月早々縁起でもない、と言うことで引き受けてくれる場所を探すのに苦労しました。

九七年の慶の急逝のときも大変でした。本来なら長女の千恵の旦那の大島くんが喪主をやるべきところでしたが、本当に急なことだったので、地元にいる自分でやることにしました。自分自身が動転していたこともあって、満足に出来たかどうかには疑問があります。戒名については親父のときの苦い経験がありますので、注意しました。岡崎家の宗派は禅宗です。葬式は長崎の件の浄土宗のお寺に頼んだのですが、その辺は鎌倉の浄妙寺の和尚さんの了解も得て慎重にやりました。戒名についても、岡崎の「剛法院」と合うようなものを考えてもらうことにし、浄土宗と臨済宗、双方の坊さんを電話口呼び出して打ち合わせをして貰い、最終的にはファックスのやり取りで決めて貰いました。ですから本件ではこの面でのトラブルは一切ありませんでしたが、慶がミッシェンスクールの出なので、友人たちが賛美歌で送って上げたい、と言う希望を出してきたときも参りました。和尚さんと相談して、お経を早めに切り上げて貰い、和尚さんが帰った後、賛美歌を歌って貰うことにしました。慶のお骨は長崎と鎌倉に半分ずつ納めてあ

ります。ですから長島家の墓の銘板は大変。父と母の戒名はお寺の宗派どおり浄土宗のものですが、喜美子のもは浄土真宗。慶のものは禅宗のもの。賑やかな銘板です。私はどうすれば良いんだろう。父のところで宗派が抜れてしまっているので、それに従わざるを得ないのでしょうが、そうなると元の真宗には喜美子一人を残したことになるので可哀想。この問題は、生きている内に決めておかないと息子が困ることになりそうです。仏教の宗派と言うものは、お釈迦様の教えをどう解釈するか、で分かれているだけのものだと思いますので、行き先は一つなのでしょうが、やはり気になります。最終的にはお布施と戒名料がどこに入るのか、の問題なのではないかと思っしていますが、お寺にとっては宗論という喧しいものがありますから、それ以上の大変な問題なのかも知れません。

何時だったかご紹介した、喜美子の伯母が九十六歳で亡くなった時。これは生前に本人から、万一の時はお願いね、と頼まれていたので、連絡を受けてすぐ上京したのですが、夕方着いたら、段取りはずい分進んでいて、自分自身でやる部分は少なくなっ

いました。当時としては珍しくなかつた複雑な事情の後で、後妻として入って来られた人だったので、籍は入っていたものの、自分の子供はいなくて、お祖父さんの三人の息子たちからはあまり良く思われていなかった立場の人。ですから、伯母の一番の心配は、お祖父さんと一緒のお墓に入れて貰えるだろうか、と言つことでした。息子たちはもういなくなっていて、息子の嫁と言つお婆さんが一人いましたが、この人と話をして、無事に同じお墓に入れてやる事が出来ましたし、大事にしていた仏壇も本家に引き取つて貰いました。

こんな経験を重ねているので、本当に「悔やみ慣れ」して来たようです。年を取つて来た、と言つ要素もあるのでしょう。ですから、川口兄のときも「これはいけない」と思つてからは、私が自分で送つてやるう、と考えていたのです。こちらで準備中だった小学校の同窓会の方は、準備のペースを四・五日早目に進めておいて、何時どんなことがあつてもすぐ飛び出して、手伝いをしてやるう、と考へながらやっていたのです。ところが分からないもので、直前になって自分自身が倒れる羽目になり、手伝いど

ころかお参りにも伺えない、なんて情けないことになってしまい、自分では、申し訳ないことをしたな、と言つ氣持ちが今も抜け切れないうです。 (平成十九年三月五日)

お別れ編は専ら追悼文集に投稿したものをご紹介する。柔道部関係の人達とのお別れを紹介することが多くなつた。

皆々様

「天折」 故岡崎信夫随筆集・追悼文集 より

畏友であり義弟の岡崎信夫は、昭和五十一年七月、私のロンドン駐在中に、薬物中毒と言つ事故でなくなつた。珊瑚の仲間内では、五十才までに死んだ場合は、残された仲間の手で追悼文集を作ろつ、という約束に

なっていたので、「夭折」と言う題名の立派な遺稿集・

追悼文集が出来た。

この度は、事故としか言いよのない、思いもかけない不幸な出来事で、皆さんには大変ご心配をおかけしました。野口兄、茂木兄には当日早暁から詰めて頂いた由。珊瑚同人諸兄も、お忙しい中を鹿児島を始め各地から、通夜に、告別式に参列して下さいたとのこと。慶もさぞ心強かったことと思います。一番近い間柄にありながら、近くにいてやれなかつた兄として、この機会を借りて厚く厚くお礼を申し上げます。大野木兄が、丁度当日、アメリカから帰国されたのも何かの因縁かと思えます。告別式では茂木兄に殆ど即席で友人代表の弔辞をお願いした由。茂木兄でなければ出来ないことだったかと思いますが、声涙ともに下る友情あふれた素晴らしい弔辞だった、と長崎から報告がありました。馬場兄には、当日の様子を詳しく知らせて頂き、又、留守宅にまで種々お心配り頂いているとのこと、皆さんの暖かいご支援にはお礼の言葉もない気持ちで

す。

当地(ロンドン)七月三日土曜日の夜遅く、長崎からの電話で知らせを聞いたときは、全く茫然自失の態で、どうしたら良いか判らない始末でした。遺体の帰って来る時間を見計らって川崎に電話したところ、慶に「喜美子さんも頑張ったんだから(ワイフの入院騒ぎのこと)、信夫さんも頑張ってね」と言ったら、ウン、と言っていたのに。絶対直ると信じて一生懸命看病したのに駄目だったのよ」と言って泣かれ、こちらも何も言えず、ただ涙。シツカリしろ、位のことは言ったのでしようが、考えていたことの十分の一も言えず、何を言ったのかも覚えていない始末で、泣き虫の弱虫ぶりを発揮しました。岡崎の親父さんも電話口に出て来られましたが、「何も言うことはないよ」。ガツカリだよ」と、全くその通りの心情でした。早速、野口兄、茂木兄が詰めていてくれていることを知り、有難いものだ、と思いました。一時は、直ぐに帰国することを考えたのでした。一番してやりたかったのは、慶に肩を貸して一緒に泣いてやることでしたが、一晩悶々と考えた結果、今となっては仕方のないことだ、と思い直しました。長崎

からは、父と弟が直ぐに飛んでくれたことだし、珊瑚の諸兄も続々集ってくれていてことを知り、ここは皆さんの情けにすぎることとし、帰らないことを決心した次第です。有難いものでこの辺の気持ちは、以心伝心で父には判って貰っていたようでした。会社の方でも帰せる手立てがないか、探してくれたようですが、無理だ、と言うことになり、その旨父に話したところ、父は「息子はこのために任地を離れるような男ではない」と言ってくれたとのことです。この秋、帰国したら、家に帰る前に、空港から真っ直ぐ位牌の前へ行き、お参りして失礼を詫びる積りでいます。小生の帰国も、後四・五ヶ月にせまり、岡崎と笑顔で握手し、肩を叩き合い、慶の笑い顔で迎えてもらうのを楽しみにしていたのに、帰国の楽しみが大きな部分がなくなってガッカリ、と言う他、言葉もありません。

それにしても運命と言うのは、惨いことをするものだ、とつくづく思います。良い奴だった。

常に前向きの姿勢を崩さなかった。挫折ということを知らない男だったのではなかる

うか。こちらが少し疲れて、ものの考え方が消極的になっていくときに会つと、口に出して言わなくても、無言の叱責を受けるような、鞭で叩かれるような気持ちにさせられたものだ。

器用な方ではなかった。柔道にしても、当時の細い身体で、楽をするということを知らず、ごまかしのない一番労の多い柔道をしたのではなからうか。指を血豆だらけにし、身体中擦り傷だらけになって、それでも足を踏ん張って大きな相手に堂々と立ち向かっていった姿を思い出す。

型に嵌められるのは好きでなかった。珊瑚の初期、僕が幹事役をしていた頃、いくら注意しても、紙の大きさとか、インキの色とかに気を使ってくれず、規格外れの大きな紙に緑色のインキなんかで思いのままを書いてくるので、コピーが作れず困ったものだ。それが又、生き生きとしていて、彼の人柄を表す表現方法なので、腹を立てながらも、このまま何とか皆に見せることが出来ないものか、と思いつつ悩んだりしたのも今となっては良い思い出である。

打算とか、要領とか、そういう計算は苦手と言うより嫌いだった。細かい目先のことには拘らず、何かもつと大きなことを考え、持ち前の真面目な努力で常に前を向いて歩いていった。

自分を殺して人のために尽くす、いわゆる滅私の出来る男だった。自分のことばかり考える人間の多い昨今、希少な存在だったし、私自身、その方向に行きがちになるときに、教えられる思いがしたものだ。惜しい奴を亡くしたものだ。彼の場合こそ夭折と言う言葉がピッタリする。こう思い起こしてくると戒名の

「剛放院大道徹信居士」

いかにも彼らしい良い戒名だと思う。

僕の場合、珊瑚の諸兄よりも恵まれていたのは、彼を親族の一人に出来たことだった。良い家庭だった。明るくて健康的で、何時行っても暖かく迎えられる、そんな感じの彼の遺稿になった「うちの悪妻」にもあるように、何時まで経っても娘気分が抜けずハネツ返りの慶を、あれで彼なりに暖かく包んでいたのだと思う。もっともあの「悪妻」

は前号の感想欄に書いたように、愛情の発露そのもので、オノロケ以外の何物でもない。あんな文章を臆面もなく書ける彼を心から羨ましく思ったものだった。あの傑作と娘の千恵の作文につけた愛情あふれるメモを残して死んでしまうなんて、如何にも彼らしい。父親としても暖かで包容力のある、これ以上ない良い父親だった。これからの遺された家族の生活を思うと暗い気持ちになるが、兄として叔父として故人の親友の一人として、出来る限りの支えになってやりたいと思う。今、何かしてやりたいと思つて、何も出来なかつたどうしようもないこの気持ちを、誰よりも長く持ち続けるのが、遠い地で何も力になつてやれなかつたことへのせめてもの罪滅ぼしになる、と考えることにしたいと思う。今となつては、周りの皆が力を合わせて遣された家族を少しでも幸せな方向に持つて行くように努力するのが故人に対する勤めだと思つ。

今回の皆さんの暖かいご芳志に重ねてお礼申し上げます。銘々にお礼状を、と思つたのですが、岡崎信夫追悼号を発刊されるとの幹事のご配慮に甘え、紙上でお礼申し上げます。

ロンドンにて

(昭和五十一年七月)

渡辺雅司兄の早世を悼む

「寛容と努力の人」 故渡辺雅司随筆集・追悼文集 より

岡崎信夫が夭折して一年も経たない昭和五十二年六月、
珊瑚同人の渡辺雅司が京都で急逝した。珊瑚同人で遺稿
集・追悼文集を上梓した。

我々は又、素晴らしい友人の一人を失った。好漢岡崎を失ってまだ一年も経たないといふのに。

六月二十二日の朝、前夜から京都に行っていていられたお姉さんから、重態で入院した、との連絡を受け、何が何だか判らないままに取り敢えず新幹線のホームに向かった。東

京駅で偶然、お兄さん、妹さんご一家と一緒に京都行きの新幹線に乗った。

病院に着いた時は、もう人工呼吸が始まっていて意識もないようだったが、耳元で「長島だ。判るか。シツカリしろ」と叫んだら、かすかに頷いてくれた。こんな言葉が彼と意思を通じ合う最後になってしまった。

間脳に発生した脳血栓の由で、身体は動かなくなっていたが、意識はある程度ハッキリしていたのかも知れない。時々足をバタつかせていたが、何か言いたいことがあるのに口が利けずジレていたのではないか、と思うと可哀想でならない。

馬場と二人で病室にいたが何も出来ず、奥さんに少しでも身体を休めるように言い残してその日の最終列車で帰って来た。何の役にも立てなかったが、昔からのよしみで、こんな時一声掛けて下さったお姉さんに感謝の気持ちで一杯だった。翌日から増築の時に作った新米の神棚に榊を飾り、毎朝灯明を上げて手を合わせることにした。丁度、二十二日に大きな手術をした母の回復と合わせて祈ったのだったが。

六月二十八日朝出社直後、奥さんから電話で「亡くなりました」のひと言。覚悟はし

ていたものの茫然声を失った。奥さんのシツカリした声がせめてもの救いだった。前日
帰京されていたお姉さんからも連絡があり、一緒に行くことにする。杉山も一緒に行つ
てくれた。雨の中、京都に着いたときは、遺体はもう家に戻っていて対面した。穏やか
な良い顔だった。苦しみもなく少し笑っているような。葬式の手伝いで残っている間、
時々顔を見に行つたが、時間が経つにつれ柔和な良い顔になって行くようで、最後の
別れで花を飾った時も、安らかな良い顔だと思つた。(丁度、前日出来上がった故岡崎
信夫の追悼文集「夭折」を一冊、お棺に入れた)

何となく、やらねば、と言つ気持ちになり、通夜・告別式の裏方をやった。不慣れで
行き届かず、葬儀屋の段取りとご遺族の気持ち、京都式と関東式の間の調整をするのが
精一杯で、ご遺族の方に却つて迷惑を掛けたのではなかったか、と反省することしきり
だったが、お姉さんから「一番親しくしていた人に送つて貰つて、マー坊が一番喜んで
いるでしょう」とのねぎらいの言葉を頂き、このひと言で全てが報いられた思いがした。

真面目な男だった。何でも物事を正面から取り組もうとした。彼は珊瑚の仲間を評して、純過ぎる、と言った。もっとスレても良いのではないか、とも言ったが、一番純だったのは彼自身ではなかったか。大学の四年間、詰襟に学帽を通した彼、講義にしる、稽古にしる、サボるということを知らなかった。大日本印刷に入ってから、公害問題、人集め、労働組合対策等々、自分に与えられた仕事に対しては、真正面から立ち向かっていたに違いない。京都へ行ってからは、無遅刻・無欠勤を三年間続けていたという。真面目さで人を引き付け引つ張っていく上司ではなかったか。そうしたあまりにもひたむきな生活態度が、彼の身体を蝕み、命を縮めたものではなかるうか。

静かな男だったが、ファイトは常に内にこもっていた。表面には出さなかったが、負けず嫌いだった。柔道にしたって、当時の細い身体で中々勝てないけれども、決して負けない慎重でガツチリした自分の柔道を作り上げていた。三年の時だったが、東商戦で相手の抜き役に当たったが、適当に威嚇さえしながら堂々と押し気味の引き分けをしたのが印象に残っている。稽古中でも負けると悔しさを冗談に紛わせながら、もう一丁、

と掛かつて来るのが常だった。

スポーツマンだった。高校時代はハンドボールをやっていたとか。野球をはじめ、スポーツと名のつくものには何でも手を出し、結構何でもこなした。会社でも腰を痛めたにもかかわらず、ボーリング、テニス、卓球などに精を出していた由。ゴルフも腰に負担の掛からない打法を編み出した、と言っていたが、一度も手合わせが出来ぬままになつてしまった。

慎重な性格だったから、我々の仲間では一番の兄貴株だった。少し年上だったこともあって、彼自身も我々を弟分に見ていて、弟どもが勝手なことを言つたりしても許してくれていたのではないか。良い聞き役で、何でも相談に乗ってくれた。ワイフが入院して、こちらが参りかけている時、立川の病院から戻つて来るのを夜も遅い新宿の駅で待つていてくれて慰労してくれ、泣き言を聞いてくれた。

下町っ子らしくない下町っ子だった。学生時代、田舎育ちの我々は、下町の雰囲気そのものの彼の家へ行っては、親父さん、お袋さん、兄さん、姉さん方に酒の飲み方を教

えてもらったものだ。その親父さんもお袋さんも、もう今はない。お袋さんが彼のことを「この子は長生きしないよ」と言ったことがあったと聞く。やはり親には判るものがあるのだろうか。戒名は親父さんとお袋さんから一字ずつ貰った

「政雲院三光居士」

今日もどこかその辺の角から、首を少し右に傾げながら現れ、右手の指先で挨拶をし、はにかんだように笑いながら、少し内股でスタスタと小走りに近付いてくる彼の姿が見えるような気がしてならない。

(昭和五十二年七月)

21

人生の達人 岡崎 孝翁のご逝去を悼む

岡崎孝氏は故岡崎信夫の父君だが、信夫君の没後は代わって珊瑚の同人に加わって頂き、毎号投稿を続けて頂いた。珊瑚への投稿文を中心にエッセイ集「瘦馬奮闘記」

岡崎孝氏が亡くなった。八十二才。一般的には八十二才と言えば、年齢に不足はない、と言うことなのだろうが、氏の場合、この言葉は当てはまらない。これだけのご高齢でありながら、その年齢を全く感じさせない方だった。失礼ながら、仲間の一人としてお付き合いをさせて頂いたが、老いとか死とかからはおよそ縁の遠い方。この人には死は訪れないのではないかと錯覚するほどだった。それにしても余りにも急な死の訪れだった。前々日まで勤めに出られ、晩酌を楽しまれた由。前日の朝早く、同居されていたご長男の朋夫さんを送り出された後、腹痛を起こされたのがことの始まりだったと聞かされた。それでも隣にお住まいの純子姉さんに電話をする前に、床の片付けから朝食の支度まで全て済まされてあったという。いかにもキチンとした岡崎氏らしいではないか。そのまま入院され、翌二十三日昼過ぎに亡くなるまで、意識もシッカリしていて、付き添いの愛娘敬子さんと話をされていたと言う。その直前まで、自分が死に直面されている

ことに気付いてさえいらなかったのではないか。遺された遺族の方々には酷に聞こえようが、かくありたい、と思う死に様。見事な大往生だったと思う。老醜を晒すことなく、長患いで苦しんだり、周囲の人に迷惑を掛けることもなく、爽やかな印象だけを残したままこの世に別れを告げることが出来るなんて、正に理想的ではないかと思う。

この人はひと言で言つて「人生の達人」だったと思う。

我々が鶴見の岡崎邸に出入りしていたのは、学生時代のことだから三十数年前と言つことになる。丁度故人が今の我々と同じ年代に当たるが、五人のお子さんに囲まれ、慈母という表現がピッタリの、やさしくて物静かなお母さんと気持ちの良い家庭を作つていられ、若造の我々を歓迎して下さった。如何にもプロのエンジニアと言つた雰囲気、文系の我々には判り難い蒸着とか遮断機の説明をして下さつたのを思い出す。

ご縁があつて、次男の信夫君に妹の慶が嫁いだが、慶一家も可愛がつて頂いた。孫に接する時の氏は、あの葬儀の時の写真そのまま、目尻を下げ、相好を崩す好々爺だった。が、この方の達人振りはこれが好々爺に止まらない処にある。自分の死後のことも慮つ

て、後のこともキチツと始末をつけておかれたのだった。信夫君の夭折は本当に残念なことだった。私は偶々ロンドンに駐在中だったが、国際電話でお悔やみを申し上げた時、ひと言「何も言うことはないよ。ガツカリだよ」と悲痛な声を出されたのが今も耳に残っている。その後、奥さまのご病気に続くご逝去、と辛い目に遭われながらも上手に年を取られた。他人に頼ることなく、常に自分の楽しみや生き甲斐を探すように心掛けられた。毎月の「珊瑚」への寄稿と我々珊瑚同人との付き合いも楽しみの一つだったと聞く。ところが氏の場合は、「珊瑚」への投稿をそれに止めず、これを整理して随筆集の自費出版を重ねられた。「痩せ馬奮闘記」「鶏肋随想」と二冊を上梓され、三冊目を準備中で、題名も「続 痩せ馬奮闘記」と決めておられた。この辺にも人生を楽しむ術を知った達人の面目が窺われる。珊瑚同人の会にも機会ある毎にご招待したが、心から楽しめる様子が、気持ちが良いほどだった。我々も、ご老人の相手をして上げている、何て感じは全くなく、同世代の仲間として、肴にし、肴になって一緒に楽しい時間を過ごした。お声を掛けると前々から本当に楽しみにされ、その後では会合の様子を楽しそう

に皆さんに話しておられたと言う。もっともっと機会を作って差し上げるのだったと思う。

旅行もお好きで、方々へ行かれた。長崎で偶然ご一緒したことがあったが、その楽しみ方が如何にも他人に頼らず積極的で好もしかった。それでいて他人から受ける好意は気持ち良く心から喜んで受けられるから、おもてなしをしている父や母も、おもてなしのし甲斐があつただろうと思う。ある晩、父との夕食の席にご相伴したことがあったが、食事の後、形を改められ、キチツとした折り目正しいお礼を述べられた後、お礼に一席歌わせて頂きます、と言われて正座のまま何の曲だったか一曲歌われた。父もこれに答え一曲歌い、二人で端然として向き合って静かにお互いの気持ちを通わせ合っている姿が、如何にも日本人・明治の人という感じで美しかったのを思い出す。

その父も、もう今は亡い。ここに又典型的な明治の人が一人逝った。

戒名は、氏の甥に当たられる浄妙寺の松本文司氏の命名で

「宝寿院秀徹孝俊居士」

(合掌)

(昭和六十三年十月)

美丈夫

岡本光生さんは私の二代前の一橋大学柔道部の主将。平成四年十二月に亡くなった時、追悼文集への投稿の呼びかけを頂き、喜んで書かせて頂いた。

私は昭和三十一年、岡本さんが一橋大学三年の時、柔道部の二年後輩の新生入生として入学したものです。新生入生にとって四年生は神様みたいな存在でしたし、三年生はさしずめ王様と奴隷位の感覚だったでしょうか。でも、この王様はやさしくて格好の良い王様でした。男前と言っただけではありません。背が高くて様子が良いと言っただけでもありません。何気ない仕種の中にもどこことなく上品なところがあって、とにかく絵になる人でした。無骨ものの多い柔道部の中では際立っていて、美丈夫という言葉は岡本先輩の

ためにあるのではないか、と思ったことがあります。長い足を利しての寝技が得意でした。稽古をつけて頂いていて、間違えて立ち技でグラリとさせた時、「憎いなア」と言いながら立ち上がって来られた姿を何故か鮮やかに思い出します。先輩が四年生でキャプテンの頃、私は一・二年生を纏める前期主将と言う役を仰せつかっていましたが、部を纏めて行く悩みを聞いて頂き、何度となく相談に乗って頂いたものです。

卒業後は日本郵船と三菱重工業、船会社と造船会社と言う同じ船の分野で働くことになり、ここでも先輩・後輩と言うことでお世話になる機会も少なくありませんでした。特に、自動車専用船の責任者になられてからは、何度も事務所に向ってご指導を頂きました。何うと何時も、良く来た、とあの温かい笑顔で迎えて下さり、忙しい中でも相手になって下さいました。

私がハウステンボスに行くことを決心し、東京を離れる時には送別会をして下さったのですが、先輩の体調が悪いと言う知らせは、私が長崎に来てから間もなくのこと、イタリア経由で入って来ました。偶々こちらへ来てからの仕事で関係の出来たミラノの

クリビオさんが長年日本郵船のイタリアの代理店をされている方で、ミスター・オカモトの話になった時、あんなに有能で良い人が難しい病気らしい、と残念がっています。あの人が世界中の人に愛され、美丈夫振りが知られている。いろんな国の方々が心配してくれている。この人の後輩であるというだけでこちらの値打ちまで上がったような気にさせられたものです。その後は手紙や電話でお見舞いを申し上げる程度で、結局お見舞いに伺う機会もなく、本当に失礼なことをしてしまいました。その後、常務にも昇進され、体調も戻られたかと思っていたのですが・・・。

訃報は在京の同級生から届きました。とにもかくにも件のクリビオさんに連絡し、葬儀に間に合うように上京しました。本当に立派なご葬儀でした。参列者後を絶たず、皆が岡本さんの死を心から悼んでいる様子が窺えました。根本社長の弔辞も、同期の西井先輩の弔辞も胸を打つ心のこもった立派なものでした。これも皆、岡本さんのお人柄を示すものだったのでしょう。牧師さんの話で、立派な闘病生活を送られたことを知り、私も思い出がこみ上げてきて、年甲斐もなくハンカチを手放すことが出来なくなり、恥

ずかしい思いをしました。

本当に惜しい人、良い人を亡くしました。佳人薄命とはよく言ったものだと思つきます。こういう感慨をお持ちの方は決して私だけではないと思うのです。

(平成六年一月)

慶の一日

二月二十五日、悪夢のような一日のことは思い出したくもありません。ご存知のような家族の状況ですので、私が喪主をやることになり、当日お通夜、翌二十六日に葬儀と云うことにし、北海道や千葉から駆けつけた兄弟全員を始め皆さんのご協力の中で、そちらの方は無事一段落しました。

存命中、珊瑚同人諸姉には本当にお世話になりました。慶は珊瑚のお仲間に入れて頂いていることを、とても誇りに思っていました。岡崎未亡人として参加しているのか、私の妹として参加しているのか、分からない部分があつて我仮も言っていました。皆

さんに気持ち良く許して頂いていたと思います。諸兄とご一緒させて頂くのが嬉しくて嬉しくて、ご一緒した後は「上等の男性方とご一緒出来た」と言うのが口癖でした。奥さま方にも可愛がって頂き、頼りにしていました。

私にとっては小さい頃から、兄妹と言つより仲の良い友達で、頼りにしたりされたり、助け合つて生きて来ました。思い出は数知れず。その思い出が強過ぎて、今何かを書く気になりませんし、将来も書く気持ちになれるかどうか自信がありません。「私は死ぬのはチツトも怖くない。パパが天国で席を取つて待つていてくれるから」と言つていたことをせめてもの慰めに使いたいと思つています。

戒名は鎌倉の浄妙寺の松本武司和尚につけて貰いました。

梅芳院信愛妙慶大姉

故信夫とのバランスを考えた、暖かい良い戒名だと思います。

親族代表挨拶

『親族を代表してひと言ご挨拶申し上げます。私は故岡崎慶の兄、長島達明と申します。』

本日は皆さま、お忙しい中、また足元のお悪い中を、妹慶の告別式に、かくも多数ご参列頂きまして、誠に有難うございました。

また、生前、故人が皆さまには大変にご厚情を賜りまして、どうもありがとうございました。今日はこうして、大勢の皆さまに暖かく送って頂き、賑やかなことが好きだった慶も感謝していることと思います。

五十七年の短い人生でした。若くして主人を亡くし、幼かった娘三人を抱えて苦勞の多い人生でしたが、慶は一生懸命に、精一杯の人生を送ったと思います。持ち前の明るさで、皆さんにもおケイさん、おケイさんと可愛がって頂き、娘たちも立派に育て上げました。娘たちとも力を合わせ、婿や孫も出来て、ようやく楽が出来るところまで参ったところでしたのに、突然こんなことになり、身内の我々としても残念でなりません。

昨日、お通夜のご法話で和尚さまがこんな話をして下さいました。

お釈迦さまが亡くなる時、悲しむ弟子達に対して「自分の身体は滅びるけれども、さとりは永遠に残る」と言う意味のことを言われたそうです。慶がさとりを残せたかどうかは分かりませんが、あの明るい笑顔は我々の心の中に残してくれたと思います。

お蔭さまで葬儀も滞りなく済みますことが出来ました。どうか今後とも、私たち遺族、特に遺された娘たちに対し、故人の生前同様の「ご厚誼、ご指導のほどをよろしくお願ひします。

本日のご会葬、本当にありがとうございました。』

「ご想像頂けるかと思いますが、慶は長崎でも大の人気者で、会葬者は五〇〇人近くになりました。主人のいない寡婦への会葬者の数としては、大変な数だと思えます。ご挨拶の原稿を作りながら、これは最後までやれそうにないぞ、と思い始め、何とかせねば、と頑張ったのですが、やはり駄目で大勢の会葬者の前で醜態を晒しました。

(平成九年三月九日)

川口 勉君

平成十七年五月、珊瑚同人の一人川口勉君を失った。偶々私が全く同じ病気の胆管がんで入院中のことだった。同人誌「珊瑚」は十一人で始めたものだが、これで三人を失い、同人は八人になってしまった。

我々は又一人、掛け替えない友人の一人を失った。川口 勉。素晴らしい男だった。昨年春、緊急に入院した時は、大したこととは思わず、その後、上京の機会を捉えて千葉の病院に二度ほど見舞いに行ったが、悪いと言われている胆嚢や肝臓の近辺の詳しいスケッチを準備していてくれて、詳しく冷静に説明してくれた。病と戦い、負かしてやろうと言つ意気込みが感じられて頼もしかった。長崎に帰つて来て、私の主治医に相談したところ、難しい部位ではあるが、今の医療技術からすれば大丈夫でしょう、とのこと、その言葉通り手術後は一旦快方に向かい、退院されたので、お宅に伺つて真似

事でワインを口にしたりしたし、昨年十一月には柏の駅前で杉山君と一緒にささやかな快気祝いをしたのだった。その時は足取りも全くシツカリしていて、これで快癒間違いない、との確信を深めたのだった。

今年に入って再入院・再手術と聞いたときは、正直言つて、これはいけないのではないか、と思つた。お見舞いにも行きたかつたし、奥さんにも様子を伺いたかつたが、我慢して遠慮することにした。三十五年前、私の先の家内が脳腫瘍で入院・手術した時、実際は大変に悪い状態で、患者本人には勿論、周囲の皆さんにも本当のことを言えず、悩んでいたことがあつた。それでも各方面から毎日のように、どうですか、どうですか、と聞かれ、心配して下さる気持ちは有難いものの、何と答えて良いか判らず、本当に困つてしまつて、むしろ皆さんが心配して下さる親切が煩わしいものに感じていたことがあつた。今回の川口夫人の場合も、若しかしたらこんなものかも知れない、と思つたので、皆からはヤイノヤイノと聞くことを遠慮し、偶々近くに住む杉山ご夫妻を窓口にして、ここからの情報を待つて静かに見守ることにした。

先々月号の川口夫人の簡単なご報告は、患者ご本人も目を通されるものだけに、気を使って書いていられるのが良く判った。外の桜と病室を対比して書いていられたが、二十五年前、先の家内が亡くなった時、丁度桜が満開だったので、暗い死の病室との対比を「外の天国と内の地獄の差」と言う表現で紹介したことがあり、川口ご夫妻はこれに思い出して書いて下さったんだろう、とその配慮に感激した。

それでも一度だけ、どうしても堪らなくなって電話を差し上げたことがあったが、奥さんの口から、私の配慮が間違っていないなかったことを聞いて、良かったな、と思った。何か変化があったら一番に飛び出そう、と体制を作っていたのだが、その最中に私自身が川口君の最初の症状と全く同じ症状で緊急入院する羽目になった。症状があまりに似ていたので、「オレも同じ目に遭っているよ」と言っちゃったら少しは元気になるかも知れないと思って、病院から、点滴に繋がれている手で乱筆の見舞い状を書いたら、思いもかけず奥さんから礼状が届いた。もう痛み止めを点滴で常時投与している状態なので意識もハッキリせず、読んでは聞かせたものの本人は黙って聞いているだけだった、

とのことで状況は良く判ったが、そんな状態の中で礼状を書いてくださる奥さんの気丈さに感服し、涙が出る思いだった。

訃報は病院のベッドで聞いた。何は置いても真つ先に飛んで行きたかったが、三本の管に繋がれた身としてはどうしても動けず、失礼することにした。奥さんとは電話で話すことが出来たが、先方の方がむしろシツカリされているのに、こちらのお悔やみの言葉の方が全く形になっていなくて失礼なことをした。

コトがあつたら、この素晴らしい男に対し、少し無理をしても送る言葉を言わせて貰おうと思っていた。言いたかったことを纏めて見たら次のようなものになった。茂木賢三郎君に内容を連絡して、若し友人代表の弔辞を頼まれたら是非受けてくれるように頼み、私の言いたかったことをひと言でもふた言でも良いから含めてくれ、と頼んだ。

告別式の夜、同人の夫々から報告が入ったが、茂木君が素晴らしい弔辞を読んで皆を感動させてくれたことを知って有難く思った。茂木君には失礼かつ僭越の次第だが、私の幻の弔辞をご披露して川口君へのお別れの言葉としたい。

弔辞

今は亡き川口勉くんの靈に対し、お別れの言葉を申し上げます。

如何にも早過ぎた。激務から解放され、ゴルフを楽しみ、モーツアルトを楽しみ、徒然草に親しむ毎日を楽しみにしていたのだらうに、思いもかけぬ病魔に取り付かれ、奥さんを始めとするご家族の必死の看病も空しく、こんなに早くお別れすることになるうとは思ってもいなかった。

君との出会いは、一橋大学三年の時、君が柔道部に入部してきた時のことだった。ガラは大きいけれど君は所謂体育会系の人ではなかった。ニーチェを読み、岡潔を愛読書とし、論語に親しむ文学青年系の人で、柔道部には異色の存在だった。柔道は不器用だったが責任感は強く、対外試合に出て貰ったとき、大きな身体を二つに折り曲げ、自分を殺してチームのために分け役に徹して自分の責任を全うしようとしていた姿が忘れられない。

卒業して日清製粉に就職し、ここで最良の伴侶に巡り合い、二男一女に恵まれて幸

せな家庭を作られた。お二人は柔道部同期の同窓誌「珊瑚」の会の中心的存在で、仲の良いご夫婦は仲間のお手本みたいなものだった。珊瑚への投稿は、常連とまでは行かなかったが、豊富な読書量に支えられた短くてもキリツとした思索的な文章で皆に何かを考えさせた。会社では最初、労務畑で働かれたと聞いているが、勉強家の君は弱冠二十九才の若さで「労務管理者の課題」と言う論文を書いて、日経連の懸賞論文の第一席に入選した。その後は営業・購買などの部門で要職を勤められ、常務にまで進まれて我々仲間の誇りだった。

第一線をリタイアされたのが平成十三年のこと。その後、自分の半生記を綴る「柏戸の涙」というエッセイ集を上梓された。その中で君は「私の夢、あと二〇〇〇回のゴルフ」と題して、これから毎年六〇回ずつゴルフをやれば、九十六才までに後二〇〇〇回のゴルフが出来る、と書いている。二〇〇〇回は無理でも、せめて一〇〇〇回ぐらいはやらせてやり、私も何回かはご教示に預かりたかった。

残されたご家族には酷な言い方になるが、君の生涯は私には羨ましいものにする思

える。自分が世の中に必要とされている時に自分の役目を果たして、役目が済んだら消えて行つた明治維新の英雄、坂本竜馬や高杉晋作みたいな一生だったのではないだろうか。最後までスツキリした爽やかな潔い一生だったと思う。四十年間、一生懸命働いたのだから、これから暫くはそのご褒美として好きなゴルフやオペラや読書や美術鑑賞をさせて上げたかつたし、永年ご苦労を掛けた奥さんに奥さん孝行もさせて上げたかつたが、これも君の一生だったのだらう。

心残りは沢山あるうと思うが、残された奥さま、ご家族の皆さんは珊瑚会の会員として末永くお付き合いさせて頂こうと思つている。

君と出会い、永年友人としてお付き合いが出来たことを心から誇りに思い、本当に良かったと思つている。

今はただ、ユツクリ休んでくれ、と申し上げるばかりである。

合掌

(平成十七年五月十六日)

式辞

式辞に類するものはずい分やらされて来ました。

慶事の方はもっぱら結婚式の式辞で、卒業後間もなくの倉田君の結婚式での友人代表挨拶に始まり、友人代表のご挨拶は数え切れないほどやりました。友人代表の時代が終わると、会社の上司としてのご挨拶になります。最初のご挨拶の時は、緊張で食事が喉を通らないほどでしたが、その内に、自分の出番のない結婚式なんて物足りなくてツマンナイ、なんて生意気なことを考えたこともありました。若造の癖に親族代表の挨拶、なんてのも何度かやりました。その内にハウステンボスに来てからは主賓のご挨拶ということになりました。これも何十回やったことが。仲人は自身の家庭の事情に鑑み、長いこと断り続けて来たのですが、ハウステンボスに来て、どうしても、と頼まれて一度やったらそれを契機にズルズルとやらされる羽目になり、都合五回やりました。

ご不幸の際の式辞はもっぱら親族代表のご挨拶で、これもずい分やりました。先妻喜美子の時は流石に義父に頼みましたが、父の時の社葬でのご挨拶、母のとき、慶のとき、

伯母のとき等でしたが、これはあまりやりたくないご挨拶です。

この度、初めて甲辞なるものを読まされました。

私が三菱重工に入社した時の指導教官だった石川利雄さんについては、以前ご紹介したことがあります。直接の先輩に六歳年上の村田忠男さんと言う方がいてこの人も石川学校のタコ部屋での同窓生だったので、この十二月十一日に亡くなったのです。この方は関西学院大学の頃からサッカーの俊足のフォワードとして知られ、三菱重工に入社してからも、今の浦和レッズの前身の三菱重工サッカークラブの選手として活躍した41人です。一九六八年のメキシコ・オリンピックで釜本邦茂や杉山隆一やゴールキーパーで後に全日本の監督を勤めた横山謙三などの活躍で、日本が初めての銅メダルを取った時のコーチとしても活躍しました。選手を引退してからも三菱重工サッカークラブのコーチや監督をやっていました。重工現役の頃から日本サッカー協会の渉外担当としてまっぴら海外関係の仕事をしておられたようです。重工を定年退職するのを待っていたように、協会の仕事に専念され、協会の理事から副会長まで勤め、各種国際委員会の理事

や委員をやっていましたので、亡くなった翌日の十二日には殆どの新聞が大きく紙面を割いて報道していました。

私は直ぐ上の上司だった関係以上に、奥さんと先妻の喜美子が同じ職場の同僚で親しかったこともあつて、家族ぐるみのお付き合いをして来ました。一年前に肺がんが発見された時も、ご本人の希望で極秘扱いにされていましたが、私は早い段階からご相談を受けたりしていました。川崎にお住まいで遠くにいますものですから、お見舞いにもこの四月に一度伺つたのみでした。危ない、と伺つてからは、お世話になつた方なので万一の時、本来は何を置いてもお参りに伺うべきなだけで、茂木兄の「年を取つたら（風邪を）引くな、転ぶな、義理を欠け」を思い出して、弔電と現金書留でのお香典だけで勘弁して頂く、と準備していたのです。ところが間際になつて奥様から、弔辞を読んでくれ、と言つ依頼があるではありませんか。弔辞を依頼されたら断るものではない、光栄だと思つて受けるべきだ、と言われます。殆ど二つ返事でお受けすることにしましたが、その三日後くらいに、いけなかつた、との連絡があり、翌日発つて上京しました。

急な上京と言うのは私にとっては大変です。普段は二ヶ月前に発売される格安料金の航空券を利用しているのですが、今回は翌日の便を予約せねばなりません。全日空に聞いたら片道四万円というのでビックリ。安売りだとその四分の一程度なのです。若しやと、思つてスカイネットと言う何時も使っている航空会社のシニア割引を聞いたら一席だけ空いているとのことで、ラッキーでした。

葬儀はご本人の希望に従つて、関学のグリークラブを中心にした無宗教の音楽葬で執り行われ、こじんまりした会場でしたが、サッカー関係の弔問客を中心に溢れかえり、その世界では大変な名士であることが窺えました。元会長の岡野俊一郎氏、名誉会長の川淵三郎氏も参列していて、これらの人達の前で弔辞を読んできました。サッカー協会側からは、村田さんが一番可愛がっていたと言う釜本邦茂氏がやりましたし、FIFAのアベランジェ会長やアジアの連盟会長など世界中のサッカー関係者からのメッセージが数多く届いていました。

新年早々不適切な話題で、且つ皆さんには何の関係もない方の話ですが、私の記録と

して残すため、弔辞の全文をご披露することをご容赦下さい。

『故村田忠男さんのご霊前に哀悼の辞を述べさせていただきます。』

村田さんとこんなに早くお別れすることになるうとは思っていませんでした。ご病状を伺いながら、遠く長崎にいるものですから、お見舞いも思うに任せず、この四月に一度伺ったのみで、失礼してしまいました。その時はご病気とは思えないほどお元気そうだったし、この七月には三菱重工修繕船部OBの定例の会にも出席されたと伺っていましたので、スッカリお元気になられたものと思っていましただけに大きな衝撃を受けています。奥さまに伺いますと、最愛の奥さま、奈々ちゃん、麻紀ちゃんの暖かい看護を受けての大变に安らかな大往生だったとのことですので、そのみが救いのような気がしています。

村田さんは三菱重工では修繕船営業から香港やロンドンの駐在員、長崎造船所の船舶営業部長、化学プラント事業部の部長と要職を勤められましたが、基本的には修繕船の

村田さんでした。船舶事業本部の大所帯の中で、修繕船部は金額的にはマイナーな存在でしたが、一人一人の担当者が五つの工場の毎日の仕事を埋めて行く、言葉は悪いけれども、工場を食わせていると言つ、ある種町工場の社長みたいな気概と誇りを持って仕事をしていました。村田さんはその先頭に立つて我々をリードして下さいました。私は六歳下の後輩として、直接ご薫陶を受ける機会が多かったです。個々の仕事についてのご指導は勿論ですが、同じ独身寮では私が入社した頃は既に大御所的存在でしたし、私が香港やロンドンに駐在した時も、その前任の駐在員が何れも村田さんだったので、村田さんが培つた人脈を大いに活用させて頂いたものです。

村田さんと言う方は、何処へ行つてもその中にピッタリ納まる人でした。新橋のガード下の焼鳥屋で焼酎を飲んでいる時も、ロンドンのサボイ・ホテルのレストランで鮮やかな手つきでナイフとフォークを扱つておられる時も、ピカデリーのロイヤル・パレスのパーティでタキシードを着ていても、良いカタチで堂々としてその雰囲気にはピッタリで素敵でした。五〇年近く前、村田さんご夫妻のご結婚式に出席させて頂いた時、

当時直属の部長さんが仲人を勤められたのですが、ご挨拶の中でこんな話をされたのを覚えています。当時合併前の新三菱重工は神戸に本社があったのですが、これを東京に移すことになり、村田さんが先発隊の一員として一足先に上京されたのだそうです。数カ月後、本体が上京して来たら、村田さんはもうサッカー東京の生活に馴染み切っていて、言葉まで変わっていた、と言うお話でした。どんな場にもスンナリ入って行って溶け込んでしまう能力を持つておられる村田さんらしい逸話です。また、若い頃、サッカーの関係でマレーシアの建国の父と言われたアブドル・ラーマン首相とのお付き合いの話がされていたことがありますが、そんな偉い方とのお付き合いの場でも臆せず物怖じせずに堂々と付き合っておられたのだろうな、と言うことが容易に想像出来ました。やはりこうした態度は、自分の中に芯があり、自信があるからこそ自然と出て来る態度だったのでしょう。こうした面でも多くのことを教えて頂きました。

サッカーの分野でのご活躍ぶりはお関係の方のご紹介に譲りますが、第一線を退かれてからは、知的障害者のサッカーに取り組んでおられました。私がハウステンボスで知

的障害者関係のお手伝いをしていたことがありましたが、その関連で、一緒に仕事をしよう、手伝ってくれ、と言っておられたことがありました。遠くにいて結局は満足にお手伝いが出来ないままになってしまったのを残念に思っています。

重ねて申し上げますが、あんなにお元気で、有能で素敵だった村田さんとこんなに早くお別れすることになるうとは思ってもいませんでした。でも、生前、奥さまに「自分は好きなように生きた」と仰っていたことがあったそうです。その場その場で、その時その時を、その日その日を真面目に一生懸命に生きていればこそ、こういう言葉が出て来るとかと思っています。こういう言葉をせめてもの慰めとして、謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

遺された奥さま、お嬢様方には難しいこととは思いますが、一日も早くこのショックから立ち直られて、お元気に過されることを心から願っています。

村田さん、さようなら。』

(平成二十一年十二月二十日)

「上等人々」

市販はされていないと思うのですが、アルクと言う出版社から出版されている「セブ
ン・シーズ」と言う超豪華な月刊誌があります。ハウステンボスの営業をやっている頃、
この女性記者の取材を受けたことがあって、その時、お世辞半分に「とても綺麗な本
だ」と褒めた所為か、その後、その記者から毎月送って来るのです。勿論、無料で頂い
ていますが、年間の購読料が三万千五百円と書いてありますから、ご想像戴けるように、
上質の紙を使い、立派な装丁の綺麗な写真中心の本です。如何にも選ばれた上流階級
金に糸目を付けず、素敵な家に住み、良いものを着て、美味しいものを食べて、優雅
に暮らしている人たち　を対象とした本なので、抵抗を感じる部分もあるのですが、
なにしろ綺麗な本だものですから捨てる勇気がなく、事務所の引越しの度毎に「重いな
ア」と思いながら持って歩いてるので、もう六〇冊もバック・ナンバーが揃ってしま

っている、と言う代物です。各号毎に何かテーマを作って特集する、と言う編集をしています。最近では外国の観光地を選んで特集すると言うケースが多いようです。写真を見ながら、興味のあるところを拾い読みする程度なのですが、最近必ず楽しみに読むのが、安倍寧と言う人が連載している「上等な人々」と言うエッセイです。この人は音楽評論家で、現在劇団四季の取締役をしている人ですが、この人が接した上等な人々のエピソードみたいなものを紹介しているもので、これがキラリとしていて仲々良いのです。

プロローグとして

世の中には二種類の人たちがいる。

普通の人たちと、上等な人たちと。

ものにも、同じように、普通のものとう等なもの二種類がある。

上等な人びとはよく上等なものを知る、というべきだろう。

私は、普通の人びとのひとりとして、

上等な人びとと上等なものにあこがれ続けてきた。

これは、私が幸いにも垣間見た、

上等な人たちと上等なものの物語である。

と書いています。何となく洒落ているではありませんか。

二・三紹介してみますと・・・

朝日新聞の「天声人語」を書いていたコラムニストの故深代淳郎さんも上等な人に上げられている人の一人です。深代さんは一九七五年に四十五歳の若さで亡くなっていますから、彼が天声人語を書いていたのは二年間ほどだったそうですが、「決してヒューマンな視点を忘れず、日本人ジャーナリストには希有のユーモア感覚の持ち主だった」と評価しています。これも朝日新聞の名作家として知られる大先輩の門田勲氏との気持ちの良い付き合いとか、昔、銀座六丁目にあった「レンガ屋」の話とか、私がロンドンにいた頃良く使っていた日本料理屋「HIROKO」の話など、懐かしいレストランの話も出て来ます。深代さんと言う人は、私がロンドンに駐在していたのと前後して、朝日

新聞のロンドン支局長をしていられた、とのこと、懐かしいロンドンの話が、軽く、それもお洒落に出て来るので、面白くて読み始めたのが私がこの連載エッセイに興味を持った一番の原因かも知れません。そう言えば、朝日新聞にはこうした名文家を育てる場があるのだろうか。私は長いこと朝日新聞の読者でしたが、往々にしてニュースの取り上げ方がエキセントリックと言うかヒステリックになるので腹が立って、二・三年前から読売に変えています（ナベツネが嫌いになって、最近また日経に変えました）が、時々比較してみると、朝日の文章の方がキリッとしていてセンスがあって気持ち良く読めるような気がします。時事コラムや時事漫画のセンスは、これはもう比較の仕様がなほほどの差があります。また、朝日新聞に戻ろうかしらん。・・・閑話休題

ジャック・ダニエルズの黒とフランク・シナトラの話。フランク・シナトラと言う人は、かなり日本贖戻だったのか、何度も日本で公演しています。一九六〇年の初来日以来、一番親しい間柄だったと言われる人にカルティエ・ジャパンの社長だった大伴昭と言う人がいるそうです（夫人が芳村真理さん）。安倍さん自身はシナトラと直接交友

があつた訳ではないのですが、大伴さんに聞いた話として、シナトラのことを何回か書いています。シナトラがこよなく愛したものは、バーボンのジャック・ダニエルズの黒と中折れ帽だつた。帽子の被り方が何とも粋だつた、と言います。確かに普通の人がやるとキザになるところを、シナトラ辺りがやると粋になるのでしようね。それと毎晩、ジャック・ダニエルズの黒の水割りを欠かさなかつた、と言います。バーボンと言つのは、原料にトウモロコシが五〇%以上入っている蒸留酒のことで、ジャック・ダニエルズはこのバーボンの仲間に入るので、これを好きな人は、断じてバーボンではない。テネシー・ウイスキーなんだ」と主張するのだそうです。何でもテネシー州で作られ、同州産の楓の炭で濾過するところが普通のバーボンと違うのだそうです。シナトラは日本ではまだジャック・ダニエルズが手に入らなかつた頃は、自分で持つて来て、バーに行つてもこれで水割りを作らせていた、と言われます。そう言えば、三〇年以上前に付き合つたアメリカの船会社の重役で、ジャック・ダニエルズ、ジャック・ダニエルズと叫んでいる人がいました。水割りの作り方も厳格で、昔ながらのロック・グラスを

使い、アイスキューブを三つか四つ。ジャック・ダニエルズの黒はトゥー・フィンガー分。間違っても濃過ぎてはいけない、とか。少tasノビッシュだけど、こつしたこだわりのりも上等な人の特徴なのでしょうか。

ソニーの盛田昭夫さんとの付き合いも深かった様で、盛田さんが亡くなってからは、彼のエピソードが続きました。盛田さんがソニー商品をアメリカで売ろうとした時に、自らニューヨークに家族ぐるみで移住されたことは良く知られた話ですが、住居と決めたのが最初からニューヨークのど真ん中、五番街のメトロポリタン博物館の前のマンシヨンだったそうです。「テン・テン・フィフス（五番街一〇一〇番地）」なんて言ったら、ニューヨーク住まいだった大野木兄なんか懐かしがるのだろうか。大賀典雄さんは盛田さんを評して「Born King, Born President だった」（生まれながらの王様であり、社長として生まれて来た人）と言われたそうですが、最初から一流を目指し、住居にも一等地を選んだと言つのもその現われではないか、と言つことです。ここに毎晩のようにビジネスの関係者を招んでパーティをやり、家族ぐるみでご接待することから始めた、

と言われます。ブロードウェイ・ミュージカルやオペラに無知だと、そんなパーティーやビジネス・ランチの席での話題にも事欠く、と言うことで、この面の勉強も始められ、ミュージカルについては、日本で最も詳しい人の一人になっておられた由。森繁の「屋根の上のバイオリン弾き」については、オープンの前から大ヒット、ロングラン間違いなし、と予言されたそうで、理由は主人公のテヴィエがユダヤ人で、日本人と感覚が合う部分がある、と言うことだったそうです。劇団四季がシェクスピアの「ベニスの商人」を公演することになり、オープニング・パーティで盛田さんが乾杯の音頭を取った時、「ご指名に預かった理由は、私がユダヤ人に一番近い日本人だったからでしょう」と挨拶されて大受けだったエピソードなんかも紹介されています。ユダヤ人は金儲けのためなら何でもやる人種だ、と言う印象に受取られているが、契約を尊重する合理主義者なのだ、と言うことを知っていられたからだろう、と言うことでした。

亡くなった慶は、珊瑚の諸兄姉とのお付き合いをとても喜んでいました。仲間に入れて頂いていることを誇りにしていた、と言う言い方が正しいのかも知れません。諸

兄弟とお付き合いをさせて頂いた後には「上等な方々とお付き合いが出来た。上等な男性方とお話が出来た」と言つのが口癖みたいなものでした。岡崎信夫と言つ最上級の上等な亭主を早くに亡くし、二〇年以上も一人で暮らして、キツと嫌なお付き合いや上等でない人との付き合いも沢山あつたに違いありません。その中で、珊瑚の諸兄弟とお付き合いと言つのは、彼女にとって、一服の清涼剤以上の、もっとも大切なものだったのだらうと思います。

(平成十二年十二月五日)

「じゃがたらお春の消息」

じゃがたらお春については、皆さんもご存知のことと思います。キリシタン追放令によつてインドネシアに流され、異国で遊女同様の生活を強いられて、日本恋しやの望郷の念を持ち続け、悲惨な最期を遂げた、という理解ではないでしょうか。これは事実とは異なる、と言つ検証をした表題の本を読みました。

長崎楽会というグループがあります。長崎の歴史を学ぼう、と言つ人達の集まりで、

東京在住の長崎出身者が中心ではありますが、長崎出身者に止まらず、この目的に興味を示す人が集まって来ていて、今や会員数が六〇人とか七〇人になっています。二年ほど前、誘われて私も入会しました。月に一回、定例の勉強会を開き、交代で勉強の成果を発表し合う真面目なグループです。例によって、勉強会の後は飲み会になり、そちらの楽しみの方が大きくなる、と言うのはこの種のどこのグループにも共通の現象のようです。在崎の会員は少なく、私も毎月出席するなんてことはおよそ不可能ですから、年に三・四回の上京の際には例会の日取りを念頭に置きつつ予定を作り、出来れば出席することにしています。二年間で三・四回の出席ですから、優秀な会員とは言えません。誘ってくれた人は、ハウステンボスも長崎の歴史になりつつあるので、その内に何か喋れ、と言いたいのではないか、と理解しています。

会員の中に白石広子さんと言う方がいて、この本はこの方が書いたものなのです。白石さんはご主人の仕事の関係で、二度に亘って足掛け八年ほどインドネシア暮らしをされた方ですが、ジャカルタの歴史を勉強している内に、じゃがたらお春に対して我々が

抱いてきた常識に疑問を持ち始め、調査の結果、定説とは全く異なる結論に達したので、この辺の手法が、まるで探偵小説を読むように面白いので、ご紹介してみようと言
う訳です。

我々が持つじゃがたらお春のイメージは 赤い花なら曼珠沙華 に始まる流行

歌「長崎物語」の歌詞によって作られた部分が大きいのではないだろうか。若い身空で
異国に流され、日本に帰りたい、帰りたいと言う思いが切々と唄われた名歌の一つなの
で、今でもカラオケで歌う人が多いのではないだろうか。この歌詞の元になったのは
江戸時代初期に西川如見と言う学者が紹介した「じゃがたら文」と考えられています。
「じゃがたら文」もかなり有名で、特にこの辺りの一寸した歴史博物館に行くと「じゃ
がたら文」の「コピー」が展示されています。かなり長いものだし、ガラス越しで見難いし、
筆書きの行書体の字も読み難いものですから、全文を読んだことはありませんでした。
お終いの「あら日本恋しや、ゆかしや、見たや見たや」の部分だけが強調されているの

で、可哀想な人がいたものだ、と言う印象のみが残ります。

白石さんの疑問はこの「じゃがたら文」に始まります。この本でも最初に紹介されているので（勿論活字体で）、私も殆んど初めて全文を読んでみたのですが、美文調のそれはそれは立派な文章なのです。枕詞や掛け言葉を駆使し、きちんとした自作の和歌を挟んだり、伊勢物語の古歌を引用したりして、日本恋しや、の気持を切々と訴えています。十五の若さで異国に流され、遊女同様の生活をしている女性にこんな文章が書けたのだろうか、という疑問を白石さんが持ったのも当然だと思いました。白石さんは、お春が実在の人物だったのか、と言う点と、お春のジャカルタでの生活が実際はどんなものだったか、と言うことを探り出そうとします。

白石さんはジャカルタの国立文書館に通って資料を集め、残されている婚姻証明書などの公の文献や周囲の人の記録などから、お春が実在の人物であることを検証して行きます。イタリア人の父と日本人の母との間に生まれ、長崎で育ちましたが、十五の歳で徳川幕府の出した鎖国令（混血児追放）に従って三十七歳の母、三つ年上の姉共々一六

三八年一〇月に三〇人余りの人々と一緒に平戸発のオランダ船でジャカルタに流されたのは事実のようです。一六三三年に始まった鎖国政策は天草四郎の島原の乱（一六三七年）の影響もあって、年を追って厳しいものになっていきますが、一六三九年には完了したそうですから、お春はその最後の頃に引つ掛かったということのようです。

ジャカルタでのお春の生活についての検証が面白い。色んな証拠を集めて、周囲から検証して行きます。二十二歳で平戸生れのオランダ人の混血児と結婚し、七・八人の子供に恵まれて決して悲惨な生涯を送っていた訳ではない、と結論付けています。一番の証拠が七十二歳で死んだお春が残した遺言状にあるのですが、この遺言状によって、二五年前に亡くなったご主人の財産を自分の力で増やすことすらして、相当な資産家になっていたことが判っています。姉が嫁いだ姉婿に対する恋心みたいなものも見えて来て、経済的にも精神的にも決して不幸ばかりの生涯ではなかったことが窺えます。

西川如見が紹介した「じゃがたら文」が偽作ではないか、或いは如見の創作ではないか、と言う議論は昔からあったようですが、白石さんはこの議論をハッキリ後押しして

います。如見が何故こんなことをしたのか、その動機が明確になると面白いのに、と思
いました。幕府と言う権力のお蔭で民衆が如何に悲惨な目に遭わされたか、と言うこと
を言いたかったのかも知れないし、男尊女卑の封建制度の下では女性はか弱くてあわれ
でなければならず、男性に従属する存在でなければならぬ、と言いたかったのかも知
れません。更にその当時、「華夷意識」つまり、日本以外はすべて蛮人の住む世界であ
り、日本を出ることは悲劇以外の何物でもない、という考え方が一般に流布していて鎖
国政策と共に浸透していた、と言う事実があります。この意識なるものは、丁度、如見
の時代に高まりを見せ、元禄文化などが生れて行った経緯もあると言われるから、こ
の意識を助長する目的があつたのではないか、という見方もあるようです。

白石さんは、そんな時代にでも、強制的に流された異国の中で、強く逞しく生きてい
た女性がいたことを紹介することで「我々にそういう逞しい日本人の子孫であることを
示唆してくれる」という結語に結び付けています。

この本は勉強出版社の遊学叢書として発刊されています。良かったら本屋で探してみませんか。

(平成十六年七月)

「世界に示した不屈のロンドンっ子魂」

本稿は、まず私の入院中の玉川哲生兄のご厚情に対するお礼から始めなければなりません。鹿児島財界の重鎮として超多忙な毎日の中を、たった小一時間の面会のために往復一〇時間以上もかけて二度も見舞いに来て頂き、本当に感謝しています。二度目は馬場兄と予定を合わせて来てくれました。馬場兄も遠く神戸から良く来てくれた、と感謝しています。このときは、丁度東京から娘と孫が着いてしまったので、三〇分足らずしかお目にかかれなかったのではなからうか。誠に申し訳ないことをしたと思っています。友達とはありがたいものだ、と言うことを改めて感じたことでした。改めて厚くお礼申し上げます。

二度目に来てくれたときの帰り際に、カバンの中から出して、置いて行ってくれたの

が、表題の切抜きの記事のコピーでした。これは「世界週報」にJICAの英国事務所長が書いたもの。「こんな記事は君が好きなんじゃないか、と思って持って来た」とか言って、何気なく置いて行ってくれたのです。

この記事は七月にロンドンで発生した、同時爆破テロ事件に対する英国国民の反応について書いたものでした。こうした事件に対する英国国民の反応が、ニューヨークの九・一一事件や昨年のマドリッドでの同種の事件の反応と全く違ったものであった、と言っことを紹介したものです。私も主に仕事を通じて多くの英国人と接触する機会を得、62 たった二年ですけど英国人の中で過ごす機会を得た者として、英国人を大人の民族として尊敬している人間の一人ですが、この記事に描かれている英国人像が、私のイメージとあまりにピッタリしているので、孫引きながら内容をご紹介します。みようとしたいと思います。

この事務所長は、事件直後の英国人の反応が他の国の場合と違う点を三点上げています。

その第一は事件直後の危機管理対応の見事さです。その日はスコットランドのグレ

ン・イーグルでのサミットの初日で、ブレア首相はロンドンの官邸には不在だったわけですが、副首相が直ちに戦時内閣という緊急時の組織を立ち上げ、関係閣僚や諜報機関の幹部、警察庁長官などを招集して、対応策を即座に決定したそうです。軍隊と警察の出勤、近郊からの救急車の応援と救急病院の体制作り、かかり難くなった電話の回線の一部を緊急連絡用に割り当てたり、近くのホテルを怪我人の受け入れ用に接収したり、スーパーマーケットのショッピング・カートを医薬品の運搬用に使ったり、これらは皆、予め想定されていたマニュアルに基づいたものだったそうです。日本だったら、自衛隊の出動すら問題にされ、縦割りの法体制に縛られて、こんな非常の際にも個々人の自由とやらが尊重され、系統立った対策が採られなかったのではないだろうか。

第二に上げているのが、負傷した一般市民の反応です。インタビュー報道なんかを見ても、ニューヨークやマドリッドみたいに、恐怖に泣き崩れたり、ヒステリックに叫ぶ人を表に出す報道が少なかつたと言います。顔から血を流した人が、毅然とした表情でインタビューや写真撮影に応じていたり、血まみれのシャツを着たサラリーマンが普段

どおり新聞とミネラルウォーターを抱えて出勤する光景が報道されていたそうです。英国人は敵から攻撃を受けると屈強に抵抗する国民性を持ち合わせている、とも書いています。第二次大戦のナチの空爆に耐えたり、長年に亘るIRAのテロ攻撃に耐え抜いたロンドン・プライドを持ち出し、「決して降伏するな、我々の精神はくじけない」という当時のチャーチルの言葉まで引つ張り出して、こんなことでくじけたら第二次大戦に耐え抜いた先祖に申し訳が立たない、なんて新聞の論調も目立ったそうです。この辺は、マスコミの取り上げ方も知れませんが、日本だったら、情に訴えるセンサーシヨナルな報道が目立って大騒ぎになったに違いありません。ロンドンにだって大騒ぎしてヒステリックになっている人も大勢いたんだろうけど、そんな中で、こうした毅然とした姿勢を報道しようとしたのは、やはり英国人の気質を示すものではないでしょうか。

三番目上げているのが、この事件をきっかけにイラク派兵撤退の世論が全く起きていない、ということですが。英国人は今回のテロとイラク派兵とを結び付けておらず、このテロはあくまで英国人に対する攻撃と考えていると言います。元々多くの英国国民は

イラク派兵そのものに反対しているのではなく、ブレア首相が大量破壊兵器の存在に関して国民に嘘をついていたのではないかと疑っていたのであって、そのブレア首相も、今回のテロへの毅然とした態度で人気を盛り返している。テロリストの狙いは完全に外れてしまった、とも言っています。日本だったらどうでしょう。マスコミもさることながら、まず野党の連中が鬼の首でも取ったように騒ぎ立て、外交問題を内政に利用しようとする得意のパターンが始まって、現政権の非を訴え、派兵撤退を叫んで大騒ぎをしたに違いありません。

私は十一年前に、フランス人のアンドレ・モーロアという人が一九三七年に書いた「英国史」という本の読後感を書いて本誌で紹介したことがあります。一般的に、フランス人は英国人が嫌いなのですが、このフランス人は英国人が好きで、その資質を尊敬しています。一九三七年といえばアメリカが超大国として出てくる前の大英帝国の時代ですから、英国の力の源泉を、当時英国が持っていた圧倒的な軍事力や政治力に求めても良かったはずなのに、このフランス人は、その力を一人一人の英国人が持っている国民

性に求めています。「長い歴史を通じて、英国人が多数の決定には規律正しく従う習慣を持つている。表面的には対立しても根深い拳国一致の精神を持ち続けている」と書いています。そして「イギリス国民の力は、粘り強い、自信のある、親切な、その鍛えられた性格の中に潜んでいる」と結んでいます。

玉川兄が持つて来てくれた表題の記事には、七〇年近く前に書かれた英国人氣質がそのまま書かれているような気がして、深い感動を覚えましたのでご紹介することにしました。

(平成一七年九月二日)

66

天正遣欧少年使節

長崎空港は大村市にあります。空港を出て国道に出る少し手前に、四人の若者の銅像があります。碑面に「天正遣欧少年使節四百年記念」と紹介してあります。天正遣欧使節については、信長・秀吉の頃、キリシタン大名だった豊後の大友宗麟や大村藩主や島原半島の有馬藩主が自分の縁戚の若者をローマに送ったことがあった、程度のことは

知っていましたが、日本のキリシタンの歴史は何だか暗くて、悲惨な話ばかりなので勉強する気がせず、それ以上のことは調べたことがありませんでした。

昨年二月に玉川ご夫妻のご案内で、霧島に行った時、玉川兄の運転で、宮崎の綾町まで連れて行ってくれました。綾城を見物したとき、天正遣欧使節の中の一人、伊東マンショがここから出た、と言うことで、お城の展示コーナーに一寸した遺品みたいなものが飾ってありました。綾城は伊東一族のものだったが、薩摩の島津氏が、日向の界限を平定したときに、追い払われて、縁戚関係にあった豊後の大友家を頼って落ち延びた、と言った紹介だったと思います。四人の使節の内の残りの三人は、長崎出身で、それも私が住んでいるこの界限から出た人たちらしい、と言うことで、その後、少し齧ってみることにしました。

取っ掛かりに利用したのが、インターネット。歴史に詳しくそんな友人に頼んだら、そのルート経由で調べてくれて、色んな資料を紹介してくれました。相当学術書的なものもありましたが、その内、読み易そうなものを三冊ほど手に入れて読んだので、今日は

このことを紹介しようと思います。

この使節が日本を離れたのは、一五八二年二月と言いますから、信長が本能寺の変に遭う年です。私は、この使節団はキリシタン大名たちが自発的に自分の親族をローマに送り出した、と言う印象で捕らえていたのですが、実は色々裏の事情があったようです。カソリックのイエズス会の宣教師でポルトガル人のヴァリニヤーノと言う人が、中々意欲的な人で野心家だったらしく、日本担当の責任者になってから、色々と布教の方策を打ち出して成果を上げた人らしいのですが、自分の日本での任期が切れる直前になって、この大事業を考え出した、と言われていきます。目的は二つ。一つは遠路日本からの使節をローマの教皇に会わせて、日本への布教に対し理解を求めること。平たく言えば、布教のための予算を増やして貰うことだったのでしょう。二つ目は、出来るだけ若い日本のキリシタンにヨーロッパの当時のキリスト教文化の素晴らしさを見せ、感動して帰って貰って、その素晴らしさを日本人に知らせてもらうことにより布教のスピー

ドを上げよう、と言うものでした。急な思いつきのことですから、使節団の構成もかなりいい加減なものになります。当時、イエズス会のセミナリオが安土と長崎の島原半島南部の有馬にあつたそうですが、一カ月後に長崎を出る船に間に合わせるためヴァリニヤーノが考えたのは、近くの有馬のセミナリオから団員を選抜することでした。日本の代表として送り出す訳ですから、家柄も正しくなければなりません。こうした事情の下で選抜するのですから、かなり無理もあつたようです。正使は伊東マンシヨと千々石ミゲル。伊東マンシヨは、日向で島津家に追い払われ、縁戚関係にあつた豊後の大友氏のところに身を寄せていた伊東家の縁戚ではあるものの、大名の後継ぎと言う訳でもないのですが、大友家の縁戚のその又縁戚に当たると言うことで、これを大友家の名代に仕立てて正使にしました。千々石ミゲルはそれでも一番由緒がハッキリしていた人らしい。大村家と有馬家双方に縁が繋がっていた武士だったようです。この人を大村家と有馬家の名代とし、いずれもキリシタン大名だった三人の殿様からローマ教皇宛のご挨拶状を持たせました。マンシヨの方は、豊後まで書状を貰いに行く時間もないもの

ですから、現地でゴーストライターが書いたようです。副使が、ここですぐ近くの波佐見と言つところから来た原マルチノと、外海(そとめ)と言われる西彼杵半島の外海(そとみ)に面した小さな村から来た中浦ジュリアン。この二人は庄屋の息子と下級武士だったようですが、家柄は悪くなかったのでしょう。使節全員の旅行中の立居振舞は中々立派だった、とのこと、この使節団が高い評価を受ける理由の一つになっていきます。セミナーオで、語学(当時はラテン語を勉強していた)が出来たから選ばれたという要素もあつたのではなかつたでしょうか。四人とも十三才か十四才の若さでした。この他に、従者として五十才台のロヨラと言つ神父とドラードと言つ二十才代の記録係が同行しています。いずれも日本人で、ロヨラ神父などは、ラテン語が出来た上に、立派な日本語の書を残しているそうです。当時の日本の教育レベルも大したものだったことが判ります。ドラードの方は、ポルトガル人との混血児だったようで、ポルトガル語と日本語が自由に使えるので、選抜の理由になつたのではないのでしょうか。

この一行が一五八二年の二月に長崎を出てローマまで往復するのですが、日本にはそ

の記録が全く残されていないのです。使節団が帰って来るのが八年後の一五九〇年。信長の外国人好きは知られていますが、その信長は一行が日本を離れて四カ月後、まだ、マカオ辺りでウロウロしている頃、本能寺で殺されてしまい、その後、秀吉の天下になります。秀吉は一五八七年にバテレン追放令を出してキリシタン禁制の世を作ります。ですから、一行が帰って来た頃は、キリシタンにとっては誠に住み難い世の中になっていた訳で、一行は正に数奇な運命を辿ることになります。使節が持っていた二つの目的は十分に達成されたのですが、それを公にする場が与えられることはなく、一行が苦勞71して持ち帰った記録なんてどこかに散逸してしまっただけでしょう。ですから、この使節の記録は、外国の各地に残されたものを頼りにする他ない、と言うことになります。

まず、二〇日足らずの航海でマカオへ。ここで一〇ヶ月ほど船を待つて、十二月にマカオ発、次は四ヶ月掛かってインドのコチン・ゴアへ。ここで一〇ヶ月待つてコチン発、インド洋を超え、アフリカの南端を回り、五ヶ月掛かってアフリカ大陸の西にあるセント・ヘレナ島へ。ここで一休みしてから、ポルトガルのリスボンに着くのは、日本を出

てから二年半後の八四年八月のことでした。慣れぬ船旅ですから、船の上での苦勞は大変なものだったらしいのですが、欧州大陸に上陸してからの先方の待遇は悪くなかったようです。件のヴァリニヤーノ神父はインドまでしか同行できなかったのですが、同師の依頼状が各地に届いていて、ポルトガル・スペインでは各地で大変な歓迎を受けています。リスボンに上陸後、陸路トレド・マドリードを経て地中海側のアリカントと言う港まで行き、ここから船に乗って、イタリアのリヴォルノに上陸し、ピザ・フィレンツ工經由ローマに入ったのが八五年三月。日本出發後三年一ヵ月後のことでした。当時のローマ教皇はグレゴリオ十三世と言う方でしたが、この方に大変な歓迎を受けることになりません。グレゴリオ十三世は八十四才と言う高齢で、使節の到着を待っていたように、一行を謁見した一八日後には亡くなってしまふのですが、その遺志が次の教皇のシスト五世に引き継がれます。グレゴリオ十三世の葬儀の式典やシスト五世の戴冠式で一行は重要な役割を演じ、それが中々立派だったと言つこともあって、その後の各地での歓迎振りはどんどんエスカレートして度を越したものになつて行きます。前の町での歓迎を

上回る歓迎をせねばならぬ、と言った調子でボリユームが上がり、六月にローマを出て、ボローニア・ヴェネツィア・ミラノを経由してジェノバまで、この歓迎合戦が続いたと言われます。ジェノバから海路バルセロナまで行き、陸路リスボンに戻ったのが八六年一月のことでした。

リスボンを出たのが、その年の四月。アフリカ南端の喜望峰を回って、アフリカ東岸のモザンビークへ。大変気候の悪いところだったそうですが、ここで半年以上船と風を待っていた、と言いますから、当時の航海が如何に大変だったか、が判ります。二ヶ月でインド洋を横断してインドのゴアに戻ったのが八七年五月のことでした。一行が日本に戻ってくるのが一五九〇年七月のことですが、この三年間は世の中が変わってしまった日本に無事に帰れるかどうか、の様子見の期間だったと思われる。ゴアで一年三月、マカオで二年足らずを費やしています。

八年二ヶ月と言う大変な旅行をして帰ってきたものの、一行のその後は恵まれたものとは言えません。翌年の九一年春、一度秀吉に謁見の機会は与えられましたが、その後

は受難の日々。千々石ミゲルは早々と棄教してしまいます。伊東マンシヨは一六一三年に長崎で病没。原マルチノはドラードとともに一四年にマカオに流刑となり十五年後ここで病死。中浦ジュリアンはローマで病気をしていたせいで、教皇グレゴリオ十三世に一番大切にされ、思いも深かったせいでしようか、最期まで苦しい布教活動を続けましたが、三三年に六十四才で凄惨な殉教を遂げます。

遺跡を訪ねて見ました。正使の伊東マンシヨについては、一応、綾城を訪れていますので、後はこの近くの出身の人ばかりです。もう一人の正使の千々石ミゲルの出身地は、島原半島の付け根の千々石です。日露戦争時の軍神橋中佐を祀った橋神社と言つのがあって、この神社のすぐ近くにあるのが何となく面白いと思いました。山の上に小さな碑がありました。探すのに苦労しました。標識も不完全だし、土地の人も良く知らないみたい。知っていても、教え方も何だか不親切。初志を貫徹できず棄教した人、として地元でも評価されていないのではないかと勘ぐりたくありません。副使の原マルチノの出身地は、これもこの近くの波佐見と言つところです。マルチノはラテン語が一番

出来て、帰ってきてからヴァリニヤーノ師にラテン語で立派な報告の演説をしたと言われている人ですが、波佐見にはこの人の記念の遺跡は何もない、と言ったことでした。もう一人の副使の中浦ジュリアンの出身地は家から一番近くて、西彼杵半島の外側、外海と呼ばれるところです。こちらは観光の呼び物の一つとして大事にしている様子が伺えました。記念碑もすぐに判りましたし、新たに銅像を作って公園を作ろうとしていました。この近くを散歩していたら、JRハウステンボス駅の近くで偶然、ジュリアンの父親が戦に負けて切腹したところ、という碑を発見しました。四〇〇年前にはこれらの人たちがこの辺りをウロウロしていたと言ったことです。何だか歴史が身近なものに感じられたことでした。

大村空港の前の銅像は、この使節が長崎を離れた一五八二年から四〇〇年目の昭和五十七年に建てられたものです。

(平成十四年二月五日)

藤原 正彦

昨年八月三日に退院して間もなく、私の入院中に同じ胆管ガンでご主人を亡くした川口夫人から小包が届きました。開けてみると藤原正彦のエッセイ集「若き数学者のアメリカ」「数学者の言葉では」「数学者の休憩時間」「遙かなるケンブリッジ」「父の威厳 数学者の意地」「心は孤独な数学者」「古風堂々数学者」の七冊の文庫本が入っています。「主人が入院中に面白がって読んでいたので送ります」という丁寧な手紙が付されていました。

藤原正彦のエッセイは大分昔に一冊読んだことがあります。右の「若き数学者のアメリカ」で、この本は一九七八年の日本エッセイスト・クラブ賞を受賞しています。モノの見方が面白く、表現が豊かでユーモアのあるエッセイだな、と思って読んだ記憶があります。藤原正彦という人はお茶の水女子大学の数学科の教授。数学者なるものが何をしているのか、この人が本業でどんな力があるのか、数学の世界にどんな貢献をして来たのかは知りませんが、その後もエッセイを書き続け、現在ではこの七冊に集約されているようです。そう言えば、我々の時代の一橋大学にも佐藤弘人とか言う経済学者がい

て、色つばいエッセイ集を出して本業よりも有名な先生がいましたっけ。

今回初めて知ったのですが、この人は作家の新田次郎と藤原ていの次男とのことです。新田次郎は幾つか読んだことがあります。藤原ていの本は読んだことがありません。正彦氏がエッセイを書き始めたのも、新田次郎が勧めたものらしく、書いたものを読んだ父親に褒められて自信を付けて出版社に持ち込んだものらしい。最初は親の七光りの部分もあったのかも知れませんが、やはり文章については血筋がシツカリしていたということになるのではないだろうか。正彦氏自身は、幼少の頃からかなり腕白の問題児だったらしく、外で事件を起こして帰って来ることが多かったらしいのですが、帰ってからは、その事件の詳細を親父の新田次郎が詳しく話させた、と言います。その場の環境とか状況などに始まって、事件の内容からその時の自分の心理状態、相手の様子、周囲の人の反応などを詳しく。これが親父の小説に利用されたこともあったと言いますが、こうした訓練を経て、自分の周りを見る目が育まれ、細かいところまで気の回る鋭い感性を持ったエッセイストに育って行ったのではないか。これはやはり親父の一種の教育の

然らしめるところだったのではないでしょうか。

元々興味のあつた本だし、川口が亡くなる直前まで読んでいた本、という事で、早速取り掛かりました。手に取ってみると全く汚れていないきれいな本なので、後日、夫人にお目にかかったとき「川口という人は、ずい分綺麗に本を読む人だったんですね」と尋ねたら、「トンでもない」とのこと。川口の本の読み方は、必ず赤鉛筆とボールペンなど三本のペンを持って、気に入った部分には線を引いたり、コメントを書き入れたりしていたそうです。ですから彼の読んだ本は書き込みが沢山あつて汚くて、とても人に上げられるものではなく、古本屋にも持つて行けない、とのことでした。そういう真剣な読み方をしていたので、内容も頭に入っているし、引用も出来る。言ってみれば深く読んでいたのだな、と改めて感じたことでした。ですから、私に送つて頂いたものは、改めて新しく買つて頂いたもの。綺麗な本の筈です。

数学に関して書いた部分もあつて、これは内容が殆ど理解できませんが、エッセイですから、自分の身の回りに起こつたことや経験を話題にしている部分が多くて、言つて

みれば、私が「珊瑚」でご披露しているジャンルと同じ、と言うことになります。しかし、その感性の鋭さや細やかさ的、確で正鵠を得た描写は流石と認めざるを得ず、やはり売れるエッセイと素人の書く駄文とは違うものだ、と思いました。こうして比較することすら失礼ということなのでしょう。

数学と言うと論理的な考え方を身につける場、と言う印象が強いのですが、決してそうではない、と言います。論理的な考えを身につけるのはやはり国語の分野だと言い、国語の大切さを主張しています。自分の講義の宿題にも日本の古典を読ませて感想文を書かせるなんて、変わった数学の先生のように面白く思いますし、全く同感と言う気がします。小学校では国語と算数の時間をもっと増やせ。国語を通じて日本の文化を教えることが大切だ。国語の時間を削るなんてもっての外、小学校の授業に英語を取り入れるなんてトンでもない、という主張にも一〇〇%賛成できます。国際人であるには言葉の問題なんて二の次だ、日本の歴史とか文化を知っていることが大切だ、と言う主張にも全く同感です。最近ではいわゆる国際化、を重んずるあまり、高校での必須授

業が日本史ではなくて世界史になっていることにも懸念を示しています。日本人はもつと日本を大切にしろ、ということです。日本人の情緒を大切にしたい、と考えているのも数学者が考えることなのだろうか。情緒のトップに来るのが他人の痛みが分かる心と昔を懐かしむ心、と言うのも面白い。他人の痛みが理解できる心、については多くの人が認めるところかと思いますが、懐かしさ、を高級な情緒としてあげる人が何人いるのだろうか。面白い見方だと思いました。

外国に出ると、とたんに愛国者になる傾向があることを自認していますが、これは私にも経験のあることで理解ができます。俺は日本人だ、お前ら外国人に負けてたまるか、と言う意識が強くなるのです。長めに外国に滞在したのは若い頃のアメリカと助教授ク拉斯になってからのケンブリッジの二回なのですが、外国人の中で片意地を張って日本人としてのプライドを持ち続ける姿が描かれています。武士の心を大切にしているのも私にとっては嬉しいことで、言葉も外国の習慣も文化も知らなかった天正少年使節団や幕末に外国に行った日本人が、武士としての品位や立ち居振舞いで外国人の尊敬を勝

ち得た、なんて話が紹介されているのには、我が意を得たり、と言う気がします。武士道がそこら中に顔を出して、最初は奥さんや子供たちと衝突したりするのですが、段々に亭主の武士道精神が家族の中に浸透して行つて、終わりの頃には会津の出の奥さんが、熱烈な武士道の信奉者になつて行く話も面白かつた。

最初の外国経験は若い独身時代の頃のアメリカで、最初の、半分ノイローゼの時期から一転明るい人気者に変身し、その後、落ち着いて本当のアメリカ人を見る余裕が出来るようになって、活動的でフロンティア精神に富んでいるところを評価して、アメリカが好きになつて歸つて来るのですが、その後、暫くして、ケンブリッジに家族と暮らして、どうやら英国鼻眞に変わった様子なのも、私にとっては嬉しいことです。合理的で正しいと思われることは失敗を恐れず何でもやってみよう、と言うアメリカの精神は尊いが、これは圧倒的な資源を持ち、少しぐらいの失敗をしても、その富の力で回復出来てしまふから出来ること。アメリカ的発想を鵜呑みにすると、新しいものイコール経済発展イコール進歩、と言うことになるが、最近の日本はこれを信奉するあまり、古い文化や伝

統を善悪もろとも捨てて来ているのではないか。日本はむしろ英国を見習って伝統や文化を大切にしてい、もっと落ち着いていた情緒の深い行動を取るべきで、やたらとアメリカの考え方に追随すべきではない、と主張している辺りは私の最近の考えと全く一致しています。川口兄もこうした考えに同調していたとしたら、少し方向は違うけど、茂木兄と一緒にライト派の仲間入りをしてくれたのではないかな、と思いました。

正義感が強い、と言うか、自分の主張を貫く姿勢も大したもので、長男が修学旅行に行く際、健康診断のために検便を要求されたのに対して、非人間的な無駄な行為だ、と抵抗し、結局、息子は修学旅行には行けなくなっただけで、規則を強要した校長には報いを与え、その後、教育委員会や東京都の教育課にそんな規則を変更させています。そして最後に、父親の戦いに理解を示した息子に向かって「世の中を良くしようと思ったら、これだけの努力が必要なのだ。これでウソコ一個分だけ世の中が明るくなった」と言う辺りに何とも言えないユーモアが感じられます。エッセイの中ではこの部分が一番力が入っていて、やや長めの書き下ろしになっています。

川口とニーチェについて語ることは私には出来なかつたでしょう。般若心経やモーツアルトも無理。徒然草もあれほど深くは読んでいないし、論語も無理かな。洪沢栄一の「論語と算盤」の辺りぐらいなら何か話せたかも知れません。でも、この藤原正彦が気に入っていたということだつたら、これについては語り合えたのではないかと、その機会が永遠に訪れないことを心から残念に思います。

川口は若い頃、岡潔というこれも数学者の本が好きだつた、ということを知ったことがあります。亡くなる直前の病床で、同じ数学者の藤原正彦の本を夢中で読んでいたということ、何か共通する部分でもあるのだろうか。岡潔の本も機会があつたら読んでみたいと思っています。

(平成十八年二月七日)

藤原 正彦(続)

昨年十二月に藤原正彦が「国の品格」と言う文庫本のエッセイを上梓したことを知りましたが、今年に入って、早速買って読んでみました。先日ご紹介した七冊分のエッセ

イの集大成的なところもあるのですが、実に面白く読んだので、再度ご紹介したいと思っています。

私の前七冊の読み方が正しかった、と言うのが一番の満足です。若い頃、単身で初めての外国であるアメリカへ行つて、その合理的な考え方、進取の思想にかぶれて帰つて来て、そこら中でこの考えを振り回し、周囲との間に摩擦を起こし、大分迷惑を掛けたらしいのです。その後、助教役になつてから家族同伴で比較的長期に英国で暮らし、英国の落ち着いた考え方に変わつて帰つて来ます。日本人にはアメリカの合理主義の考えの方より英国の情を含んだ考えの方が合っている、と言っています。英国鼻根の私にとつては、我が意を得たり、の思いがするのです。

自由、平等、民主主義に対する疑問も正に同意見で面白い。これまで私が言い続け、本誌でも主張して来たところをそのまま、もっと迫力のある上手な言葉で言ってくれている、と言つ感じずらするのです。大体、自由なんてある訳がない、と考えるのが正しい、と言います。自分の自由は他人の不自由。例えば、英国の老舗のゴルフ場には今以

て女性や有色人種は入れない、と言うところがあるが、これはゴルフ場にとつては自由なこと。ところが女性や有色人種にとつては不自由なことになります。他人に迷惑を掛けないければ何をやっても自由だ、と言う考え方があっても、それなら援助交際だつて自由、ということになる、なんて痛快な理屈です。平等にしたつて純粋な平等がある訳がない。運動会で順位をつけず、手を繋いで一緒にゴールインさせるなんて馬鹿なことをやるところがあるが、馬鹿馬鹿しいにも程がある。勉強は苦手だけど、駆けっこは早いとか、絵は上手いとか、そんな子の意欲を殺ぐものだ、とこれも正に同意見です。結果の自由を求めるのではなくて、機会の自由を求めるのだ、何て甘つちよろいことを言う人がいるけれど、東大卒の家庭環境を見ると、やはり塾など、教育に充分のお金を掛ける余裕のある金持ちでないと東大に入れない。これでは機会も不平等ではないか、と言うわけです。民主主義なんて尊重すべき政治形態でもなんでもない。民主主義は民衆が賢くあることが前提になっているが、民衆が賢くあつた試しがない。大体、世の中で最大の「愚」とされる戦争も民衆が始めた例ばかりだ。第一次大戦だつて、サラエボ

でのオーストリア皇太子殺害事件がきっかけだが、これとて政府は抑えようと努力しているのにオーストリアの民衆が騒いでセルビアに侵攻し、世界中を巻き込む戦争にしまった。第二次大戦開戦時のナチだって、色んな情報操作はあったとしても、ヒトラーが民衆の圧倒的支持を受けて開戦に踏み切った。日本だって、政府が政治や外交の力で何とか戦争は避けようとしているのに、朝日新聞を始めとする世論が大騒ぎして戦争に持つて行ってしまった。ルーズベルトだって、真珠湾攻撃を最大限に利用して、民衆の声を煽り立て、アメリカを戦争に巻き込んだ。民主主義というのは、民衆の声を尊重して三権分立で統治する政治形態だ、なんてきれいなことを言うけれども、民衆の声と言うのは、マスコミによって作られる。三権の上にマスコミが来るのが民主主義だ、つまりは衆愚政治を抜け出すことが出来ない、と、これも私が主張して来ていることです。西洋の考え方の基本には、論理とか合理主義があるけれども、これらは危険な思想。合理的な論理は誠に必要なことではあるのだけれど、出発点が間違っていると、そこから生まれてくる論理で出て来た合理的な結論は間違ったものになって来る、と言います。

正しい出発点を作るのは人間の情緒の力だ、と言つて辺りが藤原さんの独特な考え方です。昔、読んだ本に「最初にロゴスありき」とか「我思う。故に我あり」なんて言葉があつて、これが西洋文明の論理の出発点だったみたいになんて教えられてきましたが、藤原さんはこつした論理で考えてきたことで、正しい方向に向かつた事象はないのではないか、と言つ極端とも言える議論を展開しています。

日本の精神の基本に武士道の精神が宿っている、と言つ主張も正に私が言つて来ていることで、これも嬉しい。藤原さんの武士の心の中心は、惻隱の情とか卑怯を憎む心を大きく取りあげていて、私の言つ、恥を知る心と滅私の気持、誠実な心、とはポイントの置き方が少し違います。こつと言つた「金銭よりも道徳を上に見る」と言つ精神性の高さを日本文化の中心に置いて考えているのが私の考えとピツタリなのです。

この部分は藤原さんの本には関係がないのですが、サミュエル・ハンチントンが、世界の八大文明の一つとして日本文明を上げていて、日本の独特な文明を認めています。日本が世界のどの国とも違つ独自の文化文明を作り上げて来た、と言つのです。英国の

社会学者のロナルド・ドーアと言う教授が「日本型資本主義と市場主義の衝突」と言う最近の著書で、「日本はグローバリズムと言う見せ掛けの改革論に惑わされるな」と言っています。「日本人は経済についても、協同行動の習性と、摩擦や対立を避けるために工夫された社会的な仕組みを持っていた。反面、偽善や不正直や曖昧なものを生み出しているけれども、平和を守る、とか、人の気持ちを傷つけないようにする、とか、弱者にも納得できるような妥協策を生み出す、とか言うことを上手にやって来た。だから、効率一本主義でなくても、これはこれで良いのではないか。別にこれを世界中のスタンダードに合わせる必要はない。貿易でも何でも『日本と付き合いたいのなら、日本のやり方で付き合っただけ』と宣言して、それでも良いと言う人達だけと付き合っていれば良いのではないか」と言う趣旨のことを言っていました。それで良いのではないか。無理にグローバル・スタンダードに合わせねばならない、と言うことで世界中をアメリカ化しようとする動きに追隨する必要はないのではないか、と思うのです。

藤原さんも「日本は有史以来、ずっと異常な国だった。これからも異常な国であり続

けて良いのではないか」と言っています。経済に発したグローバルイズムが世界中をアメリカ化し、画一化して広く社会・文化・教育を腐食させてしまうことに懸念を示しているのも、私の年来の主張を後押ししてくれています。

この本がミリオンセラーになっているとのことです。この人は著書の中で自分が異端者で、そこら中で摩擦を起こしている、と言っていますが、私に言わせれば、決して異端者ではない。誠にまともなことを言っている、と思っっています。その人の意見がミリオンセラーになって、多くの人に受け入れられている、ということは日本人もまだ捨てたものではないんだ、と言うことが判ったような気がして、心強い気持ちになっています。

(平成十八年一月)

「大地の咆哮」

元上海総領事の杉本信行と言う人が書いた「大地の咆哮」と言う本を読みました。この人は、二〇〇四年に上海の日本総領事館で一人の館員が「このままでは国を売らない

限り出国できなくなる」と言う遺書を残して自殺した時の総領事です。その直後に末期ガンを告知され、帰国してこの本の執筆にかかられたようです。第一版が上梓されたのが今年の七月ですが、杉本氏はこの直後の八月に亡くなっています。

こうした異常な環境の中で書かれた著書ですが、国際問題アドバイザーの岡本行夫氏は「現在の中国を分析するものとして世界中で書かれた多くの著作の内でも屈指のものだと思う」と言う最高の評価をしています。靖国参拝問題が大きな話題となっていることを契機に、最近の中国を少し勉強してみよう、と言う気になって手に取りました。

京大在学中に外交官試験に合格し、卒業して外務省に入省。チャイナスクールの一員になったのは一種の偶然で、決して望んでなかったものではない、と言う正直な告白から始まります。自分の与えられた仕事・職場を通じて経験した事柄を紹介しつつ、中国と日本の関係の問題点を指摘することから始めていますが、夫々の立場における現場での実際の苦労話を通じての話ですから、臨場感があり迫力もあります。

現在の中国の一番の問題点は、貧富の格差と地域格差だ、と指摘しています。急速な

経済発展の恩恵を受けているのは都市部に住む四億人の住民の中の一部に過ぎず、経済発展とは無縁の九億人の農民は革命前の状態と言います。農民と都市住民は戸籍上「農村戸口」と「城鎮戸口」に分類され、農民は、都市部の住民から「外地人」と呼ばれ、外地人は都市への移動も都市部に住むことも制限されているし、都市住民になることは出来ないのだそうです。都市住民は社会主義体制の下で、年金・医療保険・失業保険・最低生活保障などの社会保障が受けられますが、外地人はこの対象外とのこと。逆に、税金の取立ては農村戸口に厳しく、農民は今もって被搾取階級に止まっているようです。91

その結果、都市と農村の所得の格差は三〇倍と言われているそうです。七千万人と言われる共産党員も国や地方の役人もこの城鎮戸口に位置づけられています。一部の才覚のある人は、解放・改革ブームに乗って、金儲けをして万元戸と言われる身分になります。これは、先に富むことが出来る人から富んで行って貰おう、という鄧小平の「先富論」によるものだそうです。こうして富める人の数を段々に増やして行こうというのが計画だった筈ですが、江沢民がこの万元戸の人達も共産党員にして城鎮戸口に加えてし

まったのだそうです。資産階級の人達も共産党員になることを許された、と云うことは共産主義の「プロレタリア独裁」の政治が放棄されたと言うことになります。こうして格差は広がるばかりで縮まる見通しはなく、農民は難民化して不満が増しているのとことです。「大地の咆哮」と云う題名は、こうした現実を眼にした杉本氏が、「パール・バツクの描いた『大地』の農民たちが、こうした現状に対してとうとう不満の咆哮を上げ始めた」と云う寓意を込めて付けたのではないか、と思いました。

もう一つの大きな問題は、汚職問題。中国は昔から汚職大国でした。科挙の制度が盛りの頃「家族の一人が科挙に合格して役人になれば、どんなに清廉潔白の役人になったとしても、一族郎党が飯が食える」と言われていた、と云う話をどこかで読んだことがあります。それだけ役得・袖の下が蔓延る国柄、その立場になれば役得を享受するのが当たり前の国柄だったのでしょう。今やその汚職は、役人と共産党員に蔓延しているようです。中国は国と地方自治体で通常の国の二倍の数の役人を抱えている、と言われます。その役人や共産党幹部が凄まじい特権を享受しているのです。一旦、その立場に立

ては、生涯贅沢が出来るようになってい、と言われます。その上に汚職があるのですから、支配層が如何に甘い汁を吸っているか、が判るうと言うものです。中国での汚職の摘発のニュースが時々報道されます。信じられないほどの内容ですが、これらも氷山のホンの一角なのでしょう。これらに比べると日本の汚職なんて可愛いものだと思います。

ODAに対する中国の態度と杉本氏の対応の紹介も面白かった。中国では日本からのODAの結果、どこかの施設が出来たとしても、日本からのODAのお蔭、とは紹介しない、と言います。紹介され、感謝されるのはODAをその事業に配分した役所なのだそうです。日本からのODAは、賠償代わりの当たり前のこと、もっとやってくれて当然、と理解されている節があるとも言います。更に、円借款は一方的な援助ではなく、日本側も利益を享受しているものだから感謝をする必要がない、と考えているとのことです。あまりのことに腹を据え兼ねて、上海領事の頃は、日本からのODAで出来上がった施設については、開場の式典の際の挨拶の中でこれに触れて貰うように働きかけた

り、その旨を記載した広告塔を作らせるように関係各所を走り回ったり、の奮闘振りが紹介されています。中央を経由した大掛かりのODAについては、中国側のこうした意識を変えるのが難しく、上手く行かないケースが多かったようですが、地方レベルで大使館の権限の範囲でやる「草の根無償資金協力」は、中国の人々に与える効果が大きいと言います。地方から直接経済協力の要請を受けた場合、千万円程度の案件なら大使館の権限の範囲で実施出来るとのことですが、これは地域の人に感謝され、開場の式典では勿論感謝の挨拶がなされるし、その気持ちを残す広告塔や石碑が建てられて、それが後々まで残ることになるので、こちらの方を伸ばして行った方が良いのではないか。最近、日本では対中ODA不要論が出て来ているが、論拠の一つは中国が二十年に亘り軍事費を毎年二桁の割りで増やし続け、今やGNPの四〇五%にも上っていることがある。これを楯にODA削減を言い始めると、内政干渉みたいなことになって、国と国との関係を難しいものにするが、国レベルでのODAを減らしても草の根の部分を増やして、教育とか環境の問題をきめ細かに援助して行くことによってODAのレベルを維持し

て行けば、その効果は大きい、と主張しておられます。

反日運動の背景については、根深い意識があるのは事実のようです。中国は十九世紀後半から外国からの軍事的な威嚇を受け、半植民地化させられた歴史を持っています。その影響で中国人の心の中には、他国から侮られるのではないか、と言うコンプレックスがあると云います。特に日本に対しては、歴史的に見ても中国の方がはるかに強大で発展していたのに、二十世紀初頭の干渉に始まる一九三〇年代の侵略の歴史について強い反発を持っているようです。これが家庭や学校での教育を通じて綿々と引き継がれて来ています。日常的にはテレビドラマや記録映画を通じて、極悪非道の日本人のイメージが定着している、とすら言われています。中国政府が、こうした反日感情を抑えるところか、むしろ煽り立てるような愛国教育「愛党教育」反日教育をする理由は、人口一三億人の五、六%しかない共産党員がこの国を統治していることの正当性を常に中国人民に認識させねばならないからに他ならない、と杉本氏も言っています。私を感じている「外部に敵を作って内部を固める外部否定の手法」が取られている事実がハッ

キリしました。国民のナショナリズムを刺激するもう一つの柱が台湾統一で、この二本の柱で国を纏めて行こうとするのが現在の中国政府の方向だそうです。この二本の柱の副次的な目的は、共産党や中国政府の数々の失政隠しだと言われます。自分の失政を棚に上げて、悪いのは何でも日本だ、と人の所為にして来る。中国に大きな貧富の格差がある責任を外国企業に転嫁する動きが出て来ている、とか、日本の企業を狙い撃ちにして突然に地方の税制を変えて、それを発生時に遡及して請求してくる、とか、売掛金を払わないとか、新たなチャイナ・リスクが顕在化してくることが予想されると言います。中国との商売上の付き合いを控えるべきだ、と言う私の懸念はこうした面からも間違いではなさそうです。

この本を読む気になった大きな理由は大使館員の自殺の背景が何か判るのではないかと、との期待でした。これに全く触れられていなかったことに不満を感じましたが、現職の外交官としてはあまりに生々しい話なので、流石に触れ難い部分だったのかも知れません。

(平成十八年十二月五日)

「ローマ人の物語」

昨二〇〇六年の十二月に塩野七生の「ローマ人の物語」の第十五巻が刊行され、大作が完了しました。この本は一九九二年に第一巻が刊行され、毎年一巻ずつ発刊して、最初は十二巻までで完了する約束になっていたものと記憶しますが、途中で十五巻まで出すことになったのは、著者のローマ帝国に対する思い入れの深さを示すものだと思います。

塩野七生と言う人は、昭和十二年の生まれと言いますから、私と全くの同年代。学習院を卒業して早くにイタリアに渡り、イタリアの歴史に関連した著述をしている人で、今もフィレンツェに在住しています。私がこの作家に出会ったのは大分昔で、フン族のアツチラ大王の侵略を避けるため海の上に逃げ出して都市を作り、アツチラ大王を散々に叩きのめして、その後、大海運国として栄えることになったヴェネツィアを描いた「海の都の物語」、メジチ家全盛の時代の権謀術策の人として知られるマキアヴェッリを愛情を持って紹介した「我が友マキアヴェッリ」、十六世紀にイスラム・トルコのスルタ

ンに抵抗して戦ったエーゲ海の小島ロードス島の聖ヨハネ騎士団を描いた「ロードス島戦記」などイタリアに関する読み物が多いのですが、「男たちへ」や「再び男たちへ」などのエッセイも書いていて、面白くて興味深く読んだものです。歴史小説家と言うより歴史記述家とでも言えば良いのでしょうか。当時のイタリアの歴史を良く勉強していて、それだけに奥が深くて勉強にもなりました。尤も、私がイタリアの歴史に詳しいわけではないので、彼女の記述を信頼する他はなく、記述が本当に正しいのかどうか確認する方法はないのですが……。どうやらイタリア語は勿論のこと、ギリシャ語やラテン語も解するらしく、紀元前三世紀頃に書かれた歴史書を原書で読み解いて、それを元に物語の形で紹介しているのは、轟眞、司馬遼太郎と同じ手法です。司馬さんよりズツと史実に近いのではないか、という意味で、歴史家の範疇に入るのかも知れません。

最近、文芸春秋の巻頭のエッセイを毎月書いています。外地から見た日本の政治とか外交に対する批評になることが多いのですが、少し辛目の論調が私の考えていることと合致することが多く、毎月楽しみに読んでいます。その関連でしたでしょうか、何年か

前にビートたけしとの対談が企画され、テレビで紹介されたことがありました。知識の深さも実力もまるで比較にもならず、全くのミスキャスト。塩野さんをこんな企画に引っ張り出すなんて失礼ではないか、と思ったほどでした。

そんな経緯があつて塩野ファンだった私は「ローマ人の物語」の第一巻が刊行された時、真っ先に買って、毎年発刊を待ち兼ねて求めて来ました。分厚い本で値段も高いので少々痛いのです。文庫本でも出るようになりましたが、途中から文庫本に切り替えるのは悔しいし、装丁も立派な綺麗な本なので、痩せ我慢して全十五巻を単行本で揃えました。最初の頃は発刊されると直ぐに読んでしまうので、次が待ち遠しく、最初の何冊かは何度か読み返したのですが、ここ数年は少し多用になったのと、他に読みたい本が増えて、中々手が付かず、三巻ほど残っています。

私は、比較的若い頃からギボンの「ローマ帝国衰亡史」を読んで見たいと思っていました。噂ではかなり読み難い本だと聞いているし、本屋や古本屋で手に取ってみると、実際に中々読み難そうなので、読み通す自信がなく、暇になったら読んでみようと思

っていました。それが何時になっても中々暇になることが出来ず、やはり定年を過ぎて仕事を離れてからにしようかな、と思っていたのですが、その内に出てきたのがこの本でした。この本の副題、と言うかラテン語の題名は「RES GESTAE POPULI ROMANI」です。これは「ローマ人の行状記」とでも訳すことが出来るのだそうです。歴史上の主だった人たち個々人の行状を詳しく書いて行きますから、くだい、と言う感想を持つ人もいますが、それはそれで面白いのです。聞くところによると「衰亡史」の方もその手の記述方法を取っている、とのことなので、ギボンの方は諦めてこの本に鞍替えすることになりました。

話は紀元前十七世紀とも十三世紀とも言われるトロイの戦争に始まります。ヘラクレスの木馬の奇策に騙されて負けたトロイ側の王様の末裔が、流れ流れてイタリア半島に辿りつき、紀元前八世紀にロムルスと言つ人が、ローマを建国し初代の王様になります。ローマのシンボルは狼ですが、これはこのロムルスが狼の乳で育てられた、と言つ言い伝えによるものです。この辺は紀元前二・三世紀に書かれた歴史書を元に書かれたとの

ことですが、日本で言えば縄文式土器の時代から弥生文化に入る頃のこと。日本人が文字を使い始めたのが何時の頃からなのか、ハッキリしない面があるようですが、纏まった文献になったのが紀元八世紀の「古事記」とされています。私は、「文字がなかったからと言って言語がなかった訳ではない。文字での記録がないから歴史と言っ行為が存在しなかったと言うわけではない。だから日本の歴史が魏志倭人伝に記載してある三世紀から始まったと考える必要はない」と言っ西尾幹一の主張を尊重する立場にいますが、こんなに昔から歴史書が書かれていたことを考えると、やはり文字の力は大きいな、と思わされます。エジプトやシナにももつと前から文字があつた訳で、文字と歴史の関係は大きいな、と思わされます。

古代ローマと言つたら、シーザーを抜きには語れません。塩野さんも大のシーザー臆員で、四巻目と五巻目をシーザーの巻とし、ルビコンを渡る前と後に分けて詳しく語つてくれます。優秀な武将であり政治家であつたシーザーは文筆家としても知られていいます。時代はズツと下がつてチャールズも政治家でありながら文筆家で、ノーベル賞を受

賞していますが、シーザーがチャールと同じ時代に生れていたら、シーザーの方が先にノーベル賞を取ったに違いない、と言われているほどだそうです。有名な「ガリア戦記」と「内乱記」が残されていますが、この辺りはこれらを中心に書かれたものなのでしよう。シーザーの偉さは、自分の後継者として、自分の身内ではなく、優秀な部下のアウグストスを早い時点から育て上げ、それも身体が弱く戦争も下手だったアウグストスを支える武将としてアグリッパを連れてきたこと。アウグストスは初代のローマ皇帝として見事な政治を見せ、パックス・ローマーナの基礎を作り上げます。面白いのは、欧州各地に派遣されたローマ軍団が、戦争の後、その地の道路や水道橋、円形闘技場などのインフラを作る土木工事の施工者になって行ったことです。欧州各地にある見事なローマの遺跡は、こうしてローマ軍団によって造られたものなのです。軍団のリーダーは優秀な土木技師だった、とされていますが、アグリッパもこの例に漏れなかったようです。数年前のフランス旅行で私はポン・デュ・ガールに痛く感激しましたが、この水道橋の建設者がアグリッパでした。この辺は第十巻の「全ての道はローマへ通ず」で沢山の美

しい写真入りで詳しく紹介されています。余計な話ですが、中学の図工の時間にデッサンの練習台にしていた石膏のトルソは、女性は勿論ビーナスでしたが、男性はアグリッパだったと記憶します。誰か私の記憶を確認してくれないだろうか。

パックス・ロマーナの安定した時代を過ぎ、悪名高きネロやカリギュラなどの愚帝と
言うか、困ったチャンの皇帝の時代を過ぎ、トラリアヌスやハドリアヌス等の有名な賢
帝の時代を過ぎて、愈々衰退の時期に入りますが、私が読了したのはこの辺まで。今年
は残りの三冊を大事にユックリと読み進めて行きたいと考えています。

読みたい本が書架に飾ってあると、あそこに楽しみがあるんだな、と言う気持ちにな
り、何だか心が豊かになるような気がするものです。
(平成十八年十二月)

「ローマ人の物語」を読み終えて

昨年末、十五年間掛けて書き続けられた塩野七生著「ローマ人の物語」の最終十五巻
目の「ローマ世界の終焉」が刊行されてから、読み残しの三冊を大事に大事にユックリ

楽しんで、読み上げました。

最初の頃は、塩野さんが GESTA = 行状記と言っている通り、執政官や皇帝とその周辺のローマ人の行状を細かに描いている感じてしたが、終わりに近づくにつれ単なる行状の記述に止まらず、そこから発展する部分が出て来て筆が冴えて来たような気がしました。これだけ長い間ローマ人と向き合っていると、ローマを通して、と言うより、ローマ人の目で世界が見えて来たと言うことなのではないでしょうか。ローマ人の政治・外交のあり方から見た昨今の日本のそれ、みたいなものが含まれて来たような気がします。塩野さんは現在、文芸春秋の巻頭のエッセイ欄の常連になっていますが、その辺の見方が誠に面白くて、私の毎月の楽しみの一つになっています。

ローマ史は山ほど書かれているようですが、これまでのローマ史はキリスト教徒の眼で書かれていたとのことで、非キリスト教徒の眼で見たローマ史は初めてではないか、と言うことです。確かに塩野さんもその辺を意識して書いていられるようです。ローマの皇帝の中には「大帝」と呼ばれる人が二人いますが、その大帝の称号はキリスト教徒

が与えたものです。それまで迫害の対象だったキリスト教を含めた宗教の自由を認めたとコンスタンチヌス大帝とキリスト教をローマの国教にしたテオドシウス大帝の二人で、二人ともキリスト教に貢献した人、と言うことで高く評価されています。これらは、キリスト教徒が書く歴史はキリスト教の側からの見方になる、と言う良い例ではないだろうか。ローマ史に限らず、欧州の歴史は殆どがキリスト教徒の目から見た歴史になるので、ある意味では偏ったものになり、我々非キリスト教徒もその偏った歴史を信じていることになっているのではないだろうか。こうして塩野さんが書く非キリスト教徒の目で見た歴史と言うのは貴重なものではないだろうか、と思いました。

同じ意味で、コンスタンチヌス大帝の義理の甥で大帝の次の次の皇帝になったユリアヌスなんて人の話は面白かった。たった十ヶ月しか皇帝の座にいなかった皇帝ですが、塩野さんはこの人にながりの紙数を割いています。むしろこの人に対する愛情すら感じられるような書き方になっています。ユリアヌスと言う人は「背信者ユリアヌス」と言うことで評判の悪い方の皇帝ですが、この人は前の皇帝がキリスト教を優遇する立場を

取るうとしたのに対して古来のローマの多神教も尊重して信仰の自由を認めようとした人。キリスト教徒から見るとキリスト教を冷遇した背信者と言うことになるのである。逆の見方をすれば宗教の自由を目指した、誠に立派なことをしようとした皇帝だったということになります。この人はこの他にも短い在位期間の間に色々なことをやっている。例えば、強烈な官僚組織のリストラをやっていますが、そのやり方はかなり強権的なやり方です。塩野さんはこれを評して「官僚は自己保存を優先するので、彼らに自己改革努力を求めるくらい期待はずれに終わることもない。官僚機構の改革は、官僚たちを『強制して服従させる力』を持った権力者にしかやれないこと」と言っています。この辺りは現代の社会にも通用する考え方でしょう。

ローマの皇帝や共和制の時代の執政官の仕事と言うのは、内政よりも外交だったことが窺えます。国民に安全を供給するために、自ら一年中国境近くまで出かけて行って、蛮族と戦っている。ローマにいる期間が殆どなかった皇帝もいるほどで、何時内政をやっていたのか、と心配になりますが、ローマの領土には網の目のようにローマ街道が張

り巡らされていて、通信網も出来上がっており、皇帝がどこにいても直ぐに連絡が取れるようになっていた、と言われます。インフラストラクチュアと言うとまず道路とか上下水道とか電気などを思い浮かべますが、国民にとつて一番大切なインフラは安全だ、と言うのが塩野さんの見方です。ローマの市街地を守る城壁はシーザーによって壊されてしまつて、蛮族の侵入はライン川やドナウ川の防衛線で阻止し、国内でも盗賊などが国民の安全を脅かすようなことにはならなかったのがパックス・ローマーナの時代だった、と言っています。ネルヴァ、トラリアヌス、ピウス、マルクス・アウレリウスと並んで五賢帝の一人とされているハドリアヌスなんか、治世の殆どをリメスと呼ばれる防衛線を歩き回つてその補強に力を入れています。旅行のやり過ぎで疲れて病気になつて死んだのではないか、と思われるほどです。行った先々で記念に建造物を残していますが、北は英国の北部に蛮族（実は先住民族のケルト人）の侵入を防ぐためのハドリアンの壁を残していますし、ロンドンには街の中心にハドリアンの門があつて、これは単なる遺跡でなく、今でも大通りのロータリーの中心になっています。アテネにもハドリアンの

門があつたし、トルコに行った時、南部のアンタルヤと言う町にもハドリアンの門を発見し、こんなところまで来たんだ、と感慨さえ覚えました。どうやら現在のシリアの辺りまで足を伸ばしているようです。

古代ローマの本土、と言うと現在のイタリアを思い浮かべてしまいますが、少なくとも南フランスのプロバンス地方辺りまでは、本土と言っても良かったのではないでしょう。五年前にあの地方を廻った時、「南フランスはローマだ」と感じたことを書いたことがあります。私が感じた通り、正にプロバンス地方はローマの本土なのです。プロバンス地方と言う呼び名はローマの属州、と言う意味から来ていますが、極く初期の頃からの属州ですから、すでにローマの一部と言っても良い地方だったと思われ。ポン・デュ・ガールを始めとする立派な水道橋がこんな属州にも作られている、と驚いたのですが、領土の内側だったとすればそれも頷けます。立派な闘技場や神殿、図書館などの遺跡が沢山残されている理由も良く判りました。この外側に属州として、現在のフランスのガリアがあり、その先にスペインのヒスパニアがあり、英国のケルトがある。

ライン川に防衛線を引いて、現在のドイツのゲルマン系の蛮族の侵入を防ぐ。東の方はバルカン半島のダキア（今のルーマニア）を属領にして、ドナウ川に防衛線を作る。その先の現在のトルコからシリアの辺りまで版図を広げ、ペルシャと対峙している。南は紀元前のポエニ戦争の昔からアフリカのカルタゴは属州で、アフリカの北岸では小麦を作らせてローマ穀倉になっていたし、エジプトもクレオパトラの昔から属領になっていた。地中海はローマの海となっていました。本土があまりに大きくなり、一人の皇帝では守りきれなくなって、西方担当の皇帝と東方担当の皇帝が出来るようになり、それがコンスタンチノーブル（今のイスタンブール）を中心とする東ローマとローマを中心とする西ローマに分かれることになって来ます。

この防衛線のリメスと言うのは、蛮族の侵入を防ぐためのもので、最初の頃はリメスで食い止めていました。強力なローマの軍勢がその外に打って出ることがありますが、それは蛮族が暫くは入って来られないように叩いておく、というのが目的でした。ところがローマも末期になると、防衛線は次々と破られて、蛮族が侵入して来るようになり、

これを追い出すための戦争をしなければなくなる。安全と言うインフラが守れなくなって来ます。蛮族をローマの軍隊に取り入れて、その力で次の蛮族を防ごうとするから、徐々に蛮族がローマの軍の主力になって来てローマの力が衰えて来るのです。そして最終的にはその蛮族出身の軍の親玉が皇帝をその座から追い出してローマ帝国は滅亡することになったのです。

塩野さんは、ローマが千二百年以上と言つ長い期間、ローマと言う巨大な帝国を維持し続けることが出来たのは、ひと言で言つて「寛容の精神で統治したからだ」と言いたかったのではないかと読み取りました。蛮族と呼ばれる他の民族を打ち負かしても、その民族を同化してしまう寛容の心を持っていた。その民族の文化や宗教も受け入れる。ローマの元々の宗教は多神教です。ジュピター（ギリシャ語でゼウス）やジュノー（ヘラ）、ミネルヴァ（アテナ）を始めとする多くの神様を祀っていますが、これらに加え、て征服した民族の他の宗教も認めて来ています。文化についても、ローマ人自ら「ローマはギリシャを征服したが文化ではギリシャに征服された」と言っている程です。ギリ

シヤの奴隷を家庭教師や医者や技術者として活用していた実績もあります。こうした他の文化も宗教も受け入れるだけの寛容の心を持っていたので、これだけの長い期間、あれだけの広大な領土を保持することが出来たのではないか、と思うのです。ベタベタのシーザー鼻肩の塩野さんの解釈では、この寛容の政治や外交もシーザーが始めたことになります。何時の時代からも、紀元前の、王政が始まる直前のシーザーの政治の考え方に戻って、ここに返るのがローマの正しい姿だ、と言っているようです。

末期になるとこの寛容の精神も薄れて来ます。ローマがローマでなくなってきた、と言われます。蛮族の侵入を許して同化し、その力で新たな蛮族の侵入を防ごうとしてきました。これが進むとローマ人と被征服者の蛮族の区別がなくなってきた。こうしたフン族やゴート族などの蛮族の侵入がローマを破壊して行ったのですが、他方、宗教も強烈な一神教のキリスト教が浸透して来ます。一神教と言うのは、神様を一番尊いものとして最高の地位に置きますから、政治上の皇帝も一番上には来なくなる。キリスト教はかなり長い期間弾圧されて来ていますが、四世紀の始め、コンスタンチン大帝の頃に

は宗教の一つとして認めるところまで進み、その後キリスト教が国教になってしまいました。一神教のキリスト教には他の宗教を認める寛容さがありません。古来ローマの神殿の大掛かりな破壊が始まります。トルコのイスタンブールに行くと、遺跡見物の真つ先に連れて行つてくれるのが地下に作られた巨大な貯水槽です。当時のコンスタンチノープルの人口の一週間分の水を蓄えることが出来た、と聞きました。この貯水槽は町の真ん中の地下に作られているのですが、地下ですから勿論、沢山の石の柱で天井を支えられています。その柱はそれぞれが美しく整形され、表面にレリーフが刻まれていたり、彫刻が施されたりしているのです。当時魔除けとして大事にされていたメデューサの顔の石の彫刻が、横向きと逆さになって柱の台座として使われています。こんなところまでこんなに手を掛けたのか、と思わされるのですが、実は、これらの石柱は破壊されたローマの神殿から廃物利用として持つて来られたものなのです。夫々にキツと立派な神殿だったのでしょう。再利用されずに廃材として捨てられたものも沢山あったに違いありません。この地がキリスト教化されていなければ、ローマの美しい彫刻がもつと残

つていた筈です。ギリシャ・ローマ時代の書物もキリスト教徒の手で沢山破棄されたと言われます。他の宗教や文化を尊重する寛容の心が失われて来た辺りにローマ滅亡の鍵があるようです。この辺を描く塩野さんの記述にキリスト教に反発する雰囲気を感じられるのは、自分が大好きな古き良きローマの文化を残すことを許さなかつたキリスト教を憎む心がどこかにあるからではないだろうか。

この本には直接関係がありませんが、宗教について考えさせられた部分があります。宗教と言つのは自分の全てを神様に預けることによって自分の心の安寧を得ようとするものなのでしょうが、その気持ちをごつしても他人に強要しようとする気になる、若しくは強要して信者を増やすことをその宗教団体から求められるところに争いが起るのではないかと思えます。特に一神教の場合には、世の中には正しい神様は只一人、と言つことになりますから、他の神様を信ずる人達とはどうしても喧嘩になります。紛争や戦争の原因になるのです。モーゼの昔からユダヤ教の迫害があつたし、キリスト教は生れた途端に迫害の対象になります。この争いは、宗教間のみならず、むしろ同じ宗

教の中での教義の解釈の違いによる争いの方が大きくなる傾向にすらあります。こんな乱暴なことを言うと、宗教の専門家に叱られるかも知れませんが、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、神様は同根だけど、その教えを伝え広めた人がモーゼ、キリスト、モハメッドと異なっている、と言うだけのことだと思えますので、広い意味での宗派間での争いと言うことになるのかも知れません。ローマの時代にもキリスト教内部での争いが戦争になっっている。この後だって十字軍のイスラム教徒との戦い、中世の数々の宗教戦争、昨今のキリスト教徒とイスラム教徒の戦争やイスラム教内部の宗派間の紛争、と例に欠くことはありません。宗教と言うと平和を求めるもの、と言う印象があります。が、皆が同じ宗教を持てば良いけれど、そうでなければ争いの元になるのが宗教ではないか、なんて考えています。(閑話休題)

皇帝も初期の頃はネロやカリグラみたいな、困ったチャンの皇帝を除いてはそれなりの期間、帝位に就いています。が、衰退期に入るとこれが極端に短くなって来ているような気がします。病死や戦死は仕方がないとして、暗殺なんてのが多くなるのです。それ

も自分の部下である軍の將校たちによる暗殺や皇帝の座争いの結果殺されて、在位期間が短い皇帝が多くなります。

四世紀末、テオドシウス大帝が死んだ時、ローマが二分されて、東ローマ帝国と西ローマ帝国に分割され、この後、東ローマと西ローマは別々の形で残っていきますが、西ローマ帝国は間もなく倒れてしまいます。私が習った世界史では、古代ローマは十五世紀にイスラムのオスマントルコの攻撃によりコンスタンチノープルが陥落するまで東ローマ帝国として存続したことになっているのですが、塩野さんの古代ローマは西ローマ帝国が崩壊した時点で終わります。ローマと言う都市のないローマ帝国なんてローマではない。コンスタンチノープルを首都とするローマ帝国なんてあり得ないし、ラテン語を喋るのがローマ人なのであって、ギリシャ語を喋るローマ人なんてローマ人とは言えない、と言う訳です。西ローマ帝国最後の皇帝は、ロムルス・アウグストスと言う人です。ローマを建国した初代の王様のロムルスと、シーザーの後継者で初代のローマ皇帝のアウグストスの両方から名前を貰った皇帝が最後の皇帝になるなんて、偶然なんて

しょうけど面白いですね。この皇帝が蛮族との戦いに負けて退位した後、次の皇帝が立たなかったので、西ローマ帝国はここでお終い、と言うことになります。これが西暦四百七十六年夏のこと。紀元前十七世紀のトロイの戦争の後、負けたトロイ側の王家の末裔が流れ流れてイタリア半島に辿り着き、狼の乳で育てられたと言う伝説を持つロムルスがローマ王国を建国して初代の王様になったのが紀元前七百五十三年とされていますから、ローマは建国から千二百二十九年間で滅亡したことになります。

塩野さんはこの大作を「ローマ人をわかりたいという想いで書いた」と言っています。そしてご本人は「わかったと言える」と言っています。読者にもわかって貰うことを期待していますが、私はとても「わかった」と言える心境には至っていません。でも、十五年の間この本に付き合っつて、ローマと言うものに初めて触れてみた、と言う印象は持てるようになりました。日本人が縄文式土器を使い、土を掘って作った竪穴式住居に住んでいた時代に始まり、弥生式土器から金属器を使うようになり、古墳時代になる頃、これだけの文化を持つ国が存在していたことに驚きを禁じえませんが、そして「寛容の心」

で統治することにより千二百年もの長い間、ローマ帝国を存続させる基礎を作ったシーザーを鼻屑にする塩野さんの気持ちが良く判って、私もシーザー鼻屑になっています。

塩野さんが一番好きなシーザーの言葉として上げているのが「人間ならば誰にでも、すべてが見えるわけではない。多くの人は、自分が見たいと欲することしか見ていない」と言う言葉です。これは現在の人が言っても立派な考え方として通じる言葉。「二千年も昔にこんなことを言った人がいたこと、それとその言葉を文字で表して今の世の中まで残したことが素晴らしいと思います。私は西尾幹二教授の「日本の歴史は紀元三世紀の魏志倭人伝に書かれたところから始まったように言われているが、文字に書かれた歴史がないからと言って、歴史と言う行為がなかった訳ではない」「日本には文字が現れる前に既に立派な歴史があった」と言う考え方に賛同しているものですが、やはり文字に表された歴史と言うのは素晴らしいな、これには中々勝てないな、と思います。

「寛容」と言うことで考えさせられたことがあります。日本の文化は真似の文化だ、と言う見方をする人がいますが、見方を変えれば、これも寛容の文化ではないだろうか。

文字を取り入れるに当たっても、漢字は輸入したけれど、その漢字を利用して、それまでに存在していた日本の文化に合わせて仮名なんてものを作り出した。それ以前の日本には文字はなかったけど言語や立派な文化はあったと言うことです。中国から輸入した儒教の教えにしたって、律令制度だって輸入はしたけど、日本流に変えて自分のものになっている。ずっと時代が飛んで明治の文明開化だって、闇雲に外国のものを取り込むのではなくて、和魂洋才の精神で日本の良いところは残した上で外国の良いものを取り入れようとして来ている。それは日本に日本自身のシッカリした文化があり、外からの文化の取り入れに寛容だった上に、それを日本流に取り入れるだけの力があつたからではないだろうか。ところが昨今のグローバル・スタンダードを取り込む際の姿勢は日本の文化を壊す拙劣なやり方だったと残念に思います。徒にアメリカの考え方の取り込みを急ぐのではなくて、日本人が綿々と育んできた日本人の美しい心や武士の精神を生かした取り入れ方をすべきだったのではないだろうか。そうすれば、カネ・カネ・カネの昨今の醜い日本人の姿を見なくても済んだのではないか、と思います。こんなやり方をし

ているとシーザーや昔の日本人に笑われそうだな、と思っています。

(平成十九年八月)

「クアトロ・ラガッツィ」

長崎の歴史に興味のある人や長崎好きの人が、月に一度日比谷の市政会館に集まって、簡単な勉強会をやった後、懇親会で楽しむ「長崎楽会」の存在については、既に何度かご紹介したことがあります。本来、この勉強会は会員自身が勉強したことを交替で発表する場だったらしいのですが、ネタがなくなると、外部から講師を連れてきてお話を聞く、なんてことになっていて、古い会員からは、設立の趣旨に反する、なんて批判の声も出ているそうです。私は比較的新米の会員ですが、地理的な事情で年に一・二度しか参加できないでいます。昨年十一月に久し振りで出席したら、防衛大学の元教授と言う人が昭和の初め頃の「上海事変」の話をしてくれましたが、やはりプロの話は奥が深くて迫力がありました。私は一昨年四月にこの会でハウステンボスのことを喋ったこ

とがあつたのですが、十一月のこの席で幹事役から「また何か喋ってくれませんか」と言う相談を受けました。長崎関連と言うことになると、平成十四年二月に本誌で紹介した「天正少年遣欧使節団」のことなら少しは話が出来るかな、と思いました。酒の勢いでウツカリそんなことを漏らし、四月の会には出席する積り、と言っていたら、早速予定に入れられてしまいました。余計なことを請け負ってしまったな、と困っていたら、間の悪いことにその二ヶ月前に同じテーマで喋る人がいるというではありませんか。大変なことになった、と準備を開始しました。二月にやったその人は、外部に頼んだ講師ではあるものの学者ではないようなのですが、大変な凝り性の人で、DVDなどを持ち込んでかなり派手にやったとの情報が入りました。負けてはいられない、と緊張するやらファイトが沸くやら、複雑な心境で準備にも力が入ります。

この話はご存知のように、信長・秀吉の時代に、十三歳と十四歳のキリシタンの若者四人が大変な苦勞をしてローマまで出掛けて行って当時の教皇に拝謁し、八年後に帰つて来たものの、帰つた頃にはキリスト教禁制の時代になつていて、その後は数奇の人生

を送った、と言う話です。

話の色をつける意味で、連中の出身地や関係する遺跡を示す地図や旅行のルートを示す地図を作りました。新宿の紀伊国屋で久し振りに白地図を手に入れ、地名をパソコンでプリントして、これを切り出して貼り付けて行く作業が結構大変でした。近くの遺跡や記念碑には再度出掛けて、デジカメで写真を撮り、これらを並べてプリントして資料の一部にしました。最初、写真はこの近くの遺跡だけにする積りだったので、段々凝って来て、遂に正使の伊東マンショの像を写真に撮るため宮崎県の西都市まで出掛けることにしました。往復八五〇キロの長途を一泊で走りました。一枚の写真を撮るだけのために八〇〇キロを越すドライブをするなんて、古稀の老人のやることだろうか、なんて考えながらハンドルを握り締めていました。

歴史好きの友人が、「クアトロ・ラガッツィ」と言う本の存在を教えてくださいました。

これは若桑みどりと言う人が平成三年に上梓した本で「天正少年遣欧使節団」の総集編とも言われる大著です。最初、その友人から借りて頭の部分を齧ったのですが、中々面

白いので自分で手に入れることにしました。アマゾンで調べたのですが、どうやら既に絶版になっていているらしい。アマゾンには古本のサイトがあるので、そこで頼んで手に入れました。新しい本で三八〇〇円したものが古本で六二〇〇円になっています。古本の方が値が高いと言うことは、それだけの値打ちがある本なのでしょう。小さい字でビッシリ書かれた五五〇ページの大著なので苦勞しましたが、何とか読み上げました。こんな機会がなければ、こんな本に手を出すことはなかったと思います。人に教えると言うことは自分が勉強することだ、と言いますが、正にその通りの経験でした。お蔭で四月の講話では話に深みが出来た感じで、二ヶ月前の派手屋さんの話に怯えることなく、一時間足らずの制限時間を一杯に使って、自信を持って話をする事が出来ました。この本の一部をご紹介します。

若桑みどりと言う人は、東京芸大の美術学部の卒業。一九三五年生まれと言いますが、我々より少し上ですが、三年ほど前に亡くなっています。イタリア美術の研究者で大学の教授なんかをやり、その関係の著書も出しています。カラヴァッジオやミケラン

ジエロの研究家でしたが、戦後五〇周年を迎え、考えるとところがあつてこの天正少年使節の研究に取り組み、書いたのがこの本なのだそうです。クアトロ・ラガッツィとはイタリア語で、四人の若者、と言う意味で、この四人の若者は彼らの先生たちや当時の欧州の人たちからはこう呼ばれていたものと思われず。

この本はこの四人の若者のことを書いていますが、その背景となつた日本でのキリスト教の布教活動と当時の日本のキリシタン事情が詳しく語られています。一五四九年にザビエルが鹿児島に上陸した直ぐ後の五二年に長崎に上陸したルイス・アルメイダと言う人の話から始まっています。来日した時二十七歳だったと言うこのポルトガルの若者は、外科医であり、船長であり、商人でした。船を利用した商売で既に巨万の富を築いていましたが、日本に着いてからその富の全てを寄進してイエズス会の神父になり、布教活動に入っています。特に、豊後・大分で大友宗麟の援助も得て、孤児院や病院（ハンセン氏病の病棟を含む）や学校を作り、九州各地を布教して歩いています。この時期には他にも多くの宣教師が上陸して、全国で布教活動を行っています。当時の日本は戦

国時代の真つ只中で、農民や庶民の生活は酷いものだったそうですが、この中で布教を始めてから急激に成果を上げ、数十年で九州の人口の三〇パーセントを占める三〇万人が入信したと言われています。貧しい人には病院や孤児院といった救いの手、所謂慈愛の精神が入信の理由になったと言われますし、知識層や武士、支配層の人たちは西洋の科学の思想に感銘を受けて入信して行ったと言われています。大名の入信は武器の輸入が一番の動機だったようです。アルメイダはむしろ途中からこの活動を始めたのですが、布教を目的に来日した宣教師たちがどんな活動をして行ったのか、が描かれています。

若桑さんは長いことローマに滞在して教会の図書館や古文書保管所などで当時書かれたものや書簡を探し出して日本へのキリスト教の布教の実態を調べて行っています。が、この中でルイス・フロイスと言う神父が書いた「日本史」が重要な資料になっているようです。フロイスはポルトガル人の宣教師で、一五六三年に私の住まいから程近くの西彼杵半島の先端の横瀬というところに上陸しました。横瀬にはこの人の上陸地としての公園が出来ていて、立派な銅像が建っています。その後、八六年にはこの「日本史」

と言う大著を上梓しています。この本には日本のキリシタン史のみならず、当時の外国人の眼で見た日本の歴史が書き残されていて、フロイス自身日本語が出来、秀吉の通訳を勤めたこともあつたほどで、正に歴史の当事者ですから、この本は貴重な資料になっているようです。日本のキリスト教の歴史を勉強する気だったら、この本は外せないようです。私は日本のキリシタンの歴史はあまりに暗くて勉強する気になれず、まだ手にしたことはありません。日本にキリスト教が伝来したのが、ザビエルが上陸した一五四九年。それからキリスト教が盛んだったのは信長が殺される一五八二年の少し後ぐらゐまでのことで、それ以降は明治になるまで弾圧の歴史なのです。暗いものになつても仕方がないと言うことなのです。

使節団の彼らがローマを訪れたこの頃は、丁度ルネッサンスの最後の時期に当たります。「ルネッサンス文化をその場で見た日本人は彼らだけだったろう」と言う美術研究家らしい若桑さんの記述があります。講演でもこの言葉は使わせて貰いました。ヴァチカンのシステイナ礼拝堂の天井画や最後の審判の絵は既にミケランジェロによって描

かれていたし、ミラノにあるダ・ヴィンチの最後の晩餐の壁画も描かれて間もない頃です。ピサの斜塔もありましたし、ヴェネツィアの街並みも出来上がっていました。ピサの斜塔の天辺からルネッサンス最後の天才と言われるガリレオが二つの鉄の球を落として重力の実験をしたのが丁度この頃になります。そんな話や当時、既に存在していた美術品と彼らとの出会いや、彼らが見たであろう風物、ついでに当時の欧州各国の歴史や政治情勢などを散りばめた話が出来て好評でした。西洋史と日本史をこのように交差して話して貰ったのは初めてだ、なんて評価もいただきました。

ローマへ行ったのは、正使の伊東マンショと千々石ミゲル、副使の原マルチノと中浦ジュリアンの四人ですが、盛大な行列の後でグレゴリオ教皇に拝謁したのはジュリアンを除く三人だったことが知られています。これは丁度ジュリアンが病気で参加できなかったのが理由だ、とされているのですが、若桑さんは、これは事実と異なるのではないかと、と言う説に立っているようです。キリストが厩小屋で生れた時に東方から三人の王様が馬に乗ってお祝いに来た伝説は有名ですが、東方からご挨拶に来る王様や王様の代

理は三人でなければならなかった。ジュリアンは公式拝謁の前後に教皇と個別に会って頂いたりしているほどですから、実際は病気の方は大したことはなく、数合わせのために病気を理由に外されたのが真相だった、と言う説です。遠くから苦勞をしてローマに辿り着いたのに、こんな言い伝えの犠牲になるなんて、留守番をさせられた当人はどんな気持ちだったのだろうか、と思わされますが、ジュリアンは日本に帰ってから布教活動には一番熱心だったとされています。キリシタン追放令が出されてからも、日本に残って潜伏して苦しい布教活動を続け、最後は凄惨な殉教をするのですが、これもこの時ローマでグレゴリオ教皇に特別な思し召しを受けたところから、教皇に対する思いが特に強かったからではないか、と言われています。

これだけ時間を掛けて勉強し、聞き手の皆さんからお声を頂戴したりすると、講演は一回では勿体ないな、なんて不遜なことを考えます。これで自ら何かやろうなんて考えるようになる、落語の「寢床」になるのでしょうか。

（平成二十年五月七日）

昭和史

このところ実家の両親の世話のため家内をかなりの長期間、里帰りさせる機会が多いのですが、実家の方で私に留守番をさせて申し訳ないということで、お土産かお礼に図書カードを持たせてくれます。私は図書カードが好きで、図書カードが財布に入っていると何だか豊かな気持ちになれるのですが、それを知った両親が気を使ってくれるのです。本も高くなって、特に単行本なんかは中々手が出せないのですが、図書カードがあると気が大きくなって、新聞の広告を見て面白そうな本があるとメモしておいて、本屋で探すことになります。と言うことで、最近は少し贅沢になって、ハードカバーの高価な本に手を出しています。何となく昭和史が目について、読んでみているので、ご紹介します。

一・半藤一利「昭和史」

半藤一利と言う人は司馬遼太郎が書くころとして書けなかったノモンハン事件について書いた人、と言うのが私の知識で、これは読んだことがありますが、この人は文芸

春秋社の編集長から役員までやった人で、夏目漱石の研究家として知られているのとことです。昭和史にも詳しく、真珠湾とかソ連の満州侵攻などについても著書があるようですが、この「昭和史」では、昭和の歴史を戦前と戦後は四十七年ごろまでに分けて語っています。戦前・戦後を夫々一五の時期に分けて語ったものを編集したのですが、語り部が判り易く語った感じの読み易い歴史書になっています。それだけに意思を持った歴史ではありませんから、東京裁判や無条件降伏などに意見のある茂木兄などにとつては物足りないものかも知れません。ちなみにこの人も「無条件降伏」論者です。

二・ 佐藤優「日米開戦の真実」

あまり馴染みがないかもしれませんが、佐藤優と言う人は小泉内閣の初期、田中真紀子外相の時代に、鈴木宗男が北方領土関連の汚職絡みで問題になっていた頃、外務省の役人として関わっていたと言ふことで逮捕され、長いこと拘留されて、結局、執行猶予付きの有罪判決を受け、現在控訴中の人です。その後、本を何冊か書いたことは知っていました。逮捕された当時、新聞で見たギョロリとした眼と太い首の悪相の印象が強

く、正に「外務省のラスプーチン」の異名がピッタリの感じで読む気になりませんでした。ヒヨンなことだからある人に勧められて「自壊する帝国」を読みました。これは、ゴルバチョフのペレストロイカからエリツィンに至るソ連の崩壊の舞台裏を書いたもので、今年の（三十八回）大宅壮一ノンフィクション賞を受賞しています。二〇年ほど前の話で、当時は私もあまりソ連には興味がなく、時代は変わるものだな、と眺めていた程度で歴史の流れが判っていなかったので、興味深く読んだのですが、この時代のソ連のことを少しは勉強してみよう、と思い、続いて同じ著者の「国家の崩壊」を手にししました。二冊を読んでみて、佐藤氏の一方的な見方ではありませんが、当時、ソ連で何が起ったのかが少しは判ったような気になりました。佐藤氏は同志社大の神学科を出て外務省に入ったと言う変り種。勿論キャリアーではありません。この人がソ連大使館勤務中にソ連の崩壊を経験することになるのですが、その情報収集力が凄い。ウオツカを幾ら飲んでも平気、と言うアルコールに強い体質や外交官としては珍しいキリスト教の神学の知識を利用し、大使館員に認められた豊富な機密費も大いに活用してソ連の政治の

世界に入り込んで行き、要人とのコネも作って情報を取って行く。自分の手柄話の部分がどのくらい知れませんが、話し半分としても、大使館員というのはこんな活動もしているのかな、と改めて感心したことでした。これは面白いと思ひ、続いて「国家の畏」に手を出しました。これはそれこそ外務省の役人として鈴木宗男代議士と組んで北方領土返還の動きをして行き、その過程で汚職の汚名を着せられて行く過程が描かれています。鈴木宗男がやったことは飽くまで北方領土返還が目的だったのであって個人を利するための汚職ではない、自分も悪いことをしたのではない、と言う主張になっています。逮捕の前後から逮捕後の検事とのやり取りの経過なども詳しく描かれていて、面白い読み物になっています。続いて「北方領土 特命交渉」と言う鈴木宗男との対談録に手を出した辺りは、少し凝り過ぎでした。この辺になるとお互いの称え合いや手柄話的なものが沢山入って来て、どこまでが事実で何処までが自慢話なのか判らなくなります。

四冊の本を読んで見て、この人の印象は、頭の良い人、と言うこと。ソ連での情報収集に当たっての現地の人とのやり取りや逮捕された後の検察官とのやり取りなど、実に

克明に良く覚えている。良い人かどうか、は判りませんが、会話のやり取りやコトの展開の読み、駆け引きなんかを見ているも相当IQの高い人であることは間違いないと思います。

で、この人が書いた昭和史が、「日米戦争の真実」なのです。昭和十六年十二月の開戦直後、大川周明が新聞に連載で論文を発表していますが、これは、この戦争が如何にして起こったのか、と言うより、何故必要だったのか、と言うことを国民に広く知らしめるための論文です。ペリーの黒船、日清戦争、日露戦争から説き起こし、昭和の始めからの日本を中心とする世界の動きを解説して、立派な前期昭和史になっています。佐藤氏のこの著書はこの論文を解説する形で昭和史を語っています。大川周明に関する私の知識は、A級戦犯として捕らえられ、東京裁判の席で東条英機の頭を殴り、その後精神に異常を来たして精神病院に入り、刑を免れた、程度のことでしたが、この論文を読むと、歴史を理路整然と判り易く解説し、当時の思想家として名が高かった理由が判るような気がしました。日本が開戦に踏み切ったことを正当化する論文ですが、私には頷

ける部分が多いし、当時の一般の日本人が信じていたのは、こんなことだったのだろつ、
と思つたことでした。

三・ 保坂正康「検証・昭和史の焦点」

この人は昭和の歴史の研究者として知られている人ですが、昭和史が同時期史から歴史に変わりつつある戦後六〇年を迎えて、この時期に生きた者として事実の確認をしておこつ、と言つ意図の下に昭和の始めから敗戦までに発生した歴史上の二一の出来事を取り上げて、史実を検証しようとしたものです。面白いのは、日本の昭和史を最初から最後まで握つたのはアメリカの戦略だった、と言つ見方。戦中・戦後のアメリカとの関わりは理解していた積りですが、アメリカが、日露戦争にあまりにも見事に勝利した日本に大きな警戒感を感じ、昭和初期からは日英同盟を破棄させるなどの種々な牽制を始める。更に日本の軍部の暴走に油を注ぐような動きをし、最終的にはハル・ノート突きつけて日本を勝ち目のない戦争に引つ張り込んで行つた、と考えると、戦前のアメリカとの関わりも大きいものがあると言えそうです。

四・渡部昇一「昭和史」

松本清張が週刊文春に昭和三十九年から七年に亘って書き続けた「昭和史発掘」と言う連載物があります。昭和の前期からの色んな事件を取り上げて調査した結果、その真相を報告したもので、私も当時は大変な興味を持って読んだ記憶があります。渡部昇一もこれを読んで松本清張を高く評価しているのですが、今、読み直してみると、この調査は昭和の前期を暗黒の時代と受け止め過ぎて書かれたものではないか、この時代はもっと明るい時代だったのではないか、と言う視点からこの内の一三の事件を取り上げて見直したものです。「発掘」をもう一度詳しく読み直すと、もつと理解が深まるのではないか、と思いましたが、渡部氏が適当に対比してくれていますので、成る程、と思わせる部分が多くて、興味深く読みました。読み進んでいくと、清張氏と渡部氏の歴史観には相当大きな差があることが感じられます。「戦後の進歩的文化人と同様、松本清張氏はどうも日本のいい面・進んだ面を認めることはあまりお好きでなかった」とか「共産党への遠慮に由来する欠陥」と言う記述なんかを見ると、「自分がもつとも愛読した

作家の一人」とか「ただならぬ天才」との賛辞を呈しているのは、褒め殺してはいいのかな？ と言う感じを持ちました。

(平成十九年七月五日)

「龍馬伝」

再来年のNHKの大河ドラマが「龍馬伝」に決まったとの報道がありました。坂本龍馬は私の一番お気に入りの英雄です。どんなものになるのか、今から楽しみにしています。

「龍馬伝」と言う小説は「つか こうへい」とか言う作家が書いたものだったな、と言つづる覚えの記憶があつたので、一度読んでみようかな、と思いました。本屋で探しましたが、既に絶版になっていて在庫もなく取り寄せも出来ないのです、お得意のアマゾンで探すことにしました。やはり古本のサイトで発見しましたが、文庫本一冊一円で分けてくれるとのこと。送料プラス三円で「野望篇」「青春篇」「決死篇」の三冊シリーズを手に入れました。「伝」とありますから、史実を追ったまともな本かと期待して読ん

でみたのですが、全くの期待外れ。主人公の坂本龍馬を始めとして、幕府の関係だと徳川慶喜、勝海舟、松平容保など。新撰組で近藤勇、芹沢鴨、沖田総司、山南敬介。倒幕側では西郷隆盛、木戸孝充、伊藤博文、岡田以蔵。お公家さんでは帝に始まって岩倉具視なんて実在の人物は登場するのですが、話は全く荒唐無稽としか言いようのない下らない話です。同志社大学の渡辺と言う教授が後書きを書いていて、つか こうへいを大変高く評価しています。「この三連作は愛と自由とデモクラシーと言うキーワードが主人公で、日本文学史上の革命的作品だ」なんて書いていますが、全く理解が出来ませんでした。多くの人々が命を掛けたあの真面目な明治維新を冒瀆するようなふざけた話に、読み始めて直ぐ腹が立つて、もう読むのを止そうか、と思つたほど。何か得るものがあるのではないか、と最後まで一応読みはしましたが、何も出て来ない。全くの思いつきを書き綴つた単なるオチャラケとしか思えません。本を読んでこんな怒りを感じたのは殆ど初めてのことではないかと思ひます。

坂本龍馬というと長崎や鹿児島にも大いに関係があるので、長崎県の観光課の役人が

鹿児島県の観光課と打ち合わせを開始した、と聞きました。その役人に、こんなに下らない「龍馬伝」がドラマ化されるのか、と聞いたら、題名は同じだが、内容はこれとは全く違うものだ、と聞いて安心しました。聞くところによると岩崎弥太郎の目から見た龍馬伝とのことです。弥太郎はご存知の通り、土佐の最下級武士の出で三菱の創始者になった人です。

龍馬についてはずいぶん色々な本を読みましたので、この機会に私の中に残っている坂本龍馬を書いてみようと思います。

坂本龍馬に関する私の興味は、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」に始まっています。龍馬についてのそれまでの私の知識は、子供の頃、父に連れられて長崎の「花月」と言う料亭に行ったとき、花月の女将が座敷の床柱の刀傷を見せてくれて、これは龍馬が付けた傷だ、と言ったことがあったのと、日露戦争の時、明治天皇のお后である昭憲皇太后の夢枕に龍馬が立って、この戦は勝ちだ、とのご託宣があった、と言う程度のものでした。何か一寸おどろおどろしい不気味な雰囲気を感じていたものですが、「龍馬

がゆく」はこうした思い込みを完全に払拭してくれました。

龍馬の出身地は今の高知県、土佐藩です。この藩は豊臣秀吉が天下を取ったとき、その部下として力を発揮した武将の山内一豊が貰った藩。一豊は彼を支えた賢夫人の方がむしろ有名になっています。この地域はそれまでは長曾我部氏が支配していた土地でしたから、元々侍の一族がいた訳で、一豊一族が大変な抵抗に遭ったことは、同じ司馬遼太郎の「功名が辻」に描かれています。その後、支配者の方の侍が上士、支配される側が郷士という階級が作られて、江戸の末期になってもその階級は守られていたようです。明治維新に出て来る藩主の山内容堂は勿論上士の階級で一豊の末裔ということになります。龍馬が育ったのは郷士の方で、一八三五年の生まれですが、割と裕福な家庭に生れたようで、自由闊達に伸び伸びと育った様子が「ゆく」にも描かれています。姉さんの乙女と言う人がシツカリした人で、この人の影響を大きく受けています。ですから龍馬は長じてからも乙女姉さんとは大の仲良しで、彼女に宛てた面白い手紙が沢山残されています。当時は話し言葉と書き言葉がハッキリ分かれていた時代のはずなのに、龍馬

の手紙はまるで話しているような生き生きした文章で、龍馬の旧弊に囚われない自由奔放な性格がそのまま出ているようです。

若い頃、剣術修行に江戸に出掛け、江戸で北辰一刀流を修めて道場の塾頭を勤めるまですべて一旦帰国します。幕末の慌しい空気の中で若い武士たちが何かをしたい、と考えると、藩の制約を断ち切るため夫々の藩を脱藩して江戸や京都に向かいますが、龍馬も例に漏れず脱藩して江戸へ行きます。文久二年（六二年）のことで、龍馬は二十八歳になっていました。この当時としては割と遅い活動の開始だったようです。維新で活躍する若い武士たちは大抵何処かの剣術道場に入って行って、それなりの腕前になっているようです。勝海舟も島田道場というところで免許皆伝の腕になっているし、木戸孝充も何処かの道場で塾頭なんかやっています。龍馬は千葉道場でやはり塾頭を勤めることになりませんが、千葉道場の若先生と一緒に、当時幕府で急速に力を発揮し始めた勝海舟を叩き切つてやるう、と会いに行つたのが、龍馬がこの革命に参加する切っ掛けになったと言われています。勝海舟の話の聞いているうちにスツカリ感心してしまい、切る

どころか弟子入りをしてしまうことになります。この辺が龍馬の頭の軟らかさと物事の正否を見抜く力の鋭さだと思えます。

開国の後、幕府が海軍の必要性を感じ、一八五五年に長崎に海軍伝習所を作つて木村楨津守が総裁になり、勝海舟が塾頭になつて旗本・御家人の連中を中心にオランダの海軍士官を指導官にして海軍の勉強を始めます。最初、幕府はオランダに軍艦を発注するのですが、軍艦を動かすには動かす技量を持つた人達を育てる必要がある、と言つオランダ側の勧めに従つて出来たのがこの伝習所だつたと言われます。六〇年に咸臨丸でアメリカに渡つたのはこの連中が中心になっています。五九年にはこれが閉鎖されますが、六三年一〇月に越前の松平慶永の援助で神戸海軍操練所が出来ます。この操練所は海舟の発案で、龍馬がその意を体して働いて出来たものようです。海舟が総裁、龍馬が塾頭と言つことになります。

六四年一〇月に海舟が幕府内部の権力抗争に敗れて軍艦奉行を罷免され、神戸海軍操練所も、不貞の浪人を養つてるところ、として閉鎖されます。龍馬一行が路頭に迷つ

ことになりましたが、ここで海舟の依頼を受けた薩摩の小松帯刀が一行を保護して鹿児島に連れて行ったと言われます。薩摩の家老小松帯刀という人は、むしろ地方区の人で、全国レベルではこれまであまり知られていませんでした。今回の大河ドラマ「篤姫」の中で重要な役を演じ、それが売れっ子モデルの瑛太と言うことで脚光を浴びていますが、この小松帯刀と西郷、龍馬の結びつきが維新の原動力になったという人がいるほど立派で力のある人のようです。「篤姫」の中でそろそろ帯刀の近くに龍馬が現れる頃なので、これも楽しみにしています。

龍馬は鹿児島で帯刀、西郷、大久保利通と相談し、薩長同盟のための遊説に出掛けることになります。帯刀は海軍操練所の残党を長崎に連れて行き、龜山社中発足の援助をします。この龜山社中は株式会社の開祖とされていますが、その後土佐藩の管轄に入っ
て海援隊となります。商社の機能を持つこの龜山社中と海援隊が龍馬の活動の基点になっているようです。

大分昔、本誌で紹介した「慶応長崎事件」が起こったのはこの頃のことです。海援

隊の船が長崎に停泊中に外国人が殺傷される事件があり、この犯人が海援隊の隊員ではないか、と言う嫌疑が掛かります。この嫌疑を晴らすために龍馬が活躍するのです。容疑者の人たちがその夜酒を飲んでその辺りをウロウロしていたのは事実ですが、竜馬はこの容疑者達に会って、絶対にやっていない、と言うことを確認します。でも、こんな人たちが厳しく詮議をされると、酒を飲んでいたことでもあるし、若しかしたらやってしまったのかな、と自分で疑問を持ち始めることがあると言われます。龍馬はこの人たちを前に、詮議の予習をやったのだそうです。その夜の行動を正確に思い出させ、詮議の場では自信を持って自分の正当性を主張することを叩き込みました。現在でも、タクシー会社には運転手が事故を起こした時、自分の正当性に自信を持たせる役目の専門家がいて、裁判で不利にならないように教育するのだそうです。龍馬は今の時代のやり方を先取りしていたことになりました。海援隊の容疑者達は厳しい詮議を受けますが、何時まで経っても真つ当な対応をするものですから、ラチが明かず無罪放免と言うことになりません。世の中を騒がしたと言う事で、恐れ入れ、と言う罰だったそうです。恐れ入る、

とは袷に正装して公の場で「恐れ入りました」と挨拶すれば良い、とのことで、当時の日本には面白い洒落た刑罰があったものだと思います。後で、この事件の真犯人は事件を起こした直後に切腹してしまつた福岡藩の武士だつたことが判明し、龍馬のやり方が正しかつたことになります。

「いろは丸」事件と言つのもこの頃のことです。海援隊の船が六七年四月に当時権勢を誇つていた紀州藩の船と衝突して沈没してしまいます。龍馬は万国公法を元に法律に則つて裁判で相手の非を訴えますが、政治力の差が大きくてどうにもならない。そこで相手の非を訴えるざれ歌を作つて世論に訴え、これを流行らしたのだそうです。紀州はこれに参つて非を認めて多額の賠償金を払つたとのこと。マスコミを利用して大きな力を生み出す手法は最近でも良くある手段です。龍馬の考えることは当時としては大分先を行つていたのではないかと思われれます。

北辰一刀流の免許皆伝と言われますから、剣は出来たはずですが、あの時代に人を切つたことは一度もなかつたと言われます。早くからピストルを手に入れて、ある人に「こ

れからは刀の時代ではない」と言ったそうです。右手を懐に何かの台に寄り掛かっている有名な写真がありますが、これは懐にピストルを持っているのだ、という説があるそうです。その直前に寺田屋で受けた右手の傷を隠していたとも言われています。この人が次に会った時に、自分もピストルを手に入れたと言って見せたら、龍馬は懐から万国公法の本を取り出して、「これからは刀やピストルではなくて、法律だ」と言ったという話があります。一寸出来過ぎの感じがしますが、龍馬の進取の気性を示す面白い逸話だと思います。

この後の龍馬の活躍ぶりは良く知られています。六六年一月に京都の小松帯刀邸で薩長同盟が締結されますが、薩摩の西郷隆盛と長州の桂小五郎の会談が行き詰まったところへ龍馬が出て行って両方を説得して纏めた話は有名です。この密約を記した桂小五郎の書状に龍馬の裏書が残っています。

その直後に京都の寺田屋で幕府の手入れ受け、ピストルで応戦しますが重傷を負い薩摩の保護を受けて鹿児島に逃れます。六四年に結婚したお竜を帯同し、ここでも小松帯

刀の世話になっていきます。この間、お竜夫人と二人で霧島に旅行していますが、これが日本の新婚旅行の嚆矢と言われています。

六七年一月に徳川慶喜の決断で大政奉還が行われ、幕府が朝廷に將軍職を返上します。この大政奉還は龍馬が長崎から土佐に向かう船の中で後藤象二郎に示したと言われる「船中八策」が元になっています。慶喜の大政奉還を大変に評価していた龍馬はその翌日、京都の近江屋で暗殺されます。

二十八の年で土佐を脱藩してから三十三歳で暗殺されるまで、龍馬が活躍した年数はたった五年間なのですが、その間に彼は彼でなければ出来ないことをやった。そして自分の役目が終わったらその翌日には殺されてしまった。生きている間は人の役に立つことをやる。そしてその役をやり終えたらこの世から消えてしまう、私はそんな龍馬の人生に憧れを感じます。

(平成二十年九月五日)

「ルネッサンスとは何であったのか」

塩野七生さんがあの名著「ローマ人の物語」を手がける切っ掛けになったのは、ルネッサンスに興味を持っていたからだ、と言っているのを聞きました。面白い話だな、と思っていたら、昨年秋の上京時に八重洲ブックセンターで右記の本を発見したので、買って来ました。二〇〇一年に書かれています、〇八年四月に文庫本として発刊されています。

ルネッサンスなんて歴史の時間に聞いたことがあったな、と言う程度の認識だったのですが、天正遣欧少年使節団を勉強して行く過程で、彼らがイタリアを訪れたのはルネッサンス期の末期だったことを知りました。ルネッサンスの文化を日本人として身をもって体験したのは彼らだけだっただろう、という「クアトロ・ラガッツィ」の中での若桑みどりさんの記述を読んで興味を新たにしましたのです。考えて見ると私の好きなミケランジェロはルネッサンスの中心人物の一人だし、少し後になるけど、ご臈原フェルメールだっこの流れの中にいるに違いありません。

大して量のない文庫本ですが、私の知りたいことが一杯詰まっているという感じの読

み物で、面白くて一気に読みました。

イタリアのフィレンツェに始まったルネッサンスは十三世紀の後半から始まって、その後中心をローマからヴェネツィアに移して十六世紀一杯まで続き、その後は周辺の欧州に広がって行った、と言うのが定説のようですが、塩野さんはもう少し前の十三世紀の初め頃から始まった、と解釈していて、これはかなり独自の見方のようです。この辺も面白いのですが、これはどうでも良いことにしましょう。まず、ルネッサンスとは何であったのか、との疑問に対してはひと言で「見たい、知りたい、分かりたいという欲望の爆発だった」と言っています。何からの爆発か、と言えば、千年の長きに亘って支配されて来た「キリスト教文化」と言うより、「教会からの押し付け文化」からの爆発と言うことになるのでしょうか。これに対して若桑みどりさんは「ルネッサンスとは異教的、古代的、科学的、人間的文化だ」と書いています。私のこれまでの理解は「キリスト教文化から抜け出して、ローマの文化に戻ろうとする復古の動き」ということでしたので、若桑説に近い理解をしていたことになりました。

ルネッサンス期の最初の人と言われるダンテが「考えているだけでは不十分だ。口であるうとペンであるうと画筆であるうと鑿であるうと、表現して初めて『シエンツァ』になる」と言っているそうです。シエンツァはラテン語のシエンティアから来たのとこと。これが英語になるとサイエンスになりますが、この場合のシエンツァはラテン語の意味に戻って、「科学」というよりも「知識」とか「理解」と解釈されるということです。頭の中で考えていることは、どんな手段を使っても、「表現」と言う経路を経ることによって明快になる、と言う意味です。

ルネッサンスの時代には、こうして自分の考えていることを表現したい天才達が大量に出て来たので、あれだけの美術品が残り、文学が残っているのです。それまで教会主導の教育の下で汚らわしいものとされていた人間の裸体美が再発見されました。歪められた眼で見ることを止めた途端に、ローマ時代に表現されたこの種の美術品が如何に美しいものであるか、は誰の眼にも直ぐに分かったはずですが、こうして教会の桎梏を逃れて、自由にものを見よう、考えよう、表現しよう、と言う流れがルネッサンスで、それは必

然的にキリスト教の支配が始まる前の古代ローマに戻ろう、と言う復古の動きになります。

この時期は大航海時代と重なっていますが、塩野さんは、大西洋を横断して西インド諸島を発見したコロンブスもアメリカの名前の由来になったアメリカゴ・ヴェスプッチも、世界一周を成し遂げたヴァスコ・ダ・ガマやマゼランも同じ思想で動いたと言う意味でルネッサンス文化の一翼を担った人になっています。宗教改革で有名なドイツのマルティン・ルターもルネッサンスの一員ですし、ガリレオはルネッサンス期の最後の天才とされています。

ルネッサンスがフィレンツェに発祥したことは良く知られていますが、その発展についてメジチ家の果たした役割は大きいものがあつたようです。特に十五世紀中盤にフィレンツェの政治経済を握っていたコシモ・メジチの存在が大きく、フィレンツェを文化大国にしようとしていたと言われます。その孫のロレンツォ・メジチの存在も大きかつたようです。こうしてメジチ家の当主たちは多くの芸術家を経済的に支えるのですが、

これも古代ローマに範を求めたものとされています。初代ローマ皇帝のアウグストスの親友でマエケナスという人がいましたが、この人が芸術家のパトロンとして有名です。今でも企業が芸術や文化を支援する活動のことをメセナ活動と言いますが、これはこのマエケナスの名前に由来しています。メジチ一族はこのマエケナスを範にした、とされています。フィレンツェのウフィッツイ美術館はメジチ家のオフィスとして使われていた建物で、ウフィッツイとはイタリア語でオフィスのことです。ここには多くのルネッサンス美術品が展示されていますが、その理由が領けます。

これに関連して面白い逸話を一つ。レオナルド・ダ・ヴィンチはフィレンツェ生まれなのですが、メジチ家とは折り合いが悪く、支援者を求めてミラノ、ローマを経てフランスに渡ります。ここで当時のフランソワ一世と言う王様に認められてお城を一つ貰い、死ぬまで面倒を見てもらったので、名画「モナ・リザ」はこの王様に遺贈されたのだそうです、これが「モナ・リザ」がルーブル美術館にある理由なのだそうです。そう言えば七年前にフランスへの修学旅行をした時にアン・ボアーズ城というお城の河畔で、横た

わるダ・ヴィンチの大きな銅像を見た覚えがあります。ダ・ヴィンチの名画「岩窟の聖母」もルーブルにあります。同じ理由かも知れません。

メジチ家が没落すると、ルネッサンスはローマに移ります。ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロが三人ともローマに来ます。これを支えたのが歴代のローマ法王だった、と言うのが面白い。元々キリスト教の支配から逃れよう、と言う運動がルネッサンスだった筈なのですが、美しいものを求める時代の流れの中で、当時一番財力のあったローマ法王がルネッサンス芸術を支えることになります。一四五八年から一五四九年までの九人の法王がルネッサンス法王と呼ばれています。これらの法王は可なり墮落した法王として知られていますが、この中でシスト四世と言う法王が重要な役目を果たたとされています。この法王はシステイナの礼拝堂を作った人です。システイナはシストの女性形で「シストの礼拝堂」の意味。シスト四世は最初この礼拝堂の側壁に、ポッティチエリ他三人の画家に一六枚の壁画を描かせましたが、その後の法王二人がミケランジェロに巨大な「天地創造」の天井画と壁画「最後の審判」を描かせてこの礼拝堂を

ルネッサンス美術の殿堂に仕上げました。

宗教改革を契機に反動宗教改革が起こります。宗教改革に対抗するためにカトリック信者に対する内部の締め付けが厳しいものとなり、これがローマのルネッサンスを殺すことになります。異端者を厳しく探し出して痛めつけ、蛇と言われて怖れられていた異端審問官を逃れて、ルネッサンスの思想はヴェネツィアに移ります。ヴェネツィアは当時、唯一ローマ法王庁から独立して独特の政体を取っていた街（国）だったので。そしてイタリアのルネッサンスはヴェネツィアで最後の花を咲かせ、ヴェネツィアの街全体が一大美術館になったとされています。

その後のルネッサンスはフランスのモンテーニュ、スペインのエル・グレコ、同じくスペインのセルバンテス、そしてイギリスのシェークスピアに引き継がれて行った、と言つのがこの本の結びになっています。

「珊瑚」を四〇年以上続けて来て、私はこれまでこの四八八号までに五〇九本もの文章を書いて来ていますが、長年こんなことをして来たお蔭で、ダンテの言っていること

がおぼろげながらも判ります、と言つたら傲慢に過ぎるでしょうか。どうやら私が本誌に書き続けてきた理由は、私の頭の中を整理して、自分自身の考えを明快にするため、つまり自分の『シエンツァ』を作るためにやっていたことで、正に自分の為を書いていた、と言つことではないだろうか。毎月々々お付き合ひ頂いて読んで頂く皆さんには大変なご迷惑を掛けていた、ということなのかも知れませんか。

(平成二十一年四月五日)

「逝きし世の面影」

以前、本誌に「私は、日本は世界中のどの国もお手本にする必要はないと思つています。昔の日本人が一番のお手本です。環境問題や文化を大切にすることは江戸時代、特に後期の江戸時代。先進の文明を取り入れる姿勢は、和魂洋才を旨とした日露戦争までの明治をお手本にすれば良いのではないかと思つています」と書いたことがあります。少々国粹主義者になつてゐるかな、と言つ反省もあつたのですが、その後、この感覚で

本を読んでいると、この「逝きし世の面影」と言う本の名前が何回も出て来たので、探し回って求めました。長崎の紀伊国屋で聞いたら、在庫がなくて取り寄せが必要だと言います。どんな本なのかパラパラとでも眺めてから求めようと思っていました。博多の丸善に行った時に探してみたら発見した、と言うのはやはり長崎は田舎だということなのでしょう。玉川兄も感銘を受けられたとのことですが、私も大変に感銘を受けたので感想を書いてみます。

この本は熊本で学習塾の講師をしている渡辺京二という日本近代史家が書いています。この人は幕末から明治の初期に掛けて来日した外国人が書き残したものを詳しく調べて、これらの外国人が当時の日本をどう見ていたのか、を探り出そうとしています。

この時期にこんなに沢山の外国人が来日していたのか、と言うことにも驚かされますが、それらの外国人が、場合によっては日本全国を歩き回って一般の日本人と接し、その印象を書き残していると言う事実には感動しました。そのホンの一部分をご紹介しますと・・・

一八五六年に来日し、日米修好条約を締結した初代アメリカ領事のタウンゼント・ハリスは「一見したところ富者も貧者もない。これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものだろう。質素と正直の黄金時代を日本において見出す。」と言い、「日本を開国して外国の影響を受けさせることがこの人たちを幸福にするかどうか疑問に感じる」とまですべて言っています。また、自然の美しさを讃えた上、「質素ながら勤勉で礼儀正しく実直な人々が幸せそうに暮らしていた。お金と幸福とが無関係であることを示していた」とも言っています。

ハリスの通訳として同時に来日したヘンリー・ヒューズケンは、質朴な習俗と共に、その飾り気のなさを賛美し、「西洋の人々が重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない」と書いています。

日英修好条約締結のため一八五八年に来日したエルギン卿使節団の一員だったオズボーンは「男も女も子供も、皆幸せで満足そうに見える。個人が共同体の為に犠牲になる日本で、各人がまったく幸福で満足しているように見えることは驚くべき事実。貧し

さや物乞いの全くない国でもっとも好感の持てる国。シナへ行くのはごめんだが、日本になら喜んで出掛ける」と言い、日本人の美的感覚にも触れて「色彩感覚、衣類、家屋、寺院など、上等でも地味な落ち着いた色合いが主体。シナようにケバケバシクない。」と書き残しています。この人は日本に来る前にシナに滞在した経験を持っていて、その比較でこんなことを言っているのです。判り易くて嬉しいコメントです。

五九年から二年間滞日し、長崎海軍伝習所隊長として勝海舟以下に船と海軍を教えたカッテンディーケは「西欧文明が日本古来のそれより一層高いものであることには確信を持っていたが、それを日本に持ち込むことが、果たして一層多くの幸福をもたらすかどうか、自信が持てない」と言い、カッテンディーケが率いてきた医者のポンペも同様のことを書き残しています。

初代英国公使のラザフォード・オールコックは前任地の中国での強烈な恫喝外交で知られ、アジアでは威嚇と恫喝が一番の交渉方法と思っていた節がありますが、日本に来て長崎での英国人殺傷事件の交渉に当たって後藤象二郎と接した時、まず威嚇から入っ

たところ、後藤象二郎の毅然とした態度に接して態度を改め、日本人を見直したと言われている人ですが、この人も「日本の農村が圧制に苦しみ、苛酷な税金を取り立てられて窮乏している土地だとは信じ難い。ヨーロッパにはこんなに幸福で暮らし向きの良い農民はいない」と記しています。

明治二二年に來日したエドウィン・アーノルドと言う英国の詩人は、「地上で天国あるいは極楽に最も近付いている国。妖精の住む小さくてかわいらしい不思議の国。景色が優美、美術は絶妙、性質は美しい。態度は魅力的、礼儀正しさは謙譲ではあるが卑屈ではなく飾ることもない」と如何にも詩人らしく、情緒的な感想を残しています。

イザベラ・バードと言う英国人の女性が馬で東北地方を縦断し、農家の人々と親しく接した記録なんかもあるし、ジャパノロジストとして知られるベージル・チエンバレンは一九〇五年に「日本事物誌」と言う本を上梓していますが、その中で日本人の本質として知的訓練を従順に受け入れる習性、国家と君主に対する忠誠心、付和雷同を常とする集団行動癖、外国を模範として真似すると言う国民性などを上げています。

バードは、日本の女性は美しくはないが陽気で、純朴にして淑やか、氣品に溢れていると書き残しており、これは上流階級の女性だけではなく、田舎の農家の女性にもこうした美点が見られると言っています。面白いのは性に対する見方で、この面では恥を知らないのではないかと、言う我々とは全く反対の見方がなされていることです。人の目に付くところで平気で行水するなど、清潔を大切にするあまり、つつしみが二の次になつているとまで書かれています。外国人が通ると男性も女性も風呂から飛び出して裸で見ているなんて、西洋では全く考えられないような風景が見られたそうです。

この当日来日した外国人の衆目が一致するのは、人々が幸せで満足していると言つ見方で、日本人は地球上でもっとも礼儀正しい民族であり、人々は丁寧で愛想が良く、貧しいが決して不潔ではないと言つのが一般的な評価になつていきます。そして口を揃えて個性のある日本の文明の高さに敬意を表し、西洋文明をこの美しい文明の中に持ち込むことが正しいことなのか、を懸念しています。西洋では自由平等イコール幸福、封建社会（専横的な政治体制）イコール不幸と言つ見方が常識になつているが、これは欧米の

撒き散らした神話ではなかったか、と言う疑問すら提起されているのです。

ところが渡辺京二氏は上記のチェンバレンの言葉を借りて一七五〇年ごろから百年ほどの間の日本で見られなかった自然の景観・美術・性質・態度・礼儀正しさなど「風変わりな絵のような」「古い日本」は明治の末期には死んで去ってしまった、と断じています。民族の特性や文化は時代によって滅びるものではなく変わるのみだが、文明は滅びてしまふ、死んでしまふと言っているのです。十八世紀初頭から十九世紀に掛けて存続した我々の祖先の生活は明らかに文明の名に値した尊いものであったが、明治末期にはこの文明の滅亡が確認されている、と言い、当時来日した外国人が記したこうした美しい文明は「逝きし世の面影」だ、と言う訳です。

確かに文明としては死んでしまつたかも知れませんが、私は日本人の心の奥底にはこれらの美しいものが、その後も相当長い間残っていたと思つているし、今でもどこかに残っていると信じています。お金と幸福とが無関係な社会で、質素ながら勤勉で礼儀正しく生きていた人たちが我々の先祖だったことを誇りに思いたい。こうした美しいも

のは、少なくとも終戦の頃までは、主に家庭内の教育によって親から子へと綿々と受け継がれて来ましたが、戦後のアメリカ主導のWGIP（戦争犯罪周知計画）による洗脳やそれを後押しした愚かな進歩的文化人達や日教組の教育、又その尻馬に乗って騒ぎ立てたマスコミなどによって無残に破壊されてしまったことを残念に思います。

もっと言えば、グローバリズムばかりを尊ぶあまりローカルリズムが軽んぜられてはならない、と思います。経済効率が多少犠牲になったとしても、地球の各地に生れ、花開いた文化や伝統を世界中の人が尊重・尊敬し、温かく見守って行く世界がこれから目指すべき理想的な世界なのではないか、と思っと思っています。この時期に来日した外国人たちが、西欧文明の押し付けが将来の日本にとって幸せなことかどうか、と危惧したのは当を得ていた、と言えるのかも知れません。

（平成二十一年七月五日）

「ミケランジェロの暗号」

「世界中でもう一度行きたいところはどこか」と尋ねられたら、私は間違いなく「ヴ

アチカンのシステイナ礼拝堂」と答えるでしょう。もう四〇年近く前、ロンドンに駐在していた頃、ツアーに乗ってイタリアに行った時、連れて行って貰って大変に感動したのが最初の出会いでした。その後も、死ぬまでに一度で良いからもう一度行ってみたいものだ、と思いつけていたのですが、二〇〇四年に家内と二人でのイタリア旅行を計画した時に、第一の目的地としてここを選んで二度目の見物を実現しました。それでももう一度行きたいと言いつ気持ちになるのですから、大分虜になっています。

システイナ礼拝堂は一四八三年に時の法王シスト四世によって建造されています。システイナと言つ名前前は、このシストの女性形なのだそうです。この礼拝堂はヴァチカンのサンピエトロ寺院に隣接しており、ローマ法王が亡くなった時に、枢機卿全員がここに籠って選挙で次の法王を選び出す行事のコンクラーベが開催される場所として知られています。この間、枢機卿達はここから一步も出ることは許されず、籠りつ切りで選挙を繰り返し、結論が出ない日は夕方、黒い煙を焚いて外で待っている人たちにそのことを知らせ、新しい法王が決まると白い煙を焚いて喜びを知らせる仕組みになっている

ことはご存知の通りです。

シスト四世はルネッサンス法王の一人として知られ、この礼拝堂を建造した時、周囲の壁にポツティエリを含む四人の画家に一六枚の壁画を描かせています。ポツティエリはご存知のように、ルネッサンス初期の画家で、「春」や「ヴィーナスの誕生」を描いた画家として有名です。これらの壁画には右側の八枚にユダヤ教の指導者モーゼの生涯が、左側の八枚にキリスト教の指導者キリストの生涯が描かれています。シスト四世はカトリック教会がユダヤ教の正当な後継者であることを示すためにこれらの絵を描かせたのだそうです。最初に描かれたこれらの壁画も貴重なものの筈ですが、システイナ礼拝堂と言うと、その後ミケランジェロによって描かれた天井画と正面の壁に描かれた壁画「最後の審判」の方が有名で、これらの元々の一六枚の壁画は印象が薄れてしまっています。システイナ礼拝堂はこれらを合わせてルネッサンス美術の殿堂と称されています。

「最後の審判」の壁画が完成したのは一五四一年で、ミケランジェロが六十六歳の頃

のことです。ご存知のように、この絵は筋肉隆々でムキムキマンのキリストを中心に、聖人たちが描かれ、天国へ行く人と地獄に墮ちる人が四〇〇人以上描かれていて、かなり独特な最後の審判ではあるのですが、これは曲がりなりにもキリストの教えを描いたものですから良しとしましょう。ところが天井画の方はその二〇数年前、法王ユリウス二世の命によって、ミケランジェロが三十三歳の一五〇八年に描き始め四年の歳月を掛けて完成させたものですが、こちら方にはキリストのかけらも描かれていないのです。

テニスコート三面よりも広い天井一杯に描かれているのはユダヤ教の聖典、旧約聖書の創世記の天地創造の一週間と人間の誕生の物語です。光と闇の創造に始まり、日と月と草木の創造、水の分離、アダムとイブの誕生、アダムとイブの楽園追放、ノアの方舟と大洪水、ノアの燔祭（ユダヤ教の犠牲祭）、ノアの泥酔までが描かれています。これはキリストが生れるズツと前のヘブライ人の宇宙創造の神話を描いたものです。この天井画の周りの不定形な壁面にも沢山の人物像が描かれています。これらはユダヤ教をむしる抹殺しようとした異国の五人の巫女と、ユダヤ教を支えたヘブライ人の七人

の男性預言者たち、及びイスラエル救済の奇蹟の物語が描かれているのです。元々ヘブライ語で書かれたとされている旧約聖書はユダヤ教からキリスト教に受け継がれているとされてはいるものの、システイナ礼拝堂はローマ法王の礼拝堂ですから、カトリックの教会の頂点にある最高の礼拝堂と言つて良いでしょう。その天井にユダヤ教の絵が描かれていることに、最初観たときから私は素朴な疑問を持っていました。キリストの奇蹟やら殉教やら使徒・聖人たちの活動状況やらが描かれるのが普通ではないのだろうか。

確かに絵の迫力は物凄い。キリストの生涯みたいなものを描いてもあれだけの迫力は生み出せないだろうと思います。最初観たときから私を涙の出るほど感動させ、それ以来虜にしているのもその迫力にあるのですが、何故こんな絵が描かれたのだろうか。

新聞で表題の「ミケランジェロの暗号」と言つ本が上梓されたことを知りました。どうやらこの辺のことが書かれているらしい。本屋で探して立ち読みしてみると、やはりそうらしいので、大枚三〇〇〇円を払つて買って来ました。

この本は、ユダヤ教の指導者として著名なラビと、やはりユダヤ教に詳しいコンサルタントの共著で書かれています。ミケランジェロがクリスチャンでありながらユダヤ教に深い理解を持ち、むしろユダヤ教に親近感を持った人で、カソリック教会や注文主のユリウス二世をユダヤ教の観点から見た批判がこれらの絵の中に暗号として隠されている、と言う解釈が記されています。この解釈はユダヤ教の側から見た見方でしょうから、意図的な解釈や曲解に類するものもあるのではないかとも思いますが、実に面白いのです。本当に理解しようと思ったら、ユダヤ教の深いところまで勉強していないと理解出来ないと思いますが、この辺も上手に解説しながら解釈してくれています。かなり専門的な話も出て来ますから、勿論完全には理解出来ませんが、雰囲気だけは分かるような気になります。

ミケランジェロがユダヤ教に傾倒することになったのには、ルネッサンス期の多くの芸術家を保護して「豪華王」と呼ばれたロレンツォ・メジチの影響が大きかったそうです。ミケランジェロは若くしてロレンツォに見出され、ロレンツォが自分で厳選した当

時の優れた芸術家や哲学者、詩人、科学者を集めた「工房」と呼ばれるサン・マルコ庭園のプラトン・アカデミアの仲間に入れて貰って特別な教育を施されることになります。メジチ家は当時のヨーロッパで排斥されていたユダヤ人を積極的にフィレンツェに呼び込んだとのことで、このアカデミアでは古代ギリシャ・ローマの哲学と共にユダヤ教の教えが学ばれており、むしろ当時栄華を極め、逆に腐敗のどん底にあったローマ教会を批判する反体制的な秘密の教育機関だったそうです。

このミケランジェロがユリウス二世の依頼を受けて天井画を制作することになるのですが、発注者の元々の意図は、当然のことながらキリストの一人の使徒の物語か、単純な幾何学模様を描かせることだったと言うことが知られています。ところが、これでは余りに淋しい画面になってしまう、と言うミケランジェロの強い主張に負けて画家の希望する絵を描かせる羽目になったのだそうで、ミケランジェロは、発注者の法王は絵の内容について文句を付けない、と言う条件で描くことに同意して始めた仕事なのだそうです。

ここにユダヤ教の聖典の絵を描いたこと自体凄いいことだと思いますが、ミケランジェロはこれに加えて、これらの絵に発注者の法王にも分らないように暗号を埋め込んで後世に残している、と言う解釈がこの本に書かれています。むしろカソリック教会や法王を貶めるようなメッセージが隠されている、と言つのです。方法は我々の理解を超えるユダヤ教の深い知識を裏づけとしたもの、指の形で示す手話、絵の置かれた位置やだまし絵的な手法等を駆使しています。完成した絵を見ても、法王や当時の聖職者には分からないような形でこれらの暗号を埋め込んで行ったところに、ミケランジェロの天才性とユダヤ教に対する深い造詣が示されている、と言つのです。

絵の中に籠められたそれら夫々の暗号のメッセージを詳しくお示しすることは出来ませんが、今度行く機会があったら、その辺を詳しく見てみたいな、と思わせるだけの迫力のある暗号解読でした。

更に、二十数年後に描かれた「最後の審判」にもこの種の暗号が埋め込まれているとのことです。こちらの方は流石に当時気が付いた聖職者がいたとのことですが、これら

を指摘した儀典長はミケランジェロの恨みを買って、地獄の底で酷い目に遭っている人物の似顔絵の対象にされてしまっています。

そしてこれらの秘密の暗号は五百年後の最近になって絵が綺麗に洗浄されたことによつて初めて明らかになった、とされています。この絵の洗浄はヨハネ・パウロ前法王の命によつて一九八一年から二二年の歳月をかけてなされたもので、修復の実態は日本テレビによつて克明に記録されているとのことですが、日本の和紙がこの洗浄に重要な役割を果たしたと言われていきます。日本の技術がこうした秘密の解明の役に立ったと言うのも面白いことだと思えます。

(平成二十一年十月五日)

私の一〇冊

文芸春秋で「二十世紀図書館」と言う謳い文句で、著名人の「私の一〇冊」をアンケートしたことがあり、これを真似して私の「私の一〇冊」をピックアップしてみたことがあります。平成十年のことです。

「自分史」で読み返してみると、私の「私の一〇冊」は、接したと思われる順に、アレクサンドル・デュマ、「モンテクリスト伯」、ロジェ・マルタン・デュガール「チボウ家の人々」、五味川純平「人間の条件」、司馬遼太郎「竜馬が行く」、五木寛之「青春の門」、小松左京「日本アパッチ族」、セシル・スコット・フォレスター「ホレーシヨ・ホンブローアー・シリーズ」、堺屋太一「油断」、ピーター・ドラッカー「傍観者の時代」、マーガレット・サッチャー「サッチャー回顧録」、渡部昇一「アングロサクソンと日本人」の一一冊を上げていて、一冊が字余りとなっています。

一番お気に入りの「ホレーシヨ・ホンブローアー・シリーズ」は手の届くところに置いてあって、何度も読み返しています。特に五年前のガン手術の時はこの一一巻ものを病院に持ち込んで読んでいたのと、自分史作成の作業に忙しくて一〇〇日間の入院中、全く退屈を感じませんでした。このシリーズは英国でドラマ化されたことがあって、NHKのBSで放映されたことがあります。ビデオに撮って残してあるのですが、四・五回で終わってしまって、完結編まで済んでいません。良く出来たドラマなのに次が仲々

出て来ないので、どうなったのか、と思つてNHKのホームページで調べてみたら、英国でのドラマ化が途中で中止になった由でガツカリしました。ナポレオン時代の英国海軍の話で、大掛かりな帆船での海戦のシーンなんかが出て来て確かに大変なお金が掛かると思われるので、中止になつても仕方がないのかな、と思いましたが、その内にプロデューサーの気が変わつて再開されないものだろうか、と淡い期待を持ち続けています。

「モンテクリスト伯」や「竜馬が行く」、「青春の門」、「アングロサクソンと日本人」も手許に置いてあつて、気が向くと読み返しますが、これらも何度読んでも新しい発見がある感じがして飽きません。

「傍観者の時代」「サッチャー回顧録」の二冊も本棚に入っているのですが、これらは何れも分厚い本ですから読み始めるにはある程度の覚悟が要る本なので中々読み直すまでには至りません。

「日本アパッチ族」と「油断」の二冊は何処でどうしたのか、現在の蔵書の中に入っていないのでしたので、以前探して買って来て読み直したことがあります。何れも期待

を裏切らず、昔と同じ感動を与えてくれました。

「チボー家の人々」は高校の図書館で読んだので自分の蔵書になったことはなかったし、「人間の条件」は一度買った覚えがありますが、なくなってしまっていましたので、本屋に行く機会があると、何となくこの二冊を探していました。中々出会う機会がありませんでした。元の本は絶版になっているんでしょうし、新たに発刊される機会もなかったものと思われませぬ。

昨年秋、「チボー家の人々」一二巻を発見しました。白水Uボックスと言う新書版で八四年の発行。〇四年に第十刷が発行されています。訳者の山内義男さんは一九五〇年にこの本の翻訳で芸術院賞を受賞したそうですから、私が高校時代に読んだのも同じ翻訳本だったのでしょう。第一次世界大戦当時のフランスの若者達を描いたものです。読み直してみましたが、確かに迫力はあるものの、当時、試験勉強を疎かにするほど夢中になって読んだほどの感動は思い起こすことが出来ませんでした。同じ悩みを共有する年代ではなくなっただけということもあるのでしょうか、やはり年を取って心を動かされる

度合いが薄くなったのだろうか、と少し淋しい思いがしました。

つい先日、博多の丸善で「人間の条件」の復刻版を発見し、大喜びで買って来ました。「人間の条件」は私が知っているだけでも同じ題名でアンドレ・マルローや森村誠一が書いていますが、この「人間の条件」は当時無名だった五味川純平の著で五六年に上梓されたもので、○五年になって岩波書店が復刻版を出しています。

これは凄い。最初は高校卒業の頃読んだものと思われませんが、その頃と同じかそれ以上の感動を与えてくれました。大東亜戦争で中国大陸に送り込まれた若いインテリの苦悩を描いたものです。戦争と言う異常事態の中で、また日本の陸軍の非人間的な精神構造の中で、少しでも人間らしい心を持ち続けようとする人間の苦悩振りが延々と描かれています。理想的な人間ではないけれど、それを目指そうとして苦悩する姿が自分にも照らし合わせることが出来て共感が出来ます。日本の軍隊が中国大陸で、自分の組織の中だけではなく、中国の人達に対して如何に酷いことをして来たのか、も描かれていて、こんなに酷い目に会った中国の人たちが、今尚日本に対する恨みを忘れないのもむべな

るかな、という感じにすらなります。この小説は仲代達矢と新珠美千代の主演で映画化され、これにも大層感動した覚えがあります。この映画は確かヴェネツィアの映画祭で何かの賞を取ったと思います。テレビでドラマ化されたこともあったと記憶しますが、映画やドラマの方も一度見直してみたいものだと思っています。

この年になっても本に接する機会が多い方だと思っていますが、今後、「私の一〇冊」に加えられるような本に巡り合うことが出来るかどうか。知識を求めるのではなく、心を揺すぶられるような本と言つのは、やはり頭の柔らかい若い頃に出合った本になるのではないでしょうか。

(平成二十二年三月五日)

「始まっている未来」

学生時代に学業に熱心だった記憶はないのですが、一応経済学部なるものに身を置いて、アダム・スミスだ、マルクスだ、ケインズだ、サミュエルソンだ、と言っていた頃から(どれもこれもまともに読んだ記憶はありませんが)、理想の世界というものは資

本主義と共産主義の間、自由主義と全体主義の中間にあるのではないか、と云つことを漠然と考えていました。資本主義も完全な新自由主義の自由放任ではなくてある程度の規制が掛かった資本主義であるべきではないのか。自由主義だ、民主主義だと言つても、個人の権利ばかりが尊重されて全体が迷惑するのは行き過ぎではないのか。全体のために個々人が規制を受ける全体主義になつては行き過ぎだけど、個人の尊重にもどこかにブレーキを掛ける仕組みがあつて良いのではないか。中庸を狙つていた、と言えば格好が良いのですが、若者らしいスツキリした主義主張ではなく、若い頃から極論が嫌いであまい灰色を好んでいた、と云つことになるのかも知れません。年を経るにしたがつて、この考えが益々正しいものに思えて来ています。

金の力で金儲けをする金融の世界の野放図な自由主義には腹が立つばかりでした。資本主義の世の中なんだからどんな方法でも金儲けを追及するのは自由なんだ。それで他の人に迷惑がかかつて仕方がない、と云つ人もいましたが、法律違反のギリギリの線を狙つて自分の金儲けをしようとする。法に触れなければ、それがどんなに世の中や他

人の迷惑になるのか、は考えなくて良い、なんてどうしてもどこか間違っているとは思えませんでした。(そう言えば、今回の小沢一郎の「政治と金の問題」騒動で、小沢氏は「法に触れるようなことはしていない」を連発していましたが、法にはその法律を作った精神がある。法にさえ触れなければ精神は踏みにじっても良い、と言う言い方に取れて、どうにもスッキリせず、許せない思いです。法律は最低限の線を示したものであり、その裏には道義的責任とか倫理みたいな精神的なものがあって、むしろそちらの方が大切なものなんではないだろうか。・・・閑話休題)

茂木兄には反論を頂戴しましたが、経団連の会長だった奥田さんが母校の卒業式の挨拶の中で、卒業したら金儲けをしろ、と言ったのにも反発とむしろ腹立ちを感じました。新しく社会に出て行くこととする卒業生に、金儲けをしろ、はないものだろう。せめて、世の中の役に立て、結果として金儲けをしろ、程度のことを言っただけだと思いませんでした。

宇沢弘之教授の思想に出会ったのは平成十一年末のことでした。講演を聴く機会があ

り、教授が主張する社会的共通資本なるものに、「これだ！」と思うものを感じたのでした。社会的共通資本には第一に大気や森林、河川と言った自然環境で「自然資本」、第二に道路とか鉄道、電力などインフラに属するもので「社会資本」、第三に教育制度、金融制度、医療制度などの「制度資本」の三つの種類があります。これらは人間が社会の中で人間らしく生きるための共有財産であって、大切に守り育てられるべきものであり、決して儲けることを最高の基準に位置付ける市場原理主義的な立場に立つものであってはならないし、かと言って、官僚集団によって官僚的な基準に基づいて管理されるものであってはならない。その道の専門家(コモンズ)に任せて大事にするべきものだ、と言う主張です。これなら野放しの自由放任に流れることもなく、逆にガチガチの社会主義や全体主義の枠の中に嵌められることもないでしょう。

自然と共存する理想的な街を作ろう、と言う試みを目指したハウステンボスの事業が風前の灯の状態にあります。こんな事業もこのコモンズの手でなされるべき性質のものではないだろうか。次から次へと出て来るスポンサーも金儲けを目論んで出て来てい

ますが、この種の事業は金儲けでは出来ないと思うのです。地球の行く末を見据えたこんな事業は、金儲けから離れたところで運営されないと上手く行かないと思っています。お金はお金儲けのために使われるべきものではなくて、世の中を良い方向に持って行くために使うもの、と言う意味でコモンズの出番ではないか、と思うのです。かなり手前味噌の議論であることは重々承知している積りですが……。(閑話休題)

その後も幾つか読み易そうな著書を読みました。読んでいて本当に気持ちが良い。橋本首相が十五年ほど前に、グローバル・スタンダードだ、ビッグ・バンだと騒いでいた最初の頃から、私が疑問に思っていた所謂アメリカン・スタンダードについても、教授は個々の国の経済にはその国固有の性格がある。一つの考え方を押し付けるべきではない、と言う主張をされていて、グローバル・スタンダードと称するアメリカのスタンダードを無理に押し付けられる謂れはない、と言う私の考えと完全に一致するので、「そうだ、そうだ」と気分が良くなるのです。

最近岩波書店から発刊された「始まっている未来」と言う本を読みました。これは宇

沢教授と経済評論家の内橋克人の対談集ですが、面白かった。

教授の基本的な考え方の一つに、資本主義と言うものは基本的に不均衡なものである、と言う考えがあります。資本主義の根底にある思想は、経済活動と言うものは個々人の自由に任せておけば、自然に一番良い方向に流れて行く（レッセ・フェール）、と言う考え方です。儲けるためには、法に触れない限り個々人の自由に何をやっても構わない、と言うことになりましたが、これを放っておけば失業が大量に発生する、物価が不安定になる、富の分配が不平等になると言った不具合が起こって来るので、これを政策や制度で防がねばならない、と言う主張に繋がって来るのです。

教授の考え方からすれば、小泉・竹中コンビの改革は、市場原理主義を重んずるあまり、聖域なき規制緩和の名の下に、こうした社会的共通資本にまで市場主義を押し付けようとしたところに誤りがあった、と言う指摘がなされることは当然のことですが、竹中教授には論文の盗作（学問の場合「剽窃」と言う言葉が使われます）の前科があり、信用できない男だ、なんて内幕の暴露にも興味がありました。

二〇〇五年の日本の国税庁の調査によれば、所得が五〇〇〇万円を超える僅か四%の富裕層の人達が、国民の総所得の六五%を手に行っている、と言われます。アメリカではこれが更に酷くて、平均所得の中位以下の個人所得の合計に相当する富を、僅か四〇〇人の超富裕層が独り占めしている、と言われているそうです。マネーに絡む者だけが莫大な富を手に行っていると言う構図は是正されねばならない、と言う教授の主張には喝采したい気持ちになります。それなのに小泉・竹中の市場原理主義的改革では、その一環として「金融経済教育元年」と称し、文部科学省が音頭を取って子供に株で金儲けをする楽しみを教えようとしたそうで、これに日銀総裁までが同調している。全く破廉恥極まりない、と切り捨てています。

宇沢教授は地球環境問題についても国際的な学会で税体系全体を「グリーン化」することを提案され、これが京都會議に繋がったのだそうです。こうした国際的活動が評価されて、昨年十月に地球環境問題の解決に向けて貢献した個人や団体に贈られる「ブループラネット賞」を受賞されました。

私は教授に積極的に政府の審議会とか委員会に参加して貰って、ご自分の主張を政策に反映させて貰いたい、と念じていたのですが、こつしたものには原則として関わらない、と言つのが教授の主義なんだそうです。この種の委員会は行政なり、官僚なり、政権政党がやりたいことを実行するための隠れ蓑に利用されている。こんなものに関わつては人間としての尊厳を傷付けられ、学者としての權威が失われることを怖れるからだそうです。以前、農政関係の委員をやつたことがあるのだそうですが、農政官僚は農業を馬鹿にするばかりで、自分たちの天下り組織を作ることばかりに力を注いでいたそうです。それ以来、この種の委員への就任は全部お断りして来た、とのことで、これは非常に残念なことでした。政府の審議会とか委員会と言うものが、タメにする官僚や政治家のものではなくて、「知」の声を真面目に素直に取り上げるようなものになって貰いたいものだと思います。

(平成二十二年四月五日)

長いわらじ 五

本編で紀行文編の最後の項が掲載漏れになっていたの
で、補遺編で紹介する。

五・ギリシヤ人とカスメ取り精神

ギリシヤには丸々一週間滞在しました。四〇度の気温の中を汗をかきかきアテネとピレウスの客を五日間で二〇数軒廻りました。ギリシヤは三度目ですが、色んなギリシヤ人と話していて感じるのは視野の狭いこと。確かに短期的にどうしたら金儲けが出来るか、については実に詳しいのです。古いボロ船を買って来て安い運賃で利のあるところどこへでも荷を運びます。人よりも如何に早く上手い汁を吸うネタを探るか、これが勝負のようです。景気が悪くなれば船を売って金を抱えて静かに時を待つのです。こうしたことは彼らの殆どが個人企業乃至は同族会社だから出来ることです。その代わり生活

をエンジョイすることにかけては日本人なんか足許にも及びません。遊ぶために働く、
と言う言い方がピッタリだと思います。

今やギリシャの船会社の数は六〇〇とも八〇〇とも一〇〇〇とも言われます。アクテ
イ・ミオウリと言うプレウスの有名な通りに行くのと、ビッシリ並んだビルの上から下ま
でが小さな船会社の事務所なのです。これだけ多くの群小の船会社が存在出来ていると
いうこと自体大変なことだと思えますが、夫々が自分自身の知恵でシコシコと稼いでい
るでしょう。長期的ビジョン、といった話になると物足りません。大きく投資して大
きく儲ける、と言うより目先を追い、人より一寸上手いことをしてカスメ取るうという
精神が見えます。商売もこの調子でやられますから、たまったものではありません。こ
ちらも色々調査して付き合える客とそうでない客を分ける必要があります。

買い物に行くのと例によって値引き合戦が始まります。とにかく、正札で買うのはバカ
だ、と言うのですから、こちらの言い値は半値ぐらいから始めて良いのです。でも、気
の短い日本人、それもゆっくりネゴを楽しむ余裕のない旅行者はどうしても損をします。

小さなスプーンを買うのに一〇才位の女の子が相手になりました。どうしても言うことを聞かないので、正札の四分の三位のところ、もう良いや、と思つて折り合いをつけましたが、隣の店に行ったら正札自身がその半値。女の子にも敵わないのか、とガツカリしました。これではイカン、と思ひ、チョツとした置物を買うのに二・三軒歩き回り、思うような値引きをしてくれないところは断つて店を後にして良い気持ちでしたが、大体相場が掴めていざ買おうとしたとき品物がなないので、元の店に戻る時間はないし、結局飛行場で一番高いものを買わされる羽目になりました。

車の運転、乗り物への乗降、空港での手続き、全く秩序がありません。割り込みは世の習い。少しでもカスメ取ろう、人よりも上手いことをしてやろう、と言つ精神が露骨に見えます。と言つて大きなことは出来ません。泥棒にしたつて、刃物で脅して、命か金か、と言つのは少ないそつで、せいぜいカップライ、スリの類。銀行に忍び込んでお札が山と積んであつても、こちらの泥棒は上の方の数センチくらいを盗んで来るのではないか、という笑話があるほどです。

客の海辺の別荘に招かれました。潮風のベランダで地酒のウーゾを一杯やった後、外で食事をしよう、と言うことになり、五ノ六人で別荘地帯をブラブラ歩いて目的のレストランの前まで来たところその男が言うのです。「良いことを思いついた。別のレストランにしよう。純粹のギリシャ料理を食べさせる小料理屋があるからそこにしないか」と言います。目的のレストランには予約でもしてあったらしく奥さんが困った顔をしているし、どうしたものか、と思いましたが、その方が面白そうなのでOKしました。それから家へ戻り、今度は車で一〇キロくらい離れたところまで出かけることになりました。ここは一〇〇年以上前からある旅籠で、屋外での食事は雰囲気も良く、自家製のワインもあって、この選択は正解ということのようでした。この人は国際感覚も充分ある元軍人で、所謂土地の人ではないのですが、それでもこうした思い付きを大事にします。この人が、ギリシャ人は考え方が弾力的なんだ、弾力的だったから国がこんなに長く保っているんだ、若し組織化された社会だったらギリシャと言う国はとっくに消えていただろう、と言っていました。確かに色々な考え方の人がいて、それらの人達がテン

デン・バラバラに自分の生活を守ろうとしたら、纏まりはないけれど何があっても強いでしょう。

最終日が土曜日だったので、船で島巡りをしました。ギリシャには四〇〇以上の島があつて、その内の二〇〇以上の島に人が住み、これらがギリシャ神話やホーマーの詩の舞台になっています。その内の小さな島を巡る途中で、アギナと言う半島でアクロポリスよりも古い神殿の跡があるところへ行きました。この神殿は光の神アフエア（別名フオス = Phos・Photographの語源）が祭つてあつたところだそうです。この遺跡の破風についていた大理石の彫刻（トロイ戦争の立役者二五人の像だつたとのことですが）を心無い旅行者が持ち去つたとのこと、今ミュンヘンの博物館にあるのだそうです。案内してくれた年増の女性が、髪を振り乱してこのことを語り、ドイツには一人の生きた大使と二五人の石の大使がいるんだ、と心を込めて訴えていたのが感動的でした。

ギリシャにも長い被征服の歴史があります。狡すつからさ、掠め取りの精神も被征服民族の特徴とも言えましょう。ギリシャ人には被征服の経験のないスペイン人や英国人

に見られる大らかさは残念ながらありません。でも、その中でこうして生き残ってきたのはこの国（この国の人はギリシヤと呼ばれるのを好みません。ギリシヤは外国から与えられた名前で、本来はヘラスと呼ばれます。ヘレニズム文化のヘラスです）を愛する気持ちの上に立ったコスツカラサがあつたからではないか、と思います。

（昭和三十一年十一月二十二日）

英国行き添乗員

私が卒業した長崎東高の同期生で略々二年に一度海外旅行をして来ていることは以前ご紹介したことがあります。一昨年九月、カナダへ行つた帰りに、今回は英国にしよう、予定は再来年の六月（今年のこと）にしよう、ということが決まりました。この旅行会では持ち回りでその回の団長を決めることにしているのですが、その後私に、団長をやってくれないか、と言う話がありました。英国なら守備範囲ですから、ご案内役として団長位やつても良いかな、とも思いましたが、今更英国でもないな、と言う気も

あつて、あまり乗り気ではありませんでした。その内に自分の入院騒ぎがあつて、この話は何となく立ち消えになつていました。

退院したのが昨年八月。昨年秋頃から具体的に旅行の計画が作られ始めたのですが、折角行くのなら私の見て貰いたいところを含めて欲しい、と言う気持ちもあつて、計画を担当する実行委員の一員になりました。今回の主目的が湖水地方なので、エンジンバラから入つて南下するルートとし、出発日と日数を決めてJTBに提案をさせたら六月九日にストラトフォード・アポン・エイボンに泊まるスケジュールが出て来ました。ストラトフォード・アポン・エイボンと言えば、ご存知シエクスピアの生誕の地。立派なシエクスピア劇場があつて私も二度ほど行つています。その時期に何をやっているか、インターネットで調べてみたら、その前日とその日の二日間「ロミオとジュリエット」をやっていることが判りました。こんな好機は滅多にない。これを今回の旅行の目玉にしよう、旅行会社に頼むとややこしくなるし高いものに付くので自分でやってみよう、と思ひました。皆さんへの最初のご案内の中でこのことを紹介して貰い「予約の可否は

保証の限りではないけど、希望があれば私が切符の手配をします」と言うアナウンスをしました。これが効いたらしく旅行への参加希望者は四〇人を超え、シエクスピア劇場観劇の希望者も三四名になりました。こうなると予約を約束してしまつたこちらにも震えが来ます。久し振りにコレポンの真似事をやり、一寸ゴタゴタしましたが、ファックスとメールで首尾良く最上席を団体レートで予約し、クレディット・カードで精算。事前に代金の回収も済ませてホツとしました。場合によっては自分が旅行に参加出来なくても切符だけを渡せば良いや、と思つていましたが、ここまで来ると逃げる訳には行かなくなりました。幸い手術の予後も、抗がん剤を含む薬のお世話にはなつてはいるけど好調で、大丈夫だろう、と、参加と団長就任を決心しました。

最終日のロンドンが丸一日自由行動になつていたので、地下鉄で歩くロンドン観光を提案し、希望を募つたところ半数の人が参加希望と言つことで、その日は大部隊を引率して地下鉄でロンドン中を歩き回ることにになりました。引率者が最初に参つてしまつては格好がつかないので、足腰は鍛えておかねば、と毎朝の裏山歩きには自然と力が入る

ことになりました。

で、出発日の六月五日には成田空港で「事故と健康管理には充分注意するように」という団長訓示を出して出発の運びとなりました。

一・エンジンバラ

やはり安い団体旅行は狭いエコノミー席での長時間がづらい。飛行時間は一時間ほどでしたが、現地での時差ボケ解消のため、機中では出来るだけ寝ないことにし、映画三本と司馬遼太郎の「街道を行く」で過しました。海外旅行が億劫になるとしたらこの機中の苦痛でしょう。ロンドン乗継でエンジンバラ入りしました。

着いたのが午後九時過ぎなのですが、緯度の高いこの地方は今の時期は十一時前まで明るいです。寝る前の散歩ということで、サー・ウォルター・スコットの立派な立像のあるメインストリート・プリンセス通りを希望者と一緒に三〇分ほど歩きました。

翌日はエンジンバラ城を中心に、スコットランドの首都を観光。ロイヤル・マイルの通りなど、古くて美しい町並みを楽しみました。

二・湖水地方

エジンバラから今回のお目当ての湖水地方までは四時間以上のバスの旅ですが、「英国は田園風景が見ものだから、バスの中での居眠りは勿体無いですよ」という予告が効いたのか居眠りは比較的少ないようでした。本当に田園風景を楽しむなら汽車の旅が一番良いのですが、これだけの人数になると乗降と荷物の移動が大変なのでどうしても括バスでの移動になります。

湖水地方には二泊しましたが、流石に美しく維持されていました。英国にはこうした環境を美しく保とう、産業から環境を守ろうとする信託システムがあつて、これは十九世紀の初めにこの湖水地方から始まったと言います。詩人ワーズワースの家・ダブ・コテージではあれだけの世界的に有名な詩人の住処の質素なことに驚き、ピーター・ラビットの著者、ベアトリクス・ポッターの生涯やピーター・ラビットの世界を紹介した博物館を見物し、湖上の遊覧船と湖畔のSLを楽しみました。

三・チエスター

湖水地方からは三時間足らずで、「嵐が丘」のエミリー・ブロンテを生んだハウオーズです。生憎（？）の上天気で、ヒースクリフが彷徨った荒々しいムーアの雰囲気は味わえませんでしたが、ブロンテ博物館や三姉妹が眠るパリッツシュ教会を見物しました。

そのまま二時間足らずで古都チエスター入り。

チエスターにはローマの遺跡も残っていますが、もっぱら中世の町と見受けました。街を完全に包囲している城壁も十一世紀頃のもの。城壁を一時間ほどで一周できます。街並みは白い漆喰の壁と黒くて太い柱のチューダー調の建物。街の中心になっている大聖堂は噂に違わず見事なものでした。

四・ストラトフォード・アポン・エイボン

夕方の観劇がメインなので、早めにストラトフォード入り。シエクスピアの生家、奥さんのアン・ハサウエイの実家の農家などお決まりの観光でしたが、シエクスピアの生家では英国風庭園が綺麗でした。

早めの夕食を済ませて、ソロソロ歩いてシエクスピア劇場。「少しお洒落をして観劇

の雰囲気を味わったかどうか？」との事前のお勧めが効いて男性はジャケット・ス
タイル、女性は殆どがスカート姿で決めていました。こう言う機会を作ってあげるのも、
旅の楽しみの一つではないかと思えます。外国での観劇は言葉が分からないので、お勧
めが難しいのですが、シエクスピアなら筋を知っている人が多いし、「ベニスの商人」
か「ロミオとジュリエット」なら勧めてみようと思っていました。幸い「ロミオ」の方
だったので、誘ってみました。こんな経験は中々出来ないであつて、大変な人気にな
り、最上席三十四席を我々の一団が占めたのは壮観でした。私が観た前二回と同様に、
クラシックな衣装ではなく、現代風にアレンジされていました。言葉は私も含めて殆ど
分からず、前半は退屈で居眠りも出ていたようでしたが、後半、毒を飲んだり、ナイフ
で胸を刺して自殺する部分になって盛り上がって来ると流石に居眠りはなくなつて最
終的には満足してくれた人が大半を占めました。まずまず成功と言えるでしょう。

五・ロンドン

ストラトフォード・アポン・エイボンからロンドンに向かう途中、コッツウオールド地

方の田舎町、ポートン・オン・ザ・ウオーターに立ち寄りました。この地方は産業革命の頃、石炭の出るルートから外れたため、取り残される羽目になり、お蔭で近代化しな
いまま昔の美しい田舎が残っていると言ふ事で観光地になつているところです。この近
郊にはこうした村が幾つもあつて、私たちが四年前にドライブした時はその内の幾つか
を回つたのですが、今回は代表でこの一箇所だけになりました。静かな綺麗な川と言
うか池を中心にした美しい村です。

その後、三時間ほどで昼過ぎには最終地ロンドン入り。この日は昼食後そのままバス
でロンドンの主要観光地を回りました。殆どが車窓からの観光。バッキンガム宮殿とウ
エストミンスター寺院のみが下車地でした。途中、物凄いハプニングがありました。丁
度、首相官邸・ダウニング○番地の説明に入ろうとする頃、自転車に乗つた全裸の男
女一行のデモに出くわしたのです。全くスツポンポンの老若男女が二〇〇人はいたと思
います。日本だと軽犯罪とか、猥褻物陳列罪とかで罪になるので、警官が出たりして騒
ぎになりますが、英国ではデモとしての目的がハッキリしていれば一つの示威行為とし

て認められるようです。でも、バスの中は大騒ぎ。首相官邸なんて見ている人なんていやしない。全員が反対側の窓からの日本では見られない風物を楽しんでいました。

最後はお買い物タイム。無難に三越になっていましたが、やはり一部の女性の買い物には迫力がありました。

翌日の最終日が私の本番です。この日は全くの自由時間になっていて、元海上自衛隊の将官と一緒に歴史的軍港ポーツマスに行く組、個人で予定を作る組、現地のツアーに乗ってウインザー城へ行く組などが出来ました。私の「地下鉄利用、徒歩でのロンドン観光」には半数以上の二〇人が参加。せいぜい一〇人程度ならコントロールし易いのに、こんなに大勢になって困ったことになった、と思っていました。まず、スリの事故を防ぐために貴重品は強制的にホテルに預けてもらい、こちらはギンギンに目立つナイキの赤い帽子を持って行って、この帽子から離れないことを約束して貰いました。集まったときにホテルのロビーで円陣を組み、手を繋いでもらって「幼稚園みたいで申し訳ないけど」と言いながら自分の両隣の二人を覚えてもらって、途中での人員点呼に使う

ことにしました。これなら一々数を数える必要がなく、ひと言「居ますか？」と聞けばすぐに分かるシステムが出来て好評でした。

ロンドンも物価が高くなってきているのに驚きました。普通の商品もそうですが、地下鉄の初乗りが三ポンド（約六〇〇円）と言うのには参りました。私が最初にロンドンに行った一九七一年頃の初乗りは五ペンス、当時のレートで四十五円程度でした。三五年間で円価で十三倍になったのにも驚きましたが、ポンドで六〇倍になっているのですから、ロンドンっ子が一番驚いているのでしょう。一日乗車券を三・五ポンドで買いましたが、これが大正解。各駅での切符購入の時間を節約するだけでなく、格段の割安で助かりました。ホテルが西の方にあつたので、一部の希望に合わせて王立植物園のキュー・ガーデンをトップに持って来て、その後一番東のロンドン塔まで行き、後は大英博物館とナショナル・ギャラリーを短時間ずつ見よう、と言う欲張りな計画を立てました。ところがこの日は異常気象とやらで大変な猛暑。その所為でレールが曲がったとかで地下鉄がそこから故障しているのです。まず、最初のキュー・ガーデンから故障が始まりまし

た。途中の駅で地下鉄が止まってしまつて、この先はバスでないと言ひます。地下鉄の駅を出て二〇人を引き連れてバスの停留所を探すのが一苦労。それでも路線バスに乗るなんて団体旅行では出来ない経験ですし、却つて二階建バスの二階からの街並みの眺めを楽しんだり、乗客の一般の英国人との接触を喜んでゐる人もいて少しは気が楽になりました。振替輸送用のバスですから、地下鉄の一日乗車券が有効です。全部でバスと地下鉄を何回乗り換えたことか。これが全部で三・五ポンドですから、乗車距離と乗車時間を考えれば安い運賃でした。それでもバスに乗ると地下鉄の何倍もの時間がかかります。バスには四回ほど乗せたでしょうか。地下鉄も次の駅まで行くのに、その線が不通だと回り道になつて乗換えが二回も三回も必要になり、その都度、乗り換えのため駅の中を延々と歩かせることになるし、情報が混乱してゐて、駅員が教えてくれる情報が間違つてゐることもある。情報の間違いは情報の収集・伝達係の責任になる。最後の頃は、あまりに騙されて悲しくなるほどでした。

キュー・ガーデンはバラ園とメインの温室と睡蓮の館のみ。ロンドン塔は宝物殿で

五三〇カラットのダイヤモンド「アフリカの星」。ここでフィッシュ・アンド・チップスとイングリッシュ・ビールの超軽食の昼食にしましたが、移動の関係で大分時間を損じたものですから最後のナショナル・ギャラリーが危なくなりました。多数決で先に大英博物館に行くことにし、ここはロゼッタ・ストーンとエルギン・マールを中心にし、リシャとアッシリアの部屋を見ただけでナショナル・ギャラリーに挑戦することになりましたが、全くの閉館直前の飛び込み。守衛のオジサンに「後一〇分だよ」と言われるほどでしたが、昔行った時にメモしておいた美術館の中のレイアウト図面を持っていたので、ターナーやダ・ヴィンチ、フェルメールと皆さんが希望する絵のところへはピシャリとご案内出来て、短いけれども行っただけのことはあったようです。足の悪いご夫人がいて、まともに団体行動に付いて来られないのも悩みの種でした。方向さえ示しておけば、焦る人はトップをドンドン歩きます。二〇人の列は長く長く伸びて、リーダーとしてはその間でヤキモキせねばならない。これだけの人数になると案内役が一人では到底無理なんだ、ということを感じました。それでも汗を掻き掻きの敢闘振りは皆さ

んにも理解して貰えたらしく、終わってから盛んに慰勞され、ご苦勞様、の声を掛けられました。

帰国の日はお昼にホテルを出て空港に向かうことになっていました。ホテルから地下鉄で二駅のところ有名デパートのハロツツがあるので、雰囲気だけでも見せてあげたい、と思っていました。最近ではハロツツ側の受け入れ姿勢が煩くなっていて、添乗員の説明によりますと、例えば四人以上の集団で歩いてはいけない、とか、ジーンズでの入場はお断り、なんて言うのだそうです。どうしても、と言うご希望の二人を連れて出かけました。ハイドパークを一寸散歩して開店を待つて入りました。これらの煩い制限は特に守衛がヤカマシク言うのだそうですが、私たちの人品骨柄を見たのか入場制限もないし、お店の店員は親切だし、店内の雰囲気は流石にハロツツならではの、と言う感じがピッタリ。買い物も出来て、ロンドン最後の一時間を楽しんで貰いました。

六・エピソード

結局、一人の怪我も病気も落伍者もいなくて、団長としては誠にラッキーのままお役

目を終え、総括のご挨拶が出来ました。

帰国後、三日ほど東京で過し、帰宅しましたが、まだメールや手紙でお礼のメッセージが飛び交い、写真の交換が行われていて、これが済むまで皆さんの旅行気分は癒えないと思われれます。

私としては手術後初めての海外旅行。手術後一年目の六月七日を湖水地方で迎える羽目になりました。おまけにこれだけハードなお役目をこなしても何の障りもなく、自信を付けました。

(平成十八年七月七日)

世界遺産 絶景 これが見たいベスト三〇

NHKが「世界遺産の旅」と言う番組をやっていますが、二年ほど前に「これが見たいベスト三〇」と称して視聴者のアンケートを取ったことがあります。自分が実際にこの内の幾つを観たのかを思い出してみました。何だか又、人が観たところは自分も観て見たい、と言う私のミスター振りをご披露しているようで恥ずかしい感じがします

が・・・。ベスト三〇の中で一番多いのが欧州地区で九ヶ所ですが、私はこの内の七ヶ所を観ています。次いで多いのが南米の六ヶ所ですが、南米には行ったことがないので、観たのはゼロ。北米が四ヶ所中二ヶ所。アジアが三ヶ所中二ヶ所。中国が三ヶ所ありませんが、これはゼロ、と場所によって多寡があります。観光目的で出かけて行って観たものよりも、仕事目的の出張中に時間を見つけて観るチャンスを作ったものの方が多いので、どうしても都会の近くにある文化遺産の方が多く、自然遺産や僻地にある遺跡なんかは観たことがないものが多くなります。(観たことのあるところを四角で囲ってみました。)

アンケートで圧倒的に人気が高かったのが、ペルーのマチュピチュ。二万票の内一八〇〇票を集めています。これは高山の奥にあるインカ帝国時代の都市の遺跡だそうですが、これこそこの遺跡を観るだけの目的で出かけなければ観られない代物。あまり大きな興味もないので、これは今後も観ることはなさそうです。

二位がフランスのモン・サン・ミッシェル。これは二〇〇三年に高校の仲間とフラン

又旅行をしたときに訪れて来ました。フランス北部の海に突き出た砂州の先つぽの小さな島全体が教会になつていて、引き潮の時は歩いて行けるのですが、満ち潮になると砂州の部分が海に覆われて完全に島になります。ガブリエル、ラファエルと並ぶ大天使三人の内の一人のセント・ミカエルの山、と言う意味だそうです、他では中々観られない景観。一見の価値がありました。

三位がこれも南米、アルゼンチンとブラジルの国境にあるというイグアス国立公園で、巨大な滝が有名です。南米には行く機会がなかったので、これは観たことがあります。が、滝の豪壮な景観は好きな方なので、観てみたいな、と思つているところの一つです。リビングストーンが発見したアフリカのヴィクトリアの滝なども観てみたいと思つています。先日、佐賀県の佐里と言う小さな温泉に行った時、近くの「見返りの滝」と言うのを観ました。日本の滝百選に選ばれていると言う綺麗な滝でした。日本の滝は豪壮と言うより美しい滝が多いのですが、これはこれで良いな、と思ひます。

四位が中国の九寨溝。四川省にある美しい渓谷とのことですが、中国には仕事で二度

行っているものの、いずれも仕事本位の訪中で観光は一切ありませんでしたので、故宮博物館を除いて、中国の観光地には行つたことがありません。十八位の黄龍、十九位の万里の長城も観たことはありません。万里の長城や明の十三陵は出張の際、無理をすれば観る機会があつたのに、仕事を優先して自らその可能性を消したものだ。この二つからは観に行つても良かったかな、と、今頃になって残念に思っています。

五位がエジプトのピラミッド。一九九〇年にスエズ運河管理局の仕事でポートサイドに二週間ほど出張した帰りにカイロに寄つて近郊のギザに連れて行つて貰い、観て来ました。大きな石がかみそりの刃すら通らないほどピッシリ積み上げられていて、クレーンもなかった四〇〇〇年もの昔に、どうしてこんな大きな土木事業が可能だったのか、と感心した覚えがあります。エジプトでは無理をしてもクレオパトラのアレクサンドリアに行つて来れば良かった、と今でも残念に思っています。

六位がカンボジアのアンコールワットです。大変に美しい景観と聞いていますので、これは昔から一度観てみたいと思つていたものですが、カンボジアには仕事で行く機会

はなく、訪れる機会がなかったものです。今でも夢は持っているのですが、戦乱で大分荒れてしまったと聞いていますので、行くとしたらその辺の確認が必要でしょう。

七位がアメリカのグランド・キャニオン国立公園。一九八三年に仕事でロス・アンジエルスに行った時、同行のエンジニアを博打を餌にして唆し、現地の新聞で格安のバスツアーを探し出して、週末に博打好きのオバチャン達のバスツアーの仲間に入れて貰ってラス・ベガスに行った際、夜のカジノ行きの前に空から見物しました。小型のセスナ機でフワフワと自由自在に飛んで見せてくれたのを思い出します。コロラド河が長年に亘って大地を削って出来た豪快な渓谷で、これも他では観られない勇壮な景観でした。八位がペルーの巨大なナスカ地上絵。これも観たことがありませんが、こんなものは地上からは見られないものではないかと思えます。ヘリコプターか何かで空中から見る必要があるでしょう。

九位がインドのタージ・マハール。一九九〇年に初めて最後のインド出張をした時に、観て来ました。インドに行くんだったら、絶対に見て来たいと考えていましたので、む

しる自分で仕組んで観に行ったもの。仕事はボンベイが主体だったのですが、ニューデリーでのお役人や大臣とのアポイントを月曜日に作って、その前日の週末を利用して出かけたもの。本当に美しい建造物で、これだけ無理をして仕組んだだけの価値は充分にありました。出張中に無理に観光を仕組んだのはこれが唯一の経験でした。

十位がベネチア。イタリアには仕事で何度も出かけていますが、ベネチアには

二〇〇〇年に家内とイタリア旅行をした時に、初めて行きました。海の上に作られた都市で、確かに世界遺産に登録される価値のあるところ、大切に遣す価値のあるところ、と思いました。運河を走るバス、ヴァレットが印象的でしたし、サンマルコ広場で味わったカンパリ・ソーダの美味しさと、その折経験した音楽バンドとの気持ちの良い交流が忘れられません。地球温暖化の影響で海面が上がって来ると、この街は消えて行く運命にあるのでしょうか。寂しいことです。

第十一位はイタリア・フィレンツェの歴史地区と言うことです。ここは何度か訪れました。美しいドゥオーモを中心とする見事な建物とこれ又見事な石像や銅像が並ぶ広場

の組み合わせが世界遺産ということになっているのでしょう。確かに何度行っても感銘を受ける美しい場所です。

十二位がチリのイースター島。モアイと呼ばれる巨大な石像群があるところ、十三位がエクアドルのガラパゴス諸島で、ダーウインのビーグル号航海記に出てくる島ですが、両方とも行ったことはありません。十四位と十五位がいずれもオーストラリアでグレート・バリア・リーフとエアーズ・ロックですが、これらも観たことはありません。オーストラリアも仕事で何度か出掛けていますが、いずれも南のメルボルンが中心で、北部や内陸の観光地は訪れる機会がありませんでした。

十六位と十七位がいずれもスペインで**バルセロナ・ガウディ建築群**と**アルハンブラ宮**殿です。スペインには仕事で訪れる機会はなく、ロンドンに駐在している頃に現地で募集していたツアーに参加した時の一度しか行ったことがありませんが、これらはその時に観たものです。ガウディは当時から大変な評判で、ガウディ設計の建物とか公園とかが持て囃されていましたが、何だか奇を衒った感じで私はあまり好きになれませんでした

た。これらはもう一度観て、私の第一印象を確かめてみる必要があるかな、と思つていきます。聖家族（サグラダ・ファミリア）教会はガウディが設計したものを百年以上もかけて未だに作っていました。その後の進捗状況も確かめに行つてみたいものです。アルハンブラ宮殿はイスラム文化の粋。土の壁に彫られた精密なレリーフが印象的でした。十八位と十九位に中国が来て、黄龍と万里の長城。

二十位がアメリカのイエローストーン。これは温泉を中心とした世界最古の国立公園とのことですが、それ程興味がありません。こうして改めて思い出し、考えて見るとどうやら私は自然の景観よりも人間が作った文化や歴史の方に興味があるみたいです。このイエローストーンや中国の九寨溝・黄竜よりも中国なら万里の長城や秦の始皇帝の兵馬俑坑の方に興味があります。

二十一位にやっと日本が出て来て、屋久島です。ここは珊瑚会の旅行で下見を含めて二度行っています。屋久杉は見事でしたが、山登りをサボって縄文杉を観ていませんので、値打ちは半分なのかも知れません。ここでは玉川兄に大変なお世話になったのです

が、それより川口兄と一緒に行った最後の旅行、と云うことで忘れることの出来ない場所になりました。

二十二位がベネズエラのカナイマ国立公園と云うことで、九七九メートルと云う世界で最大の落差のある滝があるそうですが、これは寡聞にして聞いたことがありませんでした。

二十三位がイタリア・ローマの歴史地区。ここも出張に引っ掛けて何度か訪れていますが、やはり観光で行った二〇〇三年の訪問が一番印象的です。ローマと云う街、名画「ローマの休日」で紹介された立派な観光地なのに、もう少し観光客に対する思いやりみたいなものがあっても良いのではないか、と感じたことを思い出します。

二十四位にトルコの**カップドキア**が上げられています。高校の同級生に誘われて、二〇〇五年の一月に超安値のツアーに乗って行って観たもの。岩を頭に載せた石の柱が林立する正に天下の奇勝。トルコなんて中々行く機会のないところです。無理をしても決行して良かったと思っています。

二十五位がイタリアのアルベロベッロで、南イタリアにある不思議なとんがり屋根の家が並ぶ街だそうです。

二十六位がイタリア・ミラノのサンタマリア・デッラ・グラチエ修道院となっていていますが、これはダ・ヴィンチの「最後の晚餐」の壁画が文化遺産と言うことになっているでしょう。ここには都合三度訪れています。最初は保存状態も良くなく、観る環境もお粗末でしたが、最後に観たときはいずれも大幅に改善されていて、これなら大丈夫、と思ったことでした。

二十七位がアメリカのヨセミテ国立公園。自然が完全に保護された巨大な国立公園と
のこと。

二十八位がヨルダンのペトラ。一度観てみたいところの一つですが、人気があるのは、映画「インディ・ジョーズ」の何作目かで、ハリソン・フォードとショーン・コネリーが活躍する場になったのも理由の一つではないでしょうか。

二十九位がカナダのカナディアン・ロッキーマウンテン山岳公園。本当に豪快な岩山の連山で、

ロッキーとは良く名づけたものと感心しました。自慢の氷河が地球温暖化の影響で、年々後退している様子が眼に見え、環境保護に対する思いを強くしたことでした。

三十位がギリシヤのメテオラ。大きな奇岩群とその上に建っている修道院だそうです。以上、ベストテンの内、私が観たのが五ヶ所でしたが、ベスト二〇までで八ヶ所、ベスト三〇までで一三ヶ所、と言う結果になっています。まだ、半分に満たないということです。これからは仕事で出かけることはありませんから観光が主体となりますが、どの程度増やして行けるのだろうか。

(平成十九年六月五日)

209

スペイン・ポルトガル旅行

一．プロローグ

私の高校同期の仲間との付き合いについては、何度かご紹介したことがあります。長崎東高第八回の卒業生なので「東八会」と名乗って、仲良くしています。東京に出ている連中が結構多いのですが、その中に市原緑さんと言う女親分がいて、首都圏の会はこ

の人の面倒見が良くて纏まって来たものと言っても良いでしょう。周年には全国的な集まりもやりますが、長崎・東京・関西での集まりも夫々に定期的にやっていて、参加者数も結構多いのです。長崎では二ヶ月に一回ゴルフ会をやっていて、これは私の担当ですが、偶々帰省して来る人達も参加してくれて賑やかにやっています。

この女親分が中心になって、一〇年以上前から二年に一度海外旅行をすることにしていました。最初の頃、東欧とイタリアに行ったことは聞いていましたが、その頃の私はハウステンボスの立ち上げに七転八倒していた頃ですので、参加する余裕がありませんでした。三回目にスイスに行った時、偶々私のオランダ出張と時期が重なったので、現地で合流して初めて参加しました。同窓生とは言うものの、奥さん方とか、そのご友人とかに輪が広がっていて、仲々気持ちの良い旅行会になっていたので、その後は出来るだけ参加することにしました。女性が自分の旦那を連れて来るケースはまずありませんが、男性が奥さんを同伴するケースは増えて来ていました。この年になると結婚したけど未亡人になった同窓生が出て来ています。私はこれが気になって、同窓会は同窓生同

志の集まりなのだから、奥さんを連れて来るのはルール違反ではないかな、未亡人の方達に対して失礼ではないかな、と言う感覚が抜けず、偶々家内がこの種団体旅行に前向きでないこともあって、最初から一人で参加することにしています。これは個人的な感覚ですから、他の人が奥さんを連れて来ることは気にしたことがなく、奥さん方も仲良くなっています。

旅行の企画は親分らしく粗くて大雑把なもので、旅行会社の言いなりになっている感じがして気になっていましたが、こうしたお世話をやってくれるだけでもありがたいことだ、と割り切ることにしていました。その後、フランス・カナダ・英国には出掛けて行って、これら四回の旅行記は夫々にご紹介しました。前回の英国はどちらかと言えば私の縄張りなので、企画委員の一員になって計画から参画し、実施に当たっては団長役を引き受けて大分活躍したのです。一昨年、七回目のドイツに行った時は、日程が合わず私は参加出来ませんでした。ところがこの女親分が昨年急死してしまったのです。これでこの旅行会はオシマイ、と言うことになったのですが、昨年の暮れになって、私

が主催するゴルフ会に東京から参加した男が、「家内に頼まれて来たことがある」と言うのです。旅行会への参加者はある程度固定化しているものの、入れ替わり立ち代りです。何時も三〇人程度になるのですが、七回目ともなると皆勤で参加している人の数は減ってきています。現在のところ、件の女親分に加えて二人の女性が皆勤賞なのですが、件の男の奥さんがその一人なのです。曰く「八回生なんだから、旅行も七回で終るのは残念だ。最後の八回で打ち上げにしよう。長島さんに頼んでくれ」と、あまり理屈にはならない理屈だけど、正に、雌鳥が突いて雄鶏が刻を告げる、のパターンです。ここで逃げては男が廃る、と引き受けることにしました。

私は五年前に玉川夫妻と馬場夫妻とのスリー・ペアでのスペイン旅行を計画したことがあります。直前になって胆管ガンが見つかり、入院・手術ということになって、両ご夫妻には大変なご迷惑を掛けたのです。その後もこの計画が再現出来ないか、何度か考えてみたのですが、夫々に家庭の事情や本人の体調などの理由で、どうしても再現できませんでした。この年になると、一度チャンスを逃すと再現は出来ないものなんだな、

と思いつつあったのですが、これを再現する機会に出来ないか、と考えました。玉川夫妻と馬場夫妻には申し訳ないけど、理解して頂けるでしょう。その後、件の雄鶏・雌鳥夫妻と相談の結果、スペインにポルトガルを加えてやろう、と言うことにしました。

女親分の計画はJTB任せの団体旅行になるので、こちらの希望を容れてはくれるけれど、値段的に高いものになっていました。今回は我々だけのために作って貰う旅行ではなくて、既存のツアーを一括して買い取ることが出来ないか、検討してみることにしました。色々な旅行会社のパンフレットを集めて来て比較検討してみると、どうやら阪急交通社のものが一番良さそうです。担当者に電話をして買い取りの可能性を当たってみたら、二五人を超える人数を集めたら相談に乗ってくれることが分かりました。

今年の年明け早々に、過去の参加者を中心に候補者をリストアップして、第一回のアンケートを取りました。七七人にアンケートを送ったのですが、この内の四〇人以上の人から、参加を考えたい、との返事が来ました。こんなに増えると、一組では収まらなくなつて、そうなると二組分の五〇人以上を集めねばならない、と言う逆の心配をする

場面もありましたが、時期を絞って行ったら最終的には三〇人と言う丁度手頃の数に収まってホツとしました。

原案に使用した阪急交通社のパンフレットは昨年のも物だったのですが、今年のパンフレットが出来て来たので見てみたら、今年は昨年とは行程が逆周りになっていて、私のイメージとは懸け離れているものになっています。私が大切にしていた目的の一つがマドリッドでの「ゲルニカ」鑑賞だったのですが、時間の都合でこれが外されています。これは大変、と、ここは強硬に交渉して、昨年のツアーを我々のために再現してもらうことにしました。その後、年寄りの団体だから、と言うことでバスでの移動を減らして、一昨年開通したと言うAVEと言う新幹線に乗ることにしたり、連泊の個所を増やしたり、希望のオプションを作って貰ったり、食事に注文を付けたりして、まずまずの旅行が組み上がりました。

と言う訳で、十月十二日発で一〇日間の欧州旅行に出掛けます。

七十二歳の年寄りが中心の団体ですから、全員が無事で完走出来るかどうかが一番

の心配です。それより何より世話役の自分がひっくり返っては大変なので、緊張しています。

旅行記は又いずれ・・・。

(平成二十二年十月七日)

二・ ガウディのこと

フランクフルトを経由して、スペインへの入口はバルセロナでした。バルセロナには三五年前に一度行ったことがあります。ロンドン駐在中には欧州の殆どの国には何度も出張で出掛けたのですが、スペインとポルトガル、それとリヒテンシュタインには仕事
の機会がありませんでした。で、一九七五年の冬休みにロンドン発のスペイン観光ツアーに参加したのです。マドリッドまで飛んで、バスでアンダルシア地方まで下るツアーでしたが、ツアーの最終地のマラガで一行と別れ、パエリアを食べるのを目的に一人で
バルセロナまで行き、そこから電車でバルセロナまで行って、七六年の元旦にロンドン
に戻ったのです。

バルセロナは何と言っても、ガウディの街。ガウディはピカソやミロ、ダリなんかと

並んで、一八九〇年代を飾ったモデルニシモと言われる芸術家集団の一員です。一八八二年に建て始められた巨大なサグラダ・ファミリア教会が未だに未完成で、ガウディの設計構想に従って工事が進められています。三五年前と比べて進捗状況に変化が見られるかな、と思いつつ行ったのですが、四本の塔は当ても既に建っていたし、私の記憶も定かでなく、私の目には変化を感じることは出来ませんでした。

カサ・ミラ、カサ・パトリオとかゲエル公園などガウディの建物と言うか作品を見て回りましたが、私は三五年前に最初に接した時からガウディの作品があまり好きではありませんでした。建物だったら、使う人の利便性を最優先に考えて、実用性が最重要視されるべきところなのですが、これらの建物は、自分の主張を重んじるあまり、人を驚かそう、人と違ったことをしよう、と言う所謂、奇を衒う姿勢が鼻に付いたのです。ハウステンボス立ち上げの頃、バルセロナ・オリンピックのマスコット・キャラクターのゴビーちゃんを作った、当時有名だったマリスカルと言うスペインの芸術家に頼んでアメニティ施設を作って貰ったことがあります。これも同じように自己主張が強いと言

うか、自己満足の塊みたいなものだったので、下らないものを作るもんだ、と私は冷たい目で見ていたのですが、案の定、全くお客に受けず、高い金を払ったのに最初に潰れたのがこの施設でした。スペインの芸術家と言つのは、皆同じ感覚の持ち主なんだろうか、と思つたものでした。

建築中のサグラダ・ファミリア教会も前回は一人で歩いて見て回つたのですが、今回はガイドが詳しい説明をしてくれ、ガウディの環境を大事にする姿勢や先の先を見た構想の大きさを知るにつけ、やはり仲々大した人だったんだな、と生意気ながら認識を新たにしました。近々、ローマ法皇が来られて奉献式なるものが営まれ、建築途中ではあるものの、単なる建物ではなくて教会として認められることになっているとのことで、工事のピッチも上がっているとのことでした（帰国後、十一月七日にこの奉献式が営まれた、とのニュースに接しました）。今は一〇〇メートル級の塔が四本建っています、これからもっと高い塔が出来るのだそう、一七六メートルのメインタワー一本を含めて十二本の塔が建つとのこと。ガウディが残したと言われる完成予想図がありました、

大変な建造物が出来上がることになります。ガウディは計画の当初から、自分の生きている内にこれが完成するとは考えていなかったそうで、構想のみを示して、後世の芸術家に次々と引き継いで行つて貰い、それらの人々の感覚で完成させて貰おうと言つた姿勢だったそうです。若し、最初の自分の構想が価値あるものと判定されれば、新しいアイデアを加えて造り続けて行つてくれるだろうし、価値がないと判定されたら、途中で建築が中止されるだろう、と言っていた、なんて話を聞いて、ガウディと言つた人はやはり仲々の人だったんだな、と思つたのです。既に、世界遺産に登録されている「(キリスト)生誕の門」の裏側に、今作りつつある「受難の門」の彫刻は、全く現代的な前衛風なものだったのに驚かされました。これから正門を造つて行くと言っていましたから、完成はまだまだ先になるな、と思つたのですが、ガイドの説明によると、巷で言われている五〇年後とか一〇〇年後ではなく、二〇年後ぐらいには完成する予定なのだそうです。でも、今の進捗状況から見て、二〇年後の完成なんてとても無理だろうな、と判定せざるを得ませんでした。

三・ゲルニカ

私の今回の旅行の大きな目的の一つは、ピカソの「ゲルニカ」の鑑賞でした。以前、文芸春秋の特集で、「一度は見たい世界の名画」と言うアンケートの結果、一位「モナリサ」（ダ・ヴィンチ）、二位「ひまわり」（ゴッホ）、三位「叫び」（ムンク）、四位「最後の晚餐」（ダ・ヴィンチ）等一〇点が上げられていて、私にはその内九点までは実際に本物を観る機会があつたのですが、第五位に上げられていたこの「ゲルニカ」だけは実物に接したことがなかつたので、一度観てみたいものだと思ひ続けてきました。多くの人が観たいと言つ絵を観たい、と言つのは、芸術的な興味で観たいと言つのではなく、単にミーハー的な興味と言つことになるのでしよう。

「ゲルニカ」と言ふ絵は、スペイン内戦の初期の一九三七年、当時力を付けつつあつたフランコ將軍が、ナチに頼んでスペイン北部のバスク地方にあるゲルニカという小さな村を空爆させた悲劇を描いたものです。昔の戦争は、軍人同士がやるものとされ、民間人には被害を与えないようにすると言つ暗黙のルールがあつたようですが、第二次大

戦の頃になると都市への空襲など民間人への攻撃が当たり前みたいな形になって来ていて、東京大空襲や原爆投下などがその最たるものです。このゲルニカ村への空爆は歴史上初めての民間人への無差別爆撃とされ、「ゲルニカ」は、これを聞いたピカソが怒りに任せて一ヶ月で描き上げたと言う、所謂反戦の絵です。色んな意味が籠められている、と詳しく説明してくれましたが、私には我が子を失った母の嘆きが一番強く感じられました。

スペイン内戦は当時世界中の注目を集め、世界中の知識人が、ファシズムを標榜するフランコを勝たせてはならない、自由主義を守れ、と言って共和派を支援しました。アメリカのヘミングウェイは取材の立場で戦場に入り「誰がために鐘はなる」等の名作を残しましたし、フランスからはアンドレ・マルローが空軍士官として参戦したり、「一九八四年」を書いたジョージ・オーウエルも実際に銃を取って戦ったそうです。結局、王制を支持して世界中からの応援を受けた共和派が負け、一九三九年にフランコ將軍が總統に就任して、民主主義・自由主義を完全に排したファシスト政権を作りました。

もつとも独裁政権とは言つても、フランコが勝手気侷な自分本位の政治をした訳ではなかつたようです。国民には自由を許さなかつたけれど、第二次大戦中も巧みな外交を展開して中立を守つてスペインを戦火から救つたし、自分も決して華美に流れない質素な生活をしていたそうで、私は一種の賢人政治を敷いていたのではないかとすら思つています。現に、フランコは、総統に在任中もチャーンと王家を残し、むしろ王子を教育して、自分の死後は政権を王家に返還しています。

こんな事情ですから、この反戦の絵を描いたピカソはスペインにはいられなくなってアメリカなどに逃げ出したし、この絵もアメリカに疎開しました。ジュネーブの国連の安保理事会会議場にもこの絵のタペストリーが飾つてあります。フランコが死んでファシスト政権が終わりを告げ、立憲君主制に戻つたのが一九七五年のことです。その後、交渉の結果この絵がスペインに戻つたのが八一年のことだつたそうです。私が前回スペインに行ったのが一九七五年のことでしたから丁度フランコが死んだ年で、この絵はまだアメリカにあつたのです。今回の旅で念願の「ゲルニカ」に接することが出来、長年の

思いを遂げることが出来ました。

四・天正少年遣欧使節

長崎好き、歴史好きの人たちが集って作っている「長崎楽会」については以前ご紹介したことがあります。二年ほど前に東京の会で天正少年遣欧使節に関して話をしたこともご披露しました。この時は一時間足らずの講演だったのですが、昨年九月に長崎の会でまた話をしました。今回は時間を二時間くると言っているので、その後仕入れた知識を加えて、当時の日本の政治情勢やキリシタン事情は勿論、欧州の政治や外交、塩野七生さんで学んだローマとの繋がり、この子たちがルネッサンス文化に接した唯一の日本人だった、と言った点もユックリ聞いてもらうことが出来ました。ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなどルネッサンス期の天才たちの絵や彫刻を映像にして紹介したり、地動説のコペルニクスの話やピサの斜塔とガリレオの話、宗教改革の話なんかも散りばめて、仲々好評でした。事前に長崎の行き付けのスナックなどで一寸話を出したら話が広まって、自分も聞きたい、と言う人が増え応援団が出来ました。長崎楽会の月

に一度の定例会に集る会員の数は通常三〇人程度なのに、この日の参加者はこのオブザーバーの応援団三〇人ほどを加えて六〇人を超える大盛況になりました。

今回のスペイン・ポルトガル旅行はこれを意識して作った積もりはなかったのですが、出来上がってみたら、偶々この使節団が辿った道の一部を逆に走るような旅になりました。私も移動中のバスの中での退屈凌ぎに、折角最近仕入れた知識を少々ご披露する機会がありましたし、その後も現地のガイドさんが替わる度に同じようなことを喋るものですから、今回の団体の一行は同じ話を三度くらい聞かされる羽目になりました。

使節団は長崎から二年六ヶ月の船旅の後、リスボンに上陸するのですが、我々の旅行の最終地点がリスボンでした。十六世紀の大航海時代を築いたのは、南米の南端マゼラン海峡を発見したマゼランも、アフリカの最南端喜望峰を回る航路を発見したヴァスコ・ダ・ガマもいずれもポルトガル人です。日本にキリスト教を持って来たフランシスコ・サビエルはスペイン人ですが、やはりリスボンを出て日本に向かっています。これらの人達を世界中に送り出したリスボンの港には、大航海時代をリードしたエンリケ航

海王子を先頭にしたご存知の「発見のモニュメント」がありました。一寸無理を言つて、四〇〇年以上前に四人の使節が二〇日間滞在したと言つイエズス会のサン・ロツケ教会の前を通つて貰つて、バスの車窓から写真を撮らせて貰いました。スペインからポルトガルに一寸入つたところにある街、エボラにも使節団の足跡が残っています。一行の伊東マンショと原マルチノが見事な演奏をしたと言われる大きなパイプオルガンも残っていました。スペインのマドリッドやトレドは勿論彼らを通つたところですし、マドリッド近郊のエル・エスコリアルにも行つて来ました。ここは当時、太陽が沈まぬ国と言われた大国スペインに君臨し、世界最強の王様と呼ばれたフェリペ二世が、フランスとの最初の戦争に勝つた記念として造つた修道院があるところで、この修道院が丁度使節団が行く直前に完成しており、王様自身が自ら自慢ながら案内したところなのだそうです。ここは幹事役の特権を利用して、マドリッドからセゴビアを含めてのオプシヨンを作つて貰いました。若干お手盛りの嫌いはありましたが、一見の価値はありました。こつした目的があると旅にも楽しみが出るし、深みが出るものです。

五・スペインのローマ

古代ローマの初代の皇帝はアウグストスですが、私は実質的な初代皇帝はシーザーだと思っています。シーザーはローマを北の蛮族の侵略から守るために多くの時間を割いて各地を転戦していますが、もっぱら今のフランスのガリア地方が中心だったようです。シーザーがスペインに入ったのは、ポンペイウスとの戦いの過程で、ポンペイウス軍を追ってスペインの南側を、コルドバを経由してカディツの港まで横断しています。スペインのあるイベリア半島には紀元前七世紀頃からアフリカからのフェニキア人が住み着き、その後は同じくアフリカのカルタゴ人が住んでいました。紀元前三世紀のポエニ戦争で散々苦戦の末にローマ軍がハンニバル率いるカルタゴを破った頃から、ローマのイベリア半島進出が始まっています。実質的にローマがスペインを平定したのは初代皇帝のアウグストスの時代で、南フランスのプロバンス地方と同じく、ローマの属州になりました。ヒスパニアと言う名称はこの頃生まれたものとされています。この地方の人々もローマ人の仲間入りをして、ローマの要人に取り立てられています。皇帝ネロに仕え

たセネカもヒスパニアの出身ですし、五賢帝の一人、トラヤヌスもこの地方の出身とされています。ローマ中の砦を歩き回り、北は英国の北部にハドリアン・ウォールを造り、南は今のシリア辺りまで行って、トルコの南アンタルヤにハドリアヌスの門を残しているハドリアヌス帝もスペイン出身とのことです。

ですから、スペインにも立派なローマの遺跡が沢山残されています。当時の最大の都市は南西部のメリダと言う街だったそうで、ここに残っている遺跡が一番立派なのだと思いますが、今回は此処へ行く機会はありませんでした。マドリッドからのお手盛りオペションで行ったセゴビアに巨大な水道橋がありました。全長七二八メートル、高さが二九メートルもある立派なもので、街の真ん中に残されています。一八八四年まで実際に水道橋として使われていた、と言う記録が残っているとのこと。橋のアーチの下を道路が通って、橋の下を車が走っています。南フランスで見た同じ水道橋のポン・デュ・ガールも立派でしたが、あの橋は山の中の川を跨ぐ橋だったのに対して、こちらは街の真ん中にそびえ立っている橋で、同じ橋でも場所によって雰囲気は全く異なっ

るものです。コルドバでもローマ橋を渡りました。この橋は道幅も広くて今でも充分に使える橋です。二千年後にも使える橋を作るなんて、全くローマ人と言う人達はどんな文化を持っていたのでしょうか。

六・旅

十月十二日発、ルフトハンザ機でフランクフルト経由バルセロナ入りして一泊。翌日ガウディ一色のバルセロナを観光の後、マドリッドに移動しました。阪急交通の元々のツアーは全部バスでの移動だったのですが、バスでの移動を少しでも少なくすると、連泊を一回でも増やすためにバルセロナからマドリッドまで、一昨年開通したと言う新幹線 AVE を利用することにしました。三時間ほどの汽車の旅でしたが、これが大成功で、皆さんに喜んで貰えました。マドリッドでの一日目は自由時間にしてオプションを入れ、世界遺産の街セゴビアとお目当てのエル・エスコリアル。二日目はプラド美術館でヴェラスケスの名画「ラス・メニーナス」他を鑑賞の後、ソフィア王妃美術館でこれもお目当ての「ゲルニカ」を鑑賞しました。この日はヘミングウェイが、世界で一番美

味しいレストランだ、と言ったという「Botin」と言うレストランで仔豚の丸焼きなるものに挑戦しました。ヘミングウェイは有名な作家とは言うけれど、スペイン内戦の戦場やキリマンジャロの山の中にいた人。食に対する感覚がどうなのか、には疑問がありました。ご婦人が多いので、出発前に、挑戦するかしないかのアンケートを取って、多数決の結果決行することにしたのですが、威かされた割には大したことがなく、事故も苦情もありませんでした。四日目からバスでの長旅が始まり、年寄りのグループにはややタフで気の毒でした。古都トレドは街全体が世界遺産に登録されています。サント・トメ教会でグレコの「オルガス伯爵の埋葬」と言う絵を見せて貰いましたが、現地のガイドがこの絵はヴェラスケスの「ラス・メニーナス」、レンブラントの「夜警」と並んで世界の三大名画だ、と紹介していました。普通ならこの絵の代わりにダ・ヴィンチの「モナリサ」辺りが入るんだろうに、やはりスペインだからこんなことを言うのかな、と思いました。トレドを見下ろすパラドールは仲々良く、ここでグループ・メンバーの内、十月に誕生日を迎える二人の誕生会をしました。

ホテルに頼んでバースデー・ケーキを用意してもらい、賑やかにハッピー・バースデーを歌いました。五日目はドン・キホーテが活躍したラ・マンチャ地方を經由して古都コルドバへ。三〇万人を収容したと言うメスキータに驚かされた後、グラナダまでのバスが長かった。この辺りは八〇〇年に亘るイスラムの支配からキリスト教の世界を取り戻そうとする七〇〇年に亘るレコンキスタ運動（国土回復運動）の名残りを感じさせられる土地です。夕食後、フラメンコ・ショーを観賞。六日目はアルハンブラ宮殿を見物後、地中海に面したミハスと言う小さな町を經由してセビリアまで行つたのですが、ミハスでは七年前に、近くのトレモリノスと言う街に移住した友人夫妻に来て貰つて再会を果たしました。この友人は中学時代にペンパルとして知り合つた同年輩の人で、その後三〇年以上文通のみの付き合いでしたが、三〇年ほど前に会つて間もなく、海外駐在の経験は愚か外国旅行の経験もないのに、定年後は外国に移住する、なんて夢みたいなことを言い出したので、年を取つてからの外国生活は大変だから止める、と大分止めたのですが、出て来てしまつた人です。昼食を含めて三時間ほど旧交を温めることが出来まし

た。ご主人よりも奥さんの方が遅しくスペインの生活を楽しくしている様子でした。それでも旦那の方は、自分はスペインで死ぬんだ、なんて相変らず夢みたいなお話を言っているのに対して、奥さんは、やはり日本に帰りたい、と言っているのが何だか可哀想でした。

この日はセビリア泊まり。七日はセビリアの町を少し歩いて、またバスで国境を越えてポルトガル入りし、エボラ経由でその日の内にリスボンに入りました。その夜はフアドのショーを見物。最終日の八日はジェロニモス修道院やベレムの塔、発見のモニメントを観て、午後は口力岬、シントラ王宮。この日は最終日なので、夜は打ち上げ会にしました。この旅行会が八回目になることはご紹介しましたが、八回全部に参加した人が二人いたので、皆勤賞を出すことにして盛り上がりました。我ながら仲々良いアイデアでした。

九日は早朝リスボン発、同じくルフトハンザ航空機でフランクフルト・ミュンヘン経由十月二十一日朝、成田に着きました。途中迷子探しに走り回ったのが二回、少し体

調が悪くなった人が三人ほどいましたが、大したこともなく治まって、全員元気で完走し、世話役の務めを終えました。

旅行を作っている間は、良い旅行にして皆さんに喜んでもらおう、と懸命でしたが、出発直前になったら、皆が無事で帰って来られるだろうか、とそれだけが心配になっていましたので、全員の無事完走が何より嬉しいことでした。何よりも自分が途中で引っくり返らなくて良かった。評判が良かったものですから、リピートの注文が続出中で困っています。二年後くらいに何か考えねばならないかも知れません。

(平成二十二年十二月八日)

対イラク戦争関連・茂木 賢三郎君へのコメント

イラクへの自衛隊派遣については私も賛成論者の一人です。先日、長崎の街中で派遣反対の署名を求められたので、署名のテーブルに並んでいる連中を前に「俺は賛成だ」と言つてやりました。アメリカがフセインに対する攻撃を始めるに際して、もっと世界の世論を味方につけるべきだった、という議論もありますが、私に言わせれば、フランス以下が理不尽に反対した、と言つことになります。こういう流れが出来た以上、日本としてはこれ以外の選択肢があつたのだろうか。今、野党を始めとする反対論者がギャーギャー言っているのは、理屈の上の口だけで言えること。「DO」を求められている為政者としてはこれ以外の選択はないと思うのです。復興支援には協力せねばならない。そして出て行くとするれば、危険なところで働く訓練を受けている自衛隊しかないでしょ

う。大江健三郎辺りがまた能天気にも、武器を持たない医者とか消防署員とか工事関係者が行けば良い、なんて言っている。この人達の安全をどう確保しようと言っているのだろうか。乱暴な言い方ですが、自衛隊はこうした時のために存在し、訓練を受けているのではない。安全が確認されないところには出してはいけない、なんてオカシナ話です。派遣法にこんな条件をつけたこと自体オカシイと思います。自爆テロなんて防ぎようがありません。人身事故は起こって当然だと思います。安全の確保には万全を期するのは当然ですが、何が起ころうとも仕方のないこと、と考えるべきだし、事前にハッキリ覚悟すべきだと思います。「安全の確保には万全を期すが、万一のことが起こる怖れはなしとしなさい」とハッキリ言えないものだろうか。派遣することにより国内でのテロも起ころないとは言えませんが、それとて、行かなかつたら起ころない、と言う保証もないと思うのです。でも、今の状態で何か起ころたら大変でしょうね。鬼の首を取ったような議論が噴出して、この問題が政争の具になることが目に見えています。情けないことだと思います。世論調査の結果、反対が多い、なんて盛んに言っていますが、自衛隊が出て行く

のは復興支援が目的なのだ。武器を携行するのは行く人自身を守るためなのだ、と云うことが、どの程度本当に理解された上での調査なのだろうか。こんな時には政治家たるものは与党も野党も一緒になって国民の理解を求め、身の危険を冒して行ってくれる自衛隊の皆さんを国の総意で送り出すべきではないだろうか。小泉首相は「人知らずして、いきどおらず、又君子ならずや」なんて論語の言葉を持ち出したりしています。為政者としてこつした覚悟が必要な時もありますが、この問題に対しては、そんなこと言つて収まり返っていないで、最後まで理解を求める努力をすべきだと思います。国民の皆が本当に理解してくれたら、兄が言つように「こんな携行武器では不足だ。こんなお粗末な武器で、行つてくれる人の安全が確保できるのか」と言つことになるでしょう。それこそ全閣僚が全国を廻つて、出来るだけ沢山の市民集会でもフォーラムでもやるべきだと思います。そうした姿勢が国民の理解に繋がるのではないか、と思います。どうでしょう。

(平成十六年一月五日)

靖国神社参拝問題

再び、靖国神社参拝問題

小泉首相が最後の最後で公約通り八月十五日に靖国神社に参拝しました。この問題については、首相就任後第一回の参拝の直後、平成十三年の九月に私の見解を述べていますが、この機会にもう一度考えてみたいと思います。

私が初めて中国を訪れた一九八〇年頃は、七六年に亡くなった毛沢東前主席の威光が未だ衰えを見せておらず、強烈なカリスマの存在でした。国中、毛沢東の肖像画だらけだし、そこら中が赤い表紙の毛語録でした。中国四千年の歴史の中で、初めて一三億の国民に食を与え、曲がりなりにも飢えから救ってくれたのが毛主席だ、と言うのが謳い文句でした。故宮博物館に行くと昔からの王侯貴族所有の宝物が飾られています。その一つ一つに「この宝物一つで当時の何万人の人が何年間飯が食えた。これは圧政の記録である」といった説明書きが沿えてあり、こうした搾取階級を一掃してくれたのが毛沢東だった、ということが強調され、偉大な毛主席として祭り上げられていました。私

にとつては初めての中国でしたから、その印象が強かったのですが、前々から中国を見ている人に言わせると、これが少しずつ変わりつつあるとのことでした。確かに毛沢東の晩年は褒められたものではありません。大躍進で農業政策に失敗したこと、文化大革命で紅衛兵を走らせ国中に大混乱を巻き起こしたこと、所謂四人組の跋扈を許したことなど、批判されるネタは幾つもあったと思うのですが、それでもこれだけの大勢の人を一つに纏めて行くにはこうした強烈なカリスマが必要なのだな、と思わされたのでした。ところが一三年後の一九九三年に行つたときは様子が全く異なっていました。毛沢東一辺倒が薄れている印象を受けたのです。私有財産制の浸透、株式ブームなど、八〇年代に始まつた改革・開放政策の成功が伺えました。一時は毛沢東に代わつて、開放政策を指導した鄧小平をカリスマに祭り上げるような動きもあつたように思いますが、カリスマとしては力不足だったのではないでしょう。やはりカリスマには持つて生れたオーラとか「華」みたいなものが必要なんだと思います。ところがこの毛沢東カリスマも、年を経て搾取階級の苛斂誅求の実態を知っている人の数が減つてくると、カリスマ効果

が薄れてきます。この頃から江沢民辺りが出て来て、国を纏める手段として、内部にカリスマを作るのではなくて、外部に強烈な敵を作って内部を纏める外部否定の手法が考え出され、その格好の対象が日本になったのではないだろうか。（この「外部否定」と言う言葉は、恩師赤松要先生の「綜合弁証法」の中に出て来る言葉です）現に九八年に江沢民が、対日政策の基本として「歴史問題は『永遠に』話さなければならない」と言っていた、と言う記録があります（江沢民文選）。

七二年の日中共同声明の時の毛沢東と田中角栄の会談では「仲良くしましょう」が基本だった筈ですから、その頃は反日教育なんてなかったのではないかと思います。現に、私の一回目の訪中の時は「熱烈歓迎」が盛んで、商売も大切だけど、商売を通じて外国の友達を作れ、と言う国の指導が徹底していたようでした。入国・出国時の送迎、歓迎の宴会、観光地の案内など、こちらが辟易するほどの心遣いを示していました。それも通り一遍の儀礼的なものではなくて、こちらのランクに合わせた然るべき人がフル・アテンドをしてくれるのです。これは毛沢東の教えだったと思われれます。只でさえ、隣同

士の国と言うのは、領土の問題、民族や宗教の問題などで仲が悪くなる要素を抱えていると思います。こうした要素を乗り越えて、将来に亘って二つの隣国が仲良くしようと思つたら、自分の子孫に憎しみを植え付けるような教育をする筈がありません。出来るだけ過去を忘れ、悪いことは許す方向に持つて行くのではないかと思います。ところが、国を纏める手段として「反日」をおうとしたら、歴史を忘れるな、憎しみを忘れるな、と言う教育を続けなければなりません。確かに、日本の軍隊が中国で酷いことをしたのは事実らしい。昔から戦争と言うものは、勝つた方が負けた方に対して酷いことをするのが、言わば古今東西の常識ですが、実際に中国の現地で戦つた兵隊さんたち自身の印象でも、日本の軍隊にはかなり度を越した行為があつたようです。その年代の人達に中国に対する贖罪意識が強いことは重工に入社してから間もなく、仕事を通じて感じていましたが、それは、重工のトップにいたその年代の人達に、自分たちは中国に対して悪いことをした、と言う罪の意識があつたからに違いありません。何か歪んだ形の贖罪意識でした。罪の意識は忘れてはならないことですが、戦争である以上、ある程度の酷

いことはどちらのサイドもして来た筈だし、国と国との間では戦犯の処罰・処刑で一応の型がついている筈。将来に亘って隣同士仲良くしようとの意識があれば、出来るだけ過去は忘れて未来を考えよう、とするのが国のリーダーの考えることではないだろうか。歴史を忘れるな、反日の気持ちを持ち続けよう、と言う教育がなされるには強烈な意図がなければ出来ることではないかと思うのです。元上海領事の杉本信行と言う人の書いた「大地の咆哮」と言つ本を読んでみましたが、中国共産党が広大な中国を纏めて行く手段として、祖国統一（台湾問題）と日本の支配を打ち破った共産党の礼賛、反日教育が必要なんだ、と言っていました。これに加えて、中国政府内で蔓延している汚職や政府と共産党の数々の失政から国民の目を逸らす手段としても反日が使われている、と言われます。中国の学校での反日教育の歴史と実態について勉強したことがないので、私の方は想像半分ですが、何か適当な資料があれば勉強してみたいと思っています。ですから、中国としては反日、日本憎しの教育が続けられれば何でも良いのではないだろうか。偶々、靖国神社参拝を問題にしてみたら、日本のマスコミや所謂進歩的文化

人と呼ばれる人たちが中心になって騒ぎ立ててくれるものですから道具に使っている、と言っただけのことではないだろうか。中国政府として散々反日教育をしておいて、「日本国首相の靖国参拝は国民感情が許さない」なんて言っています。正にマッチ・ポンプ。「良く言っよ」と言いたくなりますが、こつしたことを恥かしいとも思わないで公言できるのがあの人達の間感なのでしょう。ですからネタは、別に、靖国神社参拝でなくても良い。若し、靖国で効果がなければ別のネタを考えれば良いのですから・・・と言っことは、首相や日本政府の幹部が参拝を止めても別の反日カードが出て来るだけのこと、何の解決にもならないと思います。

大体、本件については日本のマスコミの罪は大きいと思います。最初の頃は、大臣が参拝する時に「これは私人としての参拝ですか？ 公人としての参拝ですか？」なんてバカな定番の質問をするのが通例でした。これを中国や韓国に持って行って、要人と称せられる人に「あの大臣はこんなことを言っているがどう思いますか？」と聞く。「それは良かったね」なんて返事が返って来る訳がありません。それを日本に持ち帰って、中

国ではあの人がこう言っていた「韓国の反応はこうだった」と大騒ぎする。日本国内で大騒ぎするから、あの人達も嵩にかかって騒ぎ立てる、と言うパターンが定着してしまった。誰かが参拝して、中国や韓国が公式に抗議しても、「例によって、両国は抗議しています」と言う程度の三行記事を掲載しておけば良い。これを五回も続けたら、先方も馬鹿馬鹿しくなって、騒ぐのを止めたかも知れません。

中国がA級戦犯の合祀を問題にするのは、毛沢東・田中角栄の日中共同宣言に遡ると言われます。中国は日本に対し賠償金を求めない、と言う取り決めがなされたわけですが、これを中国国民に説明するときに「日本でも戦争をした悪い人は戦争指導者たちだったんだ。一般の日本人は悪くないんだ。だから賠償は請求しない」と言うロジックを使ったとされています。だから戦争犯罪人を祀ってある靖国神社に参拝するのは約束が違つ、怪しからん、と言うことなのでしょうが、これとてマッチ・ポンプではないか。A級戦犯が合祀されたのは七八年のこと。日本国内では当時大分問題にされたようですが、中国や韓国からは何の反応もなく、当時の大平首相や鈴木首相が年に二度ずつ参拝

し、その後訪中しても、話題にもならなかったと言います。両国が突然これを大きく取り上げ始めたのが中曽根参拜の八五年のことですから、何か意図したものがあつたに違ひありません。中国の国民の多くがこの辺の理屈をどこまで理解しているのか、についても大いに疑問があります。またこれを全国民に教育しようと思つたら大変な努力が必要はす。中国政府としては国民の意識を煽り立てておいて、国民感情の名を借りて言い募っているんだと思いますが、そつ言つトラブルの火種はない方が良くも事実です。

A 級戦犯の戦争責任が云々されていますが、私としては、あの戦争は、軍部の独走に引き摺られたり、マスコミに煽られたとは言え、結果的には当時の国民の総意で始めた戦争だと思っています。ドイツのように、あれはナチがやった戦争だ、一般のドイツ国民には責任がない、と逃げるべきではないと思います。だから指導者だけに責任を押し付けるのは間違いではないかと思う。戦争指導者に対しては、どう考えても勝ち目のない戦争に日本を引っ張り込んだり、戦果を嘘で固めたり、終戦の時期を失して大空襲や原爆で日本人を酷い目に遭わせた、と言つ意味で日本国民が自分たちの手で責任を追求

すべきだったとは思いますが、外国人の手でA級戦犯として断罪される筋合いのものではないし、事後法の「平和に対する罪」とやらが適用された東京裁判は間違いだったと思います。ですから、東京裁判が間違いだった、と考える私としては、合祀が何が悪いんだ、言うことになるのですが、この意見は中々一般的に認知されない。とすれば、国内にも自分たちを酷い目に遭わせた指導者と一緒に祀られるのはイヤだ、と言う遺族が出てくるのは当然だし、国際的にも全世界が認めた戦争犯罪者を祀るのはオカシイ、と言う見方が出て来るのは当然かもしれません。・私の意見は横に置いておくとして・合祀に当たっては、もっと慎重な考えが必要だったのではないかと思います。この辺について、十五日当日のNHKの「日本のこれから」で少し触れていましたし、作家の上阪冬子氏が相当強烈な意見を持っているのですが、整理してみると。まず、その人を靖国神社にお祀りするかしないか、つまり神様の仲間に入れるか入れないか、の最初の判断は厚生労働省がするのだそうです。厚生労働省が祭神名簿と言うものを作って靖国神社に提出する。神社は崇敬者総代会の合意を受けて合祀の決定をする、つまり神様の

仲間に入れる、と言う手順なのだそうです。A級戦犯の場合は、この祭神名簿が当時の厚生省から靖国神社に提出されたのが一九六六年だったと言います。当時の宮司が筑波さんと言う方で、これを宮司預かりと言う形で、七八年まで合祀をしなかったことです。国民感情や国際感情を考えると軽々には合祀すべきではない、と言うお考えだったようで、昨今の混乱を見越した、先に見える立派な方がいたんだな、と思います。この筑波宮司が在職中に急逝され、後を継いだのが松平宮司と言う人で、この人は先日来問題になっている富田元宮内庁長官のメモで、昭和天皇が名指しで「親の心子知らず」と言われている人です。松平宮司は、東京裁判は間違이었다、と言う信念を持っていた人で、就任後三ヶ月ほどで宮司預かりになっていた合祀に踏み切ってしまった、と言います。信念は信念として尊いと思いますが、この時も少し慎重に考えて政治や司法の場で再検討する必要があったのではないか、と思います。特に宮司預かりとなっていた間に、日中共同宣言があつて状況が大きく変化していた訳ですから、もっと慎重であつて良かったのではないだろうか。何か別の方法が考えられていたかも知れませんが。

からと言って、今になって、政府が神社に対して分祀を求めるのは憲法違反だ、と言う理屈で下駄を神社側に預けるのは政治家の逃げに見えて仕方ありません。谷垣禎一氏の「ボールは神社の側にある」なんて言い方は無責任な逃げ口上だと思えます。

でも、兎に角、外国からの内政干渉に負けて参拝を取りやめる、なんて独立国にあるまじきことはして欲しくない。中国や韓国は常套の言い方で「靖国参拝は一部の軍国主義者の煽動で行われている」と言うことで、「一部の悪い人」と一般大衆を分断しようとする言い方をしますが、これを逆手にとつて、日本人全員の総意が靖国参拝を認めている、と言うようなバックグラウンドを作って行くのが王道ではないか、と思います。

「まず日本の中で徹底的に事実確認をする」と言うことです。NHKのアンケートで小泉参拝に対する賛成者が多かったのは良い傾向だし、若い人ほど賛成者が多かった点に力強いものを感じました。

今回少しくローズアップされましたが、思い出してみると、小泉首相就任後最初の参拝に当たって、公約どおり八月十五日に参拝する、との首相の意向を曲げて十三日に前

倒した際に、加藤紘一の力が大きかったと記憶します。「八月十五日当日ではあまりに刺激が強すぎるので変えてくれ。中国筋には根回しがしてあって、十五日を外せば丸く収められる。」と言う説得だったと思います。当時、加藤氏はYKKと言われる小泉首相の盟友の一人でしたし、外務省のチャイナスクールの卒業生として、中国にはそれなりのルートがあったのでしょうから、首相もその説得を聞き入れたのではないかと思えます。でも、これが混乱の元だった。反日ありき、が中国の政策の根本だったのですから、日取りを変えても収まる訳がない。最初からビシッと公約を実施すれば、相当揉めたでしょうが異なつた方向で片が付いていたかも知れません。この辺は加藤氏の何時もの優柔不断が出てきています。加藤氏は池田首相の流れを継ぐ宏池会の継承者。宏池会は池田勇人に始まり、大平正芳、鈴木善幸、宮沢喜一と続いて加藤紘一になります。宮沢喜一は教科書問題で中国と韓国の内政干渉を許し、慰安婦問題でこれを更に大きくした大戦犯。宏池会には良く勉強する、しっかりした見識を持つ政治家が多かったのですが、宮沢喜一は私の最も評価しない政治家の一人です。大平先輩だったらどうしたただ

ろう、なんて考えるのは歴史にIFを持ち込むことになるのでしょうね。

靖国問題に理解を求めたり、歴史認識を共通のものにする努力をするなど、隣人との関係改善には今後とも努力を惜しんではならないとは思いますが、国策として愛国「反日がある国に対してはこの努力にも限界があると思うのです。例えば、中国が靖国問題に対して理解を示すことは決してないと思うし、仮に理解を示したとしても、何か他のカードを出して来ると思います。だとすれば、こちらとしてもお付き合いの仕方を考えなければならぬ。

このところ、急激に中国への貿易依存度が高くなっていますが、私は中国への貿易依存度は上げてはならない、と思っています。日本の企業進出が中国人の雇用に貢献しているから、変なことにはならない、と言う議論もあるでしょうが、それは当てにならない。靖国参拝のトゲは中国との商売の邪魔になるから参拝を止めてくれ、何て言う経済界の声は本末転倒だと思っています。あの国は自国の政治的な主張が通らない時に、自分が困らない範囲で相手が一番困るところに経済的な規制を掛ける、位のが出来る

国。どんな卑劣なことをやってもそれが国益なら恥と思わない国だと思います。自分の政治的要求が受け入れられない時、この農業製品は売らないよ、とか、この工業製品は買わないよ、と突然規制を掛けて、日本の国内に混乱を起こし、その圧力で自分の主張を通そうとする手法を取って来るのではないかと思うのです。相互の貿易依存度が増しているのを黙認しているのは、こうしたカードを強化しようとしているのかも知れませんが。貿易依存度が高くなって、日本の企業が中国とガンジガラメになればなるほど、このカードは強くなるでしょう。最近、外資企業による中国企業のM & Aに対して新たな規定が制定された、と言う報道がありました。重点産業などの買収案件は政府が審査する、とのこと。ところが何が重点産業なのかの定義は示されていない、と言います。政府の裁量の幅が広いと言う事です。似たような規制がこれまでもあつたのかも知れないし、これからも出て来るのではないかと思えます。政府裁量の幅が広いということとは、こうした政治的な規制が、どの分野に対しても何時でも楽に出来る、と言うこと。全く危険だと思います。これに対し、日本の政府が日本の企業に対して警告を発するのは、

外交上の摩擦を引き起こすことになるので、中々難しいと思います。自主規制しかない、ということになります。経済至上主義の観点から考えるとこれも難しい。国同士の政治的交渉が上手く進まなくて、その国からある種の経済的規制が掛かった時、個々の企業が蒙った損害に対して国に責任を求める傾向がありますが、こんな風潮はなくさねばならない。それこそ自己責任です。「中国と商売するのは自由だけど、突然中国政府から規制が掛かるようなことになっても、政府としては責任は取れませんよ」と言つた「通達」でも出してブレーキを掛けたらどうか、なんて考えています。松下電器が海外の生産拠点を減らす方向を打ち出しています。海外拠点全般を見直すと言つ話になっていますが、若しこれが中国との繋がりを減らすとする試みのカモフラージュだとしたら、流石に賢い、と思います。

(平成十八年十月五日)

東京裁判問題

キッコーマン副社長の茂木 賢二郎君が東京裁判について

勉強し、その成果を度々珊瑚誌上に発表した。これに触発さ

れて、過激な意見をコメントした。

東京裁判関連・茂木 賢二郎君宛コメント

凄い勉強をされましたね。私が、東京裁判を認める必要はない、と主張している根拠は、これが「平和に対する罪」と称する事後法がベースになっていること、勝った方が正しいと言つ理屈で一方的に裁かれたものであること、裁判を指揮したマツカーサーですら帰国後「あの戦争は、侵略を目的とした戦争ではなく、日本の防衛のための戦争であつた」と言つて裁判が間違つていたことを認めていること、など雑駁な議論によるものでしたが、「日本が平和条約で認めたのは、裁判そのものではなくて、裁判の裁定だけだつた」と言つ貴論は迫力があります。後藤田正晴と言つ人は警察官僚で、田中角栄に見出されて政治の世界に入ってきた人で、カミソリと言われたほど鋭い人だつた、と知られており、同氏の著作「政と官」とか「情と理」なんかを読むと、まともなスッキリした政治家だな、と思つのですが、この問題になると腰が引けて、不満がありました。

その原因が「Japan accepts the Military Tribunal」で「Japan accepts the judgment」の混同にあったとすれば、頷ける気がします。こんな混同は意図的になされたものだったのだろうか。戦犯について言えば、度々の国会決議にも拘わらず、最後に巢鴨を出たのが、昭和三十三年になってからのB・C級戦犯の人たちだったということは、本当に戦地で犯罪行為を犯した人たちを、日本の国として咎める姿勢があったと言う事ではないのだろうか。Judgmentに忠実だった日本政府の姿勢が分かるような気がします。私は日本が東京裁判を認めたことが、戦後の日本人の心をここまで荒廃させてしまったのではないか、と書いています。日本人は世界に対して顔向けのならない悪いことをしてしまった、と言う意識が植え付けられた。これはアメリカを中心とする進駐軍の策謀と、この策謀の尻馬に乗ったマスコミや進歩的文化人と称する連中の愚かさもあったのでしようが、私は先日書いたように、日本人のある種の潔さ、がこういう結果を呼んでしまったのではないか、と書いています。ドイツの場合は大げさに言えばナチを悪者にして、あの戦争はナチがやったのだ、一般のドイツ人は関係がなかったんだ、という感

じに逃げたのに対して、日本人は心のどこかに、悪かったのは軍人や戦犯の人たちだけではなかったんだ、我々だって同罪だ、と言う意識があつたのではないだろうか。そういう意識が日本人の気概を失わせて行つた。言葉は忘れましたが、三島由紀夫が割腹自殺する時に「これからの日本には日本人の魂が残らず、経済だけに頭を使うフワフワした連中だけが残るのではないか」という意味のことを言っていたと記憶します。今日の本は正にそういう危機に直面しているのではないだろうか。小泉首相の心の内は分かりませんが、靖国問題なんかを見ていると、この流れに抵抗している姿勢が見えて、応援したくなるのです。最初の年に八月十五日の参拝を避けたのが間違いで、今でも残念に思っていますが、それでも何とかして日本人の気持ちを世界に向けて示そうとしている。例えば、憲法問題にしたって、一時期は「改正について議論しよう」と言っただけで首になった政務次官（西村慎悟と言う今民社党の議員だったと思いますが）がいたのに、今では堂々と改憲の議論がなされている。この辺も、中国や韓国から何だかんだと言われる筋合いのものではない、という小泉首相の姿勢の表れではないか、と思つのです。

北朝鮮問題

北朝鮮問題関連・茂木 賢三郎君へのコメント

北朝鮮と言う国は暴力団か駄々っ子と一緒に。現体制を潰すしか道はないと思っています。六ヶ国協議なんて相手の時間稼ぎに乗っているだけだと思います。長年、時間稼ぎのお手伝いをして来たアメリカのカーター、クリントンの民主党政権、日本では社会党や共産党の下らない主張に遠慮して及び腰だった自民政権の罪は大きいと思います。大体、拉致問題は存在しない、なんて言ってきた社会党や共産党の人達が現在の政治の場にいることすらオカシイと思います。常識や羞恥心のある人なら恥ずかしくって人前に出られないのではないだろうか。この問題を解決するには、あの国の国民が立ち上がって、自分たちの手である人と体制を倒すのが一番なんだけど、それが出来なければ、乱暴なようですが〇〇七とか藤枝梅安やゴルゴ13を連れて来るしかないのではない

(平成十七年九月二日)

か、とすら思っています。フセインの場合は宗教的な問題が残って内乱状態になっていきますが、あの国の場合はあの人さえ排除すれば、内外共にハッピーになれるのではないだろうか。こんなことは誰しも考えることであろうが、敵もこれに対する対策は十分に考えているでしょう。影武者だって大勢いるんでしょうね。でも、現実的には核を持ち、これを恐喝の手段としている隣国が存在する以上、少なくとも核に対する防衛の手段は是非とも検討しておくべきだと考えます。この種の議論も駄目だ、なんて土井のババアや夢見る夢子の福島のことです。

北朝鮮がミサイルの発射に続いて核実験をしました。世界中が大騒ぎで、日本も独自の経済制裁をする、なんて力み返っています。経済制裁と言うことは宣戦布告の一手手前か、宣戦布告そのものだ、と言うことは、大東亜戦争の開戦時に日本自身が経験していることです。日本として自分で自分を守る力もないのに、能天気な経済制裁だ、なんて言っていて良いのだろうか、と疑問に思います。北朝鮮から核爆弾が飛んで来て、日本のどこかの大都市に落ちて何百万の人が亡くなったら、アメリカや世界中の国々がこ

の間違いさんを懲らしめてくれるでしょうが、それでは手遅れと言うものです。むしろアメリカ辺りは、日本のどこかに核爆弾の一発くらい落としてくれた方がやり易い、なんて考えているかも知れません。こうなれば北朝鮮を潰す大きな大義名分が出来るでしょう。やはり国として一人前のことを言う前に、それだけの力を持っていないといけないと思うのです。核武装の可能性を議論すべきだ、と発言した大臣が問題になります。次の国会では大騒ぎになって、大臣の首が問題になることでしょう。憲法論議の時も同じ現象が起こりましたが、議論をしよう、と言うのが何がいけないのか、と思います。議論をすること自体を封じると言うのは民主主義の国としてやってはいけないことなのではないのだろうか。中西輝政や桜井よしこ等が共著で「日本核武装の論点」と言う本を出しています。日本が核武装を考えると、近隣の国々もさることながら、アメリカが一番の懸念を示す、と言う構図が示されていました。聞かせる議論でした。私は核武装論者ではありませんが、少なくとも核から国を守る手立ては作って置かねばならない、と考えています。そうすれば今回みたいな事態になっても、堂々と言いたい

ことが言えると思うのです。友人の海上自衛隊OBの将官に聞いたら、「現在日本に配備されている迎撃ミサイルでは、成層圏を飛んでくる弾道ミサイルを落とす技術はないけれども、地上を飛んでくる巡航ミサイルは略々一〇〇%落とせる」とのことです。この迎撃ミサイルを搭載したイージス艦を二・三隻、日本海域に遊弋させておけば一応の守りになる、とのことでしたが、今のところはこの配備すらなされていないとのこと。少なくともこれくらいのことにはやってから言うべきことを言っただけ言っただけ、後は他の国に守って貰うなんて、正に虎の威を借りた狐、です。独立した国として誠にミットモナイと思います。

第二回の実験が行われる可能性を探る動きの中で、日本政府は、情報は掴んでいるけれど公表は出来ない、と言う態度を示しました。これはこの情報が、再実験の可能性とともに、日本への核攻撃の可能性を含んでいたからではないか。国民にパニックを起こしてはならない、との配慮から公表出来なかったのではないか、と思いました。

(平成十八年十一月五日)

金融問題とアメリカン・スタンダード

金に対する素朴な疑問

大学で金本位制度、金為替本位制度など金を中心とした通貨制度を習ったときに、金の価値に付いて根本的に大きい疑問を持ったことを思い出す。何故金が価値の尺度でなければならぬのか、払拭したとは言いながらこれはやはり古来の拝金思想の流れではないのか、と言う素朴な疑問である。

金とは何か、ただの鉱物ではないか。貴金属である、と言う。貴金属とは何か、変質し難いものである。産出量が少ないものでもある。合成できないものであるとも聞く。しかし、それがいかに有用なものなのか、そして金が価値の尺度たりうる資格のあるものなのか。仮に価値の尺度の原器が必要なものだとしてもそれが金でなければならなかった特別の理由があるのだろうか。

物の価値と言うのは、その物にあるのであり、別に金の価値に換算する必要はないではないか、と言うことである。世界の富が増大するにつれ、つまり経済の規模が拡大す

るにつれて価値の原器の量も増さねばならない筈だが、金の産出量と経済規模の拡大との間にどんな関係があると言うのか。とにかく高い金（かね）を払って金（きん）を掘り出し、また偶々金を多量に産出する国が他に何の産物もなく産業がなくても富める国である、と言うのはオカシナ話だ。

最近の金戦争を見ていると、益々その感を深くする。只の鉱物を各国が目の色を変えて取り合いするなんて、いかにも馬鹿げたことだと思いが、そうではないだろうか。

物の秩序を作るために価値の尺度としての金が尊ばれるのかも知れない。しかし、尺度と言うのは人間が作れば良い性質のものである。長さの単位然り、重さの単位然りである。もっともメートル法はナポレオンが作ったものだが、これは不変のものを基準にする、と言つ考え方から地球の大きさを実測したと言つ。そして出来上がったものが所謂メートル原器であり、長さ・面積・体積ひいては重量の規準になっている。後になつて実測値が何メートル違つていたとか、何センチ狂つていた、とか言っているが、別にメートル原器を変える必要は毛頭なく、規準とか尺度とか言つものはこれで良いのであ

る。それにしても尺度にどうしても裏づけを作りたくて、地球の四分の一を実測したナポレオンと金至上主義を取ってアメリカを悩ましているドゴール大統領とが同じフランス人であること（正確に言えばナポレオンはフランス人ではありませんが）は面白いと思う。

金への執着は欧州人に強いという。金に対する考え方がどうも日本人辺りとは違うようだ。歴史がそこさせるのだから、合理性を抜きにしたいわゆる本能的なものらしい。

理由はどうであっても、何千年に亘って育てられてきた金尊重の考え方を一度で拭き去ることは難しいかも知れない。しかし、経済は生きているもの。生きている経済に鉱物たる金を結びつける努力に無理を感じるのである。金為替制度、その拡大解釈などによりある程度の結びつけは出来るかも知れない。でもこれは一時的なもの。また、いつかは矛盾を生じて今度と同じような事態になるであろう。難しいことではあるが、人間はもうソロソロ金尊重の呪縛から抜け出して良い頃だと思う。そして、国際信用をベースにしたもつと実状に合った流通の道具を見出すべきである。若し、価値の尺度が必要

だとしたら世界通貨でも作れば良いではないか。

今回の金危機はSDRの発動で治まることになると思う。SDR発動の意義につき色々な議論があるが、やはりこれは金の亡霊から逃げ出そうとする人間の知恵の第一歩だと考える。

(昭和四十三年三月三十一日)

技術立国「日本」の危機

最近、原子力発電所の数々の事故とか、新幹線のコンクリート剥落事故とか、東海村の臨界事故など、高度の技術に関わる大きな事故が続きました。何かオカシイのではないかと、と思っていました。H2ロケットの発射失敗に及び、これは日本にとって大変な事態になっているのではないかと、思うようになりました。

日本人は昔から、職人芸・技術を大切にして来た民族だと思います。「細工は隆々仕上げをご覧じろ」と言う言葉もあるように、江戸やそれ以前の昔から、職人は自分の仕事に誇りを持ち、プロとしての自覚が強かったと思います。へまな仕事をする職人は仲

間から、そんなことで良く金が取れるな、と軽蔑されたし、それだけ腕を磨くことに熱心でした。大工や建具師のような手工業的なものは勿論ですが、零戦や戦艦大和・武蔵だって、腕に誇りを持った職人さんたちの力に負うところが大きかったのだと思います。

戦後、「メイド・イン・ジャパン」が安かろう、悪かろう、の代名詞になっていた時期がありました。これは終戦直後の混乱の中で、粗末な材料を探し出し、貧弱な設備を使って、何とかモノを作って売っていかねばならなかった時代のこと。食糧にしても、エネルギーにしても、原材料にしても輸入しなければ何も無い国ですから、粗末な設備、粗末な材料の中からも、何とか工夫して何かを作って外に対して売って行かねば生きて行けなかったからです。ですから、少し力が付いて来ると、良い原材料を輸入し、これを優秀な技術で加工して輸出する「メイド・イン・ジャパン」は直ぐに高級品の代名詞に変わりました。鉄鋼業なんて昔から、原料である鉄鉱石や石炭の産地の近くで栄えるのが常識とされていましたが、どちらの原料も出ない日本が世界一の鉄鋼生産国になった理由は、臨海地帯に製鉄所を作ったことでした。両方の原料を世界中から選んで買

つて、それを安い運賃の船で大量に運んで来て、高度の技術で安くして質の良い鉄鋼材を作り出して世界中に売って行ったのです。電機製品や自動車なんかは、つい最近まで日本製は一段格が上、との評価があつて、欠陥製品が少ない、製品に当たり外れのバラつきが少ない、と信頼度は抜群でした。

モノを作る上で人間に求められる大切な要素として挙げられるのは、創造力とか、教育レベルとか、信頼度などがあります。手先の器用さ、何て要素もあるかも知れませんが、勿論、設計とか行程の作り方など、上手く作るための段取りを考える部分もあります。この辺は創造力とか教育レベルなど、頭脳の部分かも知れませんが、モノを作る上で最も大切なのは、実際に手を掛けて作って行く人達のマインドだと思います。良いモノを作ろうとする意識、一種のモラルです。この辺にも創造性や教育レベルが必要にはなるのでしようが、もつと要求されるのが、勤勉性と信頼度です。幾ら良い設計をし、立派な工程を考えても、これを使う人達のマインドがこれに付いて行かなければ良いモノは出来ません。毎日、職人さん一人一人の側に立って、細々とした作業の一つ一つを監

視・監督している訳には行かないのです。昔、大きな船の鉄板の溶接部分に溶接棒が埋め込まれているのが発見され、大問題になったことがありました。船の外板は、鉄板が溶接されて造られています。大きな船になるとこれが何万枚、何十万枚もの鉄板が繋ぎ合わされることになります。人間の手を省くと共に溶接を均一のものにするために、出来るだけ機械を使って溶接する工夫はなされているのですが、手でやる部分もあります。溶接という作業は、溶接棒を電気で溶かして、鉄板と鉄板の間に作ったV字型の溝を埋めて行って二枚の鉄板を繋ぐ作業ですから、大変な手間が掛かります。溝の中に容量のある異物　この場合は溶接棒だったのですが　を埋めておいてその上を溶接すれば、その分溶接棒を溶かす手間が省けます。溶接の表面はキレイに出来上がりますから、視覚検査では合格してしまって、レントゲン検査をしない限り判らないのです。ところが、鉄板同士はシッカリくっ付いていないのですから、事故の原因になる。こうした先端の作業は、作業者個々人を信頼する他ないのです。新幹線のコンクリート崩落事故についても、同じような先端の作業者の仕事に対する意識の不足が原因と思われるま

す。作業の間違いが起こらないように考え、手を打つのは管理者の仕事であり、設計者や工程を組む人達の仕事でしょう。工事が正しく行われているかどうか、をチェックするのは監督者の仕事です。でも、その監督者でも、先端的細々した作業を全部見ていることは出来ないのです。フル・プルーフなんて、どんな馬鹿なことをやっても、誤った作業にはならないように手を打っておかねばならない、なんて考え方もあります。でも、こんなものに守られて仕事をするのがプロの作業者なんだろうか。

日本の技術は、個々の職人さんたちの名人芸的な手腕に支えられて来た、と言う見方をする人もいます。システムの技術でモノを作り出す力は弱かった。確かにこの見方は当たっているかも知れませんが、個々の作業の国際的コンテストで日本人が金メダルを独占した、なんて話は聞きますが、宇宙ロケットの開発、なんて膨大な技術の集積で、キチンとしたシステムが出来ていないと出来ないような大きな事業はむしろ不得意なのではないか。

それでも先端的の作業者の意識や感覚が、日本の技術レベルを支えてきたのも事実です。

改善提案、なんて言うのは、現場の作業者が、少しでも良いモノを作るため、少しでも能率の良い作業をするために、日々考え、提案し合ってそれを組織の中に取り入れて行くと言うのですから、正に日本的な発想と言えるのではないのでしょうか。クオリティ・コントロール（ＱＣ）の思想は、アメリカから来たものだと言いますが、これをＴＱＣに高めて、成果を上げていったのは、日本の改善提案の思想だったと思います。上から監督するシステムをシツカリ作って良い製品を作って行く、と言うより、全員が力と工夫で良いものを作って行く、と言う意識です。これは作業者一人一人が同じ方向のマインドを持つていなければ出来ないこと。ですからこれは単一民族の日本人にして可能だったことだったのかも知れません。今でこそ、日本にも所謂エスタブリッシュメントが出来上がり、生まれつきの上下関係が出来ているのかも知れませんが、少なくとも我々が育った時代は、生まれつきのスタートラインは誰も彼も同一線だったと思うのです。例えば、三菱重工には、養成工制度と言うのがあって、優秀な中学出の人を採用して職工学校に入れ、優秀な職人を作っていました。私の中学時代、家庭の事情で

義務教育以上の教育を受けられず高校に進学出来ない人は、この養成学校を狙っていたが、学校で一番とか二番の優秀な人でないと入れなかった。ですから、三菱重工の養成工になるのは、一つの誇りでした。実際に三菱重工に入ってみると、この人達は誠に優秀な人達で、三菱の技術を支えている人達でした。先端の作業者に止まらず、管理者になって行く人が大半でした。工場から労働組合の役員になって出て来る人達は、殆どがこれらの人達でしたが、付き合ってみると本当に優秀で、組合に関係していた当時、私は、三菱で一番優秀なのが、この中学出の養成工出身の人達で、次が真面目に勉強してそのまま入社した高校卒の人達、一番駄目なのが、高校を出るまでは優秀だったのかも知れないけれど、その後の四年間をブラブラ過して来た大学出だ、と本気で思っていましたもの。

アメリカやヨーロッパの場合、上に立つ人と下で働く人の区別が比較的ハッキリしていると思います。外国人労働者が多いと言う所為もあるのではないのでしょうか。これらの労働者が管理者になって行く可能性は誠に少ない。とすると、個々の作業者は、良い

モノを作ると言うより、一日如何に楽な仕事をするか、と言う方向に考えるのは当たり前のことではないか。これらの人の意識に頼って、組織全体を良くして行こう、と言う考えは成り立たない訳で、どうしても上からの管理と厳しい監督で組織を運営しようとするのは当然のことだったのではないだろうか。

中国人の場合はこれに加えて、自分さえ良ければ、の意識が特に強いような気がしません。自分さえ良ければ、の感覚は誰しも持ちがちな気持ちですが、中国人の場合、これが特に強いように思うのです。他人が迷惑しても、自分の得になれば良い。毒性の強い農薬を使っても、農産物が沢山出来ればそれで良い。見端を良くして売り易くするため、毒物や有害な材料を使うなんて、悪い意味での商人の意識があるのは最近の例が示している通りです。先に述べた、良いものを作ろう、と言うマインドに欠けているのではないか、と思います。先端の作業者にこんな感覚の人たちがいたら、良い製品が出来る訳がありません。見掛けが綺麗に出来上がっていても、全く信用が出来ないのです。中国人は商人としては優秀なのかも知れないけど、物を作る人にはなり得ないのではな

いか。日本の企業が安い労働力を求めて中国に工場を進出させていますが、安さだけを求めて中国で物を作るのは間違った方向ではないかと思っています。

私が最近の事故を見て、大変なことだ、由々しき事態だ、と思うのは、日本の作業者、言わば職人さんたちに、仕事に対する意欲とか、技術に対する誇りとかがなくなってしまうのではないか、と思うからです。能率を重んずるあまり、管理で押さえつけようとする欧米型の方式が取られつつあります。その過渡期の弊害が出て来ているのかも知れません。職人芸が邪魔にされるような風潮が出て来ているのに、シッカリした管理の方式が定着していない。その狭間の時期なのかも知れません。

が、もう一つ忘れてならないのが、所謂「リストラ」と言う奴。金が掛かっても良いものを作る、と言う姿勢がなくなり、如何に安く作るか、の方に重きが置かれ過ぎて来ているのではないだろうか。私が勤めていた頃の三菱重工に対するお客の評価は、技術的には全く問題がなく信頼が置けるけれど、唯一の難点は値段が高いと言うことでした。ですから我々営業の勤めは、質の高さを如何にアピールするか、それをお客さまにどう

説明し、理解して貰って買って頂くか、と言うことでした。勿論、もつと安く出来ないのか、と工場との鬩ぎあいはずい分やりましたが、工場の側からは「三菱である以上、品質をこれ以下に落とすことは出来ない」と言う技術屋としての誇りみたいなものの強い抵抗を受けるのが常でした。当時は、営業の立場で、値段を安くしないと売るのが大変で苦勞が大きいものですから、「何故そんなに五月蠅いことを言うのか」「少しぐらい質は落としたって、安くすれば良いではないか」「過剰スペックではないのか」なんて苦情を言うことが多かったのですが、鬩ぎ合いの中から、安くて良いものが工夫出来ることもあって、これはこれで意味のあることだったのです。十年ほど前から三菱もリストラを強烈に進めて来ています。リストラで真っ先に被害を受けるのは下請けさん達で、仕事は少なくなる、値段は叩かれる、で地元の評判はガツクリ落ちます。それが進んで来ると、工場内での効率化、人減らし、特に管理部門の人減らし、と言うことになりま

す。最近、三菱重工が昭和三十九年の合併後初めて赤字を出す、と言うことで話題になっています。私は「株」と言うと、何だか、汗をかかないで儲けようとする、と言う印

象が強くてどうしても好きになれず、他の会社の株は持っていませんが、勤めている間は、社員持株会に入つて、自社の株だけは毎月の時価で少しずつ買い貯めていました。退社の時は可なりものになっていたのです。一時は千五百円位まで行つたので、ひと財産になると思つていたのですが、最近は四百円を割つて三百円に近付いている。四分の一以下です。貧乏人には金は回つて来ない、と云うことなのでしょう。嗚呼。

・ ・ ・ 閑話休題

聞いてみると、三菱重工でも技術力の弱体化が表に出て来ているように思います。設計の力が弱くなつて、約束通りのモノが出来ないで、クレームの対象になる。工程が混乱して納期が守れない。やり直し工事で無駄なコストが掛かつて赤字になる。船や発電機を造っている長崎の工場で、昔はこんなことは絶対にあり得なかつたことです。これは私の想像ですが、H2ロケットの失敗も、名古屋の工場が絡んだ部分が大きかつた筈ですから、何かこんな欠陥が表に出たのではないだろうか、と思つています。原発の事故についても、神戸の工場が全く関係ない、と言い切れるのだろうか。リストラのやり

過ぎで、技術の力が落ちているのではないか。良いものを作ろうとする意欲が衰えて来ているのではないだろうか。

日本は輸出のし過ぎだ、貿易黒字の貯め過ぎだ、何て言われるけど、日本は資源のない国ですから、輸入に頼らないと生きて行けない。ですから、シツカリした技術力に支えられた信頼度の高い製品を作って輸出して、外貨を稼いで行かないと生きていけないのです。その技術力に疑問が持たれるような風潮が現れている、と言うことは日本にとって大変なこと、由々しきことだと思っています。

(平成十二年一月一日)

二十一世紀の経済社会と地球環境問題

平成十一年の十月に、日本開発銀行と北海道東北開発公庫とが統合し、日本政策投資銀行が設立されました。ハウステンボスは日本開発銀行から百億円の単位で融資を受けています。ご披露の記念講演会と懇親会を開くというので出席しました。懇親会の方は、小粥総裁も出席された大層な会でしたが、こちらは山の枯れ木の一本ですから、私の目

的は講演会の方。この日は、日本学士院会員で東大名誉教授の宇沢弘文氏の表題の講演でした。同氏の主張する「社会的共通資本」の考え方が、日頃、私が考えていることに合致する部分があったし、頷けるものが多かったので、ご紹介することにします。その後、少しこの人の本も読んだので（岩波新書二―三冊の程度ですが）これで若干補足した部分もあります。

宇沢教授という人は、東大卒業後アメリカに渡り、スタンフォード、カリフォルニア、シカゴと三つの大学を渡り歩いて若くして教授になり、昭和四十四年に東大の経済学部教授として日本に戻った経歴を持つ人です。昭和三年生まれと言いますから、もう七〇歳を越していますが、まだまだ現役バリバリの経済学者、と言う感じで白髯を振り回しての熱弁でした。

話は、世紀末、と言う言葉から入ります。世紀末、と言う言葉を初めて使ったのはダントネなんだそうですね。世紀末には必ず何か混乱が起こり、暗い事件が多いと言います。各世紀末に、ローマ法王が出す「レールム・ノバルム」と言う公式の文書があるのだそ

うです。これは百年に一度、その世紀と次の世紀の大切な事柄について、法王庁がローマ教会の正式な考え方を全世界の司教に通達するためのものです。有名なのが一八九一年のもので、当時は資本主義が進む中で資本家の搾取の結果、貧富の差が大きくなり、弱者、特に貧しい子供達が悲惨な目に遭っている状況の中で、社会主義が台頭しつつある時期でしたが、この年のレールム・ノバルムの副題は「資本主義の弊害と社会主義の幻影」と言つものでした。「資本主義が悪者視されているけれど、社会主義に移行してしまつて本当に良いのですか」と言う疑問が投げかけられていたそうです。その後、二十世紀に入つてロシア革命が起こり、世界の人口の三分の一が社会主義の国になつたけれども、結局、社会主義は崩壊してしまつた。法王庁の予言・見方が当たつたと言えます。百年後の一九九一年のレールム・ノバルムを作るに当たつて、ヨハネ・パウロ二世から宇沢教授のところへ、作成に協力してくれ、と言つ手紙が来たとのことでした。教授は早速、副題を前回と逆にして「社会主義の弊害と資本主義の幻影」とするようにつ提言したそうです。社会主義が崩壊して資本主義の天下になり、自由競争が持てはやされ

る時代になりつつあるが、本当にこれで良いのだろうか、と言う警鐘の意味を込めての提言だった、と言われます。レーラム・ノバルムなんて大事な文書の作成に外国人が参画するのは初めてのこと、とのことで、教授はこれが些かご自慢らしく、どの本にもこのことが触れられています。

東大卒の人に聞くと、宇沢教授はマル経の学者、と言いますが、元々は近経の学者だそうです。新古典派に対しては相当批判的な意見は持っていられるけれど、マル経の信奉者と決め付けるべきではないのではないか、と言うのが私の印象でした。リベラリストの範疇に入るべき人ではないか、と思います。本当に理想的な社会と言うのは、資本主義と社会主義の中間にある、と言う考え方。経済学にも進化論がある。既成の理論に縛られるのではなくて、時代に応じて理論も進化して行くものだ、との見方から、資本主義と社会主義の両方を強烈に批判して来た人のようです。新古典派の総帥、フリードマン辺りとは色々な機会に、実際に激しくやり合った場面が多かったらしく、話の中にフリードマン批判も出て来ます。新古典派はレッセ・フェール（自由競争）を金科玉条

とし、何でもレッセ・フェールに解決を求めようとするけれど、レッセ・フェールの弊害は大きい。新古典派の原典「国富論」の中でも、アダム・スミスは、政府は何をすべきか、と言う一章（ブック　だそうです）を起こしてはいるではないか、と言った調子です。近代経済学者に共通したものの考え方に「日本の国民が公害を選択した」と言う種類の言い方がある。高度成長は国民が選択したものであって、それに伴って種々の公害が発生しているが、これは国民が好んで選択した結果であるから、経済学者としてとかく言うべき性質のものではない、と言う議論になるのだが、こうした考え方が新古典派経済学の本源的欠陥を示すものだ、と言う批判になります。資本主義も社会主義もどちらも理想の社会ではない、と言うことを示すために、レールム・ノバルムをマクラに振っているのではないか、と思われまます。

社会的共通資本、と言うのは、人間が人間らしく生きるため、人間の尊厳を守るための共有財産であって、住み易く、温かくて水準の高い社会を作って行くために大切なものと定義付けられています。元々、英語の Social Overhead Capital の訳なのだそう

ですが、宇沢教授の命名と言われます。社会的共通資本は三つに分類される。第一は、大気や森林、河川と言った自然環境で、自然資本と呼ばれるもの。第二は、道路とか鉄道、電力と言った社会的インフラに属するもので社会資本と呼ばれます。第三が、教育制度、金融制度、社会制度など制度資本と呼ばれるものです。これらの社会的共通資本は市場的な基準で律されるべきものではない。社会的基準に従って管理・維持されなければならぬ、と言つのが同教授の主張です。だからと言って、国が管理するべきものでもない。「コモンス」と呼ばれる、市場原理と国の管理の中間にある職業的専門家の手で管理されるのが良いのではないか、と言つ提言でした。自然資本については自由競争の思想の赴くままに、自由勝手に使用されるべきではない、キチンとした管理の下に使用されるべきものだ、と言つことは、昨今では常識的な考え方になっていますが、社会資本や制度資本をこの範疇に入れたところに新しいものを感じました。鉄道や通信を民営化しろ、と言つ。民営の中で採算を重視して経営しろ、と言つのは自由競争の原理ですが、これを進めて行くと、過疎地には交通の手段が無くなって来るし、離島に電話

線を敷いたり、郵便物を届ける人がいなくなつて来るでしょう。採算重視の学校なんて変なものになるだろうし、経済の血液として重要な役割を担う金融資本が自由競争の原理で勝手な動きをして、社会を混乱させているのが昨今の世界的金融資本の横暴の姿ではないだろうか。

日本では昔から、このコモンスズ思想が進んでいた、と言われます。その土地の共通の財産である山林を守るための「入会制度」や、共通の漁場を守るための「漁協」の活動なんてのは良い例として上げられています。これらは国の力で出来たものではなく、地方で自発的に出来たもの。山や海を地域の皆で長く大事に使つて行くために考え出された知恵の結晶みたいなものです。こうした思想が、総ての社会的共通資本の管理に拡大されて行くべきではないか。「ため池灌漑」のあり方が例として上げられていました。日本の灌漑技術と言つのは、弘法大師（空海）が学僧として唐に行った時に、スリランカの灌漑制度を勉強して来たことに始まると言います。スリランカと言ふ国は、山が多い上に、雨はモンスーンの時期にしか降らず、後は乾季なのだそう、昔からため池灌

漑の技術が進んでいたそうです。空海はこれを学んで来て、讃岐の国にあった満濃池と
言う巨大なため池を修復し、管理の手法についてもスリランカの方式を勉強して来て、
この管理手法を指導したのだそうです。空海は西日本にこの指導を進め、東日本に広げ
て行ったのは、行基と言うやはりお坊さんだったそうです。これも地元管理の手法で、
大変に上手く行き、室町時代からの農業の発展に大きく寄与して来たそうですが、明治
に入って、国の指導で川を塞ぎ止めて、大きなダムを作る中央集権的管理方法が取られ
るようになって、上手く行かなくなったとのこと。スリランカでも英国が入って来て、
同じように政府主導のダム方式に変えたら、農業が衰退したばかりでなく、マラリア蚊
が繁殖するようになって、酷い状況になってしまった、とのことでした。こうした昔か
らの知恵、地方分権的な手法が活用されるべきだ、と言うのです。

具体的には、漁協・農協・生協と言った協同組合とか、さまざまな非営利組織、学校
法人や医療法人などの公益法人。こうした国の力でもなく、市場原理でもない、専門的
知識を持った健全なコモンスの力を育成して行くことによって、社会的共通資本の上手

な管理が行われるようになるだろう、と言つのが先生の結論でした。

(平成十二年二月一日)

金融問題関連・茂木 賢三郎君宛コメント

株主の利益を最上階に置くアメリカ型のコーポレート・ガバナンスの考え方には私は全く反対で、これをグローバル・スタンダードとして世界中に押し付けようとするアメリカの傲慢さには腹が立ちます。この考えは貴兄が疑問視している「短期最適」を求めるものに他ならないのではないのだろうか。ジョンソン&ジョンソンがステーク・ホルダーに、このような順位（顧客、従業員、地域社会、株主）を付けていることは初めて知りましたが、従業員を株主の上に持って来たのはこれこそ正しい順位だと思えます。日本の企業は株主に統治して貰わなくても、立派な企業倫理で自分で自分を統治して来たのではないだろうか。第一、モノを言う株主なんかに心配して貰わなくても経営者が経営努力を怠れば、競合に負けてしまつてでしょう。極論を言えば、実態経済

を混乱させ、自分の金儲けしか考えていない投資家だか投機家だか分からない連中に経営の心配をして貰う必要はないし、そんな連中の利益に配慮する必要は全くない。何兆ドルと言われるヘッジファンドを動かしている連中や堀江何某や村上何某なんて、世の中に不要の存在だと思っています。今や、日本の企業もグローバル・スタンダードに追随してきてしまったばかりに、金・金で統治されるようになってしまっていますが、グローバル・スタンダードに浮かれ、ビッグ・バンに踊らされていた一〇年か一五年くらい前に、アメリカン・スタンダードへの追随を急ぐばかりではなく、どこかで日本型の、倫理観に基づく企業経営の素晴らしさ、を世界に広めて行く機会があつたのではないかと残念に思っています。日本型を広めていくことが出来ないならマハティールさんがやったように一種の経済鎖国でもして「日本は日本の考えで行きます。我々と付き合いなければ我々のやり方で付き合いましょう」位のことを言える経済的実力があつたのではないだろうか。コーポレート・ガバナンスを考えるに当たって労働組合に一定の役割を持たせる考えには賛成です。本来の意味でのコーポレート・ガバナンスを求める方向で

はないかと思えます。私が少し関わった三菱重工業の組合と会社の関係にはこの考えを進めようとする姿勢がありました。組合としても、従業員の立場から会社を良くするためにはどうすれば良いか、を真剣に考えました。話し合いをしても経営のプロと若手の組合幹部ですから、実力に差があつて中々議論にはなり難かつたけれど、会社としても真剣に組合の言うことに耳を傾ける姿勢を示していました。この点についてはドイツの企業の方が先輩のほうですが、最近はどうなんだろう。

ここまで考えて来て、株主至上主義のアメリカ型のコーポレート・ガバナンスの考え方に抵抗を感じる点では、貴兄と意見が一致するようですが、貴兄の方は経営トップの専横を問題にしているのに対して、私は株主支配そのものを問題にしていることに気が付きました。この辺はやはり資本家の貴兄と労働者の私との違い、と言うことなのだろうか。

(平成十八年七月七日)

一〇〇年に一度の経済危機

アメリカのサブプライムローンの破綻を切っ掛けに、リーマン・ブラザーズが倒産し、金融社会を中心に世界経済は一〇〇年に一度と言われる危機に直面しています。金融の世界の危機は当然のことながら実体経済にも影響を及ぼし、アメリカの三大自動車メーカーが政府の支援を経て国有化の一步手前までに追い込まれていますし、日本でもトヨタの業績が急激に悪くなったとか、ソニーまでおかしくなっていると、キャノンが強烈な雇用調整を発表したとか、これからもこうした事態が世界中に広まって行くものと思われます。例によつてマスコミが大変だ、大変だと騒ぎ立てています。騒ぎ立てて何の役に立つのか。事実の報道は必要なのでしょうが、殊更に騒ぎ立てるだけでなく、もっと人心を穏やかにするような報道が出来ないものだろうか、と、ここでも私のマスコミ不信の気持ちが出します。

今回の経済破綻は、総ての価値を金銭で計る風潮、そして個人の金銭的な利益を追求する風潮（自由主義経済の行き過ぎ）が強くなり過ぎたツケが招いたものと思つています。私は常々、カネがカネを生むことで世の中が繁栄するような世界はオカシイ、と言

い続けて来ました。市場経済至上主義とやらを標榜してこうした仕組みを作り、これをグローバル・スタンダードと称して世界中に押し付け、広めて行ったアメリカに一番の罪があると思っています。

カネが世界を支配するような世の中が間違っている、と私が初めて本誌で主張したのは一〇年以上前の平成十年十一月のこと、金融危機（二）の中での主張でした。経済の中心にいるべきなのは、額に汗してモノやサービスを作り出している人たちであってカネではない。カネはこうした経済活動をサポートする潤滑油的な働きをするのが本来の姿なのに、これがご主人様になってしまったところに不幸の始まりがあつたと思うのです。我々は共産主義を嫌って資本主義の世の中にいる訳で、資本主義の世の中では金の力が強いものになることは仕方のないことですが、金の力を無制限に放任してしまうとこういふことになります。

額に汗してモノやサービスを作り出すのが实体经济とすれば、カネを操って商売するのが金融経済と言つことになります。一〇年前にはこの金融経済の規模が实体经济の

二五倍に及んでいゝ、と言つ計算がなされていましたが、今ではこれが数等大きいものになつてゐるのではないだろうか。桁が違つてゐるかも知れませんが。ある国が儲かる市場だと思つたら、ヘッジファンドなどと呼ばれる大きなボリユームのカネが一時にこの国に注ぎ込まれる。一時的にはその国はそれで潤つのでしようが、危ないと思つたら、これらの金は容赦なく引き上げられる。それらの国はもっぱら経済力の弱い後進国ですから堪つたものではありません。一時に国家予算レベルの金が注ぎ込まれ、突然引き上げられるのですから、国の経済は愚か、国の体制すらも滅茶苦茶になるでしょう。一期、韓国やタイ、フィリピンなどがこんな酷い目に遭いました。当時のマレーシアのマハティール首相が一種の金融鎖国で自分の国を守ろうとしたのも領けます。どんな方法だったのかは勉強したことはありませんが、自分の国にそんな金儲けだけを目的とした不安定な金が入りするのを禁じる方法があるとすれば、その方法を探つて当たり前だと思ひました。当時の日本の政府は能天気なグローバル・スタンダードだ、ビッグ・バードとアメリカの都合の良い方向に追隨することを急いでいましたが、私はこんな時こ

そ日本としてはこんな動きを阻止すべきだと思つていました。経済的に力の弱い後進国としてはこれを防ぐ手立てはなかつたのかも知れませんが、ウソでも世界第二の経済大國の日本だつたら、アメリカ言いなりにならず、違つ方向を目指す力があつたのではないだろうか。明治維新やそれ以前の昔から得意として来た「和魂洋才」とでも言えば良いのでしょうか、外國の良いところを吸収して、日本の良いものを加味してさらに良いものを作り出すことが出来たのではないだろうか。世界中をその方向に変えていくのは荷が重過ぎるとしたら、日本だけでも自分のやり方を貫く力があつたのではないかと思つたのです。

昔の日本には商業の世界にも、自分が自由に出来る金の力を自ら制限しようとする精神があつたのではないだろうか。江戸期の近江商人の格言に「売り手良し、買い手良し、世間良し」と言つ言葉があります。また、大丸の創業者は「先義後利」を唱えたのとことです。渋沢栄一の「論語と算盤」も松下幸之助の「水道哲学」の思想もこの流れの中にあります。儲けるばかりが良いことではない、世の中全体のことを考えねばならない、

という自戒がどこかにあったのではないかと思うのです。そして日本の事業家の一番の関心事は会社の存続、つまり従業員に対する責任、にあったのではないか。勿論、慈善事業ではありませんから自分も儲けなければなりません、一旦事業を立ち上げたら、そこで働く従業員に対する責任が生じます。真面目に一生懸命働いてくれる従業員が安心して家族を養い、子供を育てられる安定した場を作って上げる責任です。会社側が終身雇用の保証をする、従業員は仕事に対する熟練や会社に対するロイヤリティーでこれに報いる。こんな仕組みは日本の会社の良い部分だったと思うのです。アメリカの優良会社ジョンソン・アンド・ジョンソンもステーク・ホルダーを順位付けて、第一を顧客とし、第二を従業員、第三を地域社会として、株主を第四に位置付けています。アメリカにだって同じような考えもあるのです。

最近、考えていることがあります。アメリカには昔から寄付の美談が目立ちます。カーネギー・ホールは鉄鋼王カーネギーが寄付したものだし、ナショナル・ギャラリーもアンドリュウ・メロンと言う大富豪の寄付を中心に作られたのだと聞きます。子供を

亡くした富豪によって創立されたのがプリンストン大学でした。IT産業のリーダーだったゲイツ氏も慈善事業に力を入れる、と言って引退しています。寄付というのは美しいものだと思いますが、私は「施してやる」と言う上からの感じが強くてあまり好きではありません。日本にはこうした寄付の文化がないのではないかと、それは寄付に対する税制が行き届いていないからではないのか、などと言われますが、違う見方もあるのではないかと、思うのです。それはアメリカの事業家が可能な限り個人の金儲けを追求することを目的として事業を経営するのに対して、旧来の日本の事業家には個人の金儲けは二の次として事業を通じて世の中に貢献したい、と言う意識がどこかにあつたからではないのだろうか。アメリカの事業家が寄付の形で儲けを社会に還元するのに対して、日本の事業家は事業を通じて常に利益を社会に還元して来たのではないかと。旧来の考え方で行けば、トヨタが一兆円もの利益を出すくらいなら、その分安い車売って世の中に利益を還元すれば良かったのではないかと、言うことです。

闇雲にアメリカの考え方の取入れを急ぎ追隨するばかりではなくて、外来の市場経済

至上主義に日本古来のこれらの良い部分を取り入れる知恵はなかったのだろうか。

中谷巖氏の「資本主義はなぜ自壊したのか」と言う本を読んでもみました。この人は元々グローバル・スタンダードの推進者で規制緩和の急先鋒として知られている人ですが、この本の中で中谷教授は、今になって考えて見ると闇雲に規制緩和を推し進めたのは間違っていた、ある程度の規制は必要だった、と懺悔しています。

今や、オバマ大統領も国際的に金融資本を規制する方法を考えねばならない、なんて言っています。私に言わせれば、こんなことは一〇年以上前から分かっていたこと。その当時、何か本でも書いて発表していれば、一〇年後を見通した経済学者として今頃は売れっ子になっていたのではないかな、なんてバカなことを考えています。

(平成二十一年三月五日)

時事問題

原子力発電について

私は太陽エネルギーが実用化されるまでの繋ぎ役として、原子力発電は絶対に必要なものだと思っておりますが、東日本大震災で原発の安全性が大きく揺らいだことを残念に思っています。本稿はそれ以前に書いたものですが、私の基本的な考え方には変化がありませんので、敢えてご披露します。

新潟県の刈羽村でプルサーマル原子力発電の受け入れを巡って住民投票が行われ、推進を求める村長側が負けたニュースが話題になりました。国のエネルギー政策が住民投票で賛否を問われること、その上、高々五〇〇〇人程度の村民の投票の結果に基づいて国民全体が原子力発電に反対しているような調子の報道がなされること、については大いに疑問を感じます。この問題は簡単に片付く問題とは思えませんが、その直前に原子力発電について一寸した講演を聴く機会があり、感じたことがあったので報告してみました

いと思います。

まず、日本はエネルギーの有効利用と言う面では世界の優等生だ、という事実は私にとって新しい認識でした。日本は世界のGDPの一七%を生み出していますが（一九九八年の数字）、エネルギーの使用量は五・九%、CO₂の排出量は五・一%なのです。これに対してアメリカは二五・六%のGDPを生み出すのに二五・四%のエネルギーを使用し、二四・五%のCO₂を排出しています。この面での劣等生は旧共産圏で、ロシアが一・二%のGDPに対してエネルギー一〇・二%、CO₂一〇・一%、ですし、中国はGDP二・九%に対し、エネルギー九・六%、CO₂二・七%と言う数字になっています。考えられる理由としては、日本は気候が温暖で、冷房や暖房に費やされるエネルギーが少ないこと、地形的に内航船の利用が容易で、物資の移動に掛かるエネルギーが少なく済むこと、などの恵まれた条件もありますが、昔から資源のない国であることを認識して、エネルギーの有効利用には工夫を続けてきた結果が出ている、と言えます。指標として、GDPを基準にしたことについては疑問が残ります。人口とか国土面

積なんかを基準にしたら違った比較になるのですが、日本がこの面ではかなりの努力をして来た国であることは事実のようです。京都会議でのCO₂削減の目標値が、EUの八%、アメリカの七%に対して日本に六%が認められていると言つことは、この辺に対する世界各国の理解が得られている、ということなのではないでしょうか。

日本のエネルギーの四一%は発電に使われていますが、発電所から排出される酸性雨原因物質を比較してみると、この面ではもつと優等生であることが分かります。発電電力(KWH)当たりの窒素酸化物(NO_x)と硫酸酸化物(SO_x)の量(グラム)を比較してみますと、アメリカが夫々二・二と四・六、イギリスが一・九と五・四、フランスが三・〇と八・三、中国に至っては五・六と九・二なのに対して、日本は〇・二九と〇・二四と言う圧倒的な差が現れています。これは狭い国土を意識した国の規制の力が大きかった所為なのでしょう。現に電力会社はこの種の環境保全機器に発電所建設費の三〇%を投じていると言われます。発電所の中も、発電工場本体が占める面積よりも、環境保全のための関連機器が占める面積の方が圧倒的に広いものになっています。

リストラを考えるとときに、ダブついている経費や人件費を削ることは比較的容易なのですが、努力をして削った後、更に削るには大変な努力が必要です。良く「乾いたタオルを絞る努力」という言葉が使われますが、これだけの努力をして来た日本が京都議定書のCO₂削減目標値を達成しようとする時に避けて通れないのが原子力発電です。太陽光発電や燃料電池がまだ実用化していない現在、温暖化ガスの発生が圧倒的に少ない発電の方法は原子力発電なのです。現在、日本の発電量の三四%が原子力発電で賄われていますが、国の計画では二〇〇九年にはこれを三六%まで引き上げようとしています。計画通り進むと、二〇〇九年には原子力、水力、風力などの非化石エネルギーによる発電が四七%になります。石炭・石油・LNGなどの化石エネルギーによる発電が五三%になります。CO₂の発生量はこの化石エネルギーによる発電部分から九八%も出て来るのに対して、非化石エネルギーによる発電部分からは二%しか出て来ない計算になっています。

ところがご存知の通り、日本では原子力と言うとアレルギーが強いと言うのが、原子

力と言っただけで騒ぐことの好きな人が多いと言っのか、発電所を作るとなると反対運動が出て来て中々話が進みません。一旦、住民の同意を得て、建設の契約が出来ても、実際に着工する段階になってゴタゴタが再発するなんて例もあります。私の息子は三菱原子力と言っ会社就職したのですが、発電所建設の契約はあつても着工できない、と言っ事情が続いて会社の経営状態が思わしいものでなくなり、七年程前に親会社の三菱重工に吸収合併されました。三菱重工も原子力発電の分野では、第一人者の方です。その中心の神戸造船所で原子力関係の設計の仕事をしていたのですが、こんな事情が続いたものですから暫くは火力発電の仕事を手伝っていました。最近また元の仕事に戻っているようですが・・・。(閑話休題)

原子力発電というと放射線物質が周辺環境や人に害を及ぼすということ危険なものと思われていますが、これらの危険に対しては、万一の事故を想定した色々な手が打たれていて、ごく安全なものになっているとのこと。最近「もんじゅ」のナトリウム漏れの事故とか、英国でのデータ改ざん事件とか、JCOの臨界事故とか、浜岡原

発のパイプの破断事故とか、素人目に見ても正に初歩的としか言いようのない管理体制の不備による事故が続いて安全性に疑問が大きくなってきているのも事実ですが、原子力発電の安全性を示す面白い話を聞きましたのでご披露します。

元々、人間は正しい生活をしていれば百二十五才まで生きる可能性がある、と言われますが（春山茂雄「脳内革命」）、世の中の諸々の悪行によって人間の寿命が何日縮まっているか、を計算した人がいます。アメリカの原子力学者がアメリカを例にとつて、統計を元に計算したものです。一番の原因に上げられているのが貧困です。人間の寿命は貧困によつて三五〇〇日短縮されている、と言つ計算結果が出ています。次が喫煙で二三〇〇日、心臓病の二二〇〇日と続きます。面白いのはその次に来る独身と言つ原因で、これが二〇〇〇日なのですが、男女別に見ると女性の独身者が寿命を一六〇〇日縮めるのに比較して、男性の独身者は三五〇〇日も寿命が縮まるのです。奥さんは大切にして長生きをして貰つた方が良さそうです。ガンや脳卒中などの病気が上位に続きます。自動車事故が一八〇日。コーヒーを一日二・五杯飲む人で二六日なんて数字もあります。

航空機事故は一日です。現在アメリカの原子力発電比率は二〇%程度だとのことですが、これが一〇〇%になったと仮定しても、原子力発電による寿命の短縮は一時間なのです。これは手前勝手の計算かも知れないということで、アメリカ最大の原子力発電反対組織に同じ計算をして貰ったら、一・五日と言つ数字が出てきたそうです。反対派がする計算なら、想定を悪い方へ悪い方へとする筈ですから、それでも一・五日と言つことは、原子力発電の安全性がかなり高いものであることを示していると思います。

原子力発電所を作る際に、周辺の住民を説得するのにどの程度科学的な説明をする努力がなされているのだろうか。住民もその説明を冷静に真面目に聞くだけの賢さを持っているだろうか。安易に補償金と言つ形のお金で解決しようとする方法が取られているのではないだろうか。建設地として人口過疎地が選ばれていますが、極端に言えば、人口密集地に作る試みがなされても良いのではないか。そうすれば廃熱の利用で地域冷暖房が可能になり、エネルギーの有効活用になります。逆説的な言い方ですが、大勢の住民を説得するに足るだけの嚴重な安全管理がなされるのではないか。刈羽村の場合は

有権者が五〇〇〇人程度でした。本当に安全なものであったとすれば、この程度の人数の人たちを納得させることが出来なかった、と言うのはどこかに怠慢があったと思うのです。その結果が将来の国のエネルギー政策の方向を左右するものになる怖れがあることくらいは分かっていたのでしようから、何としても賛成を勝ち取る努力がなされるべきではなかったのだろうか。何万人、何十万人と言うことになれば、説得すると言っても物理的な限界があるでしょうし、またぞろ「ダメにする連中」が「ダメと言ったらダメ」なんて言うってヒステリックに騒ぎ立てたことでしょうが、五〇〇〇人の規模だったら、国として一人一人の住民に接して説明して、十分の理解を得ることが出来たのではないだろうか。その村に住む東電の社員が周辺の住民に対して、賛成への働きかけをしたのに対して、反対派住民から「内政干渉だ」なんて声が出ている。また、それに対して東電側は「内政干渉をする積もりはありません」なんて逃げ腰の姿勢を示している。どうして正々堂々と「正しいことを理解して貰うように説明しているのだ」と言えないのだろうか。「住民」なんて声が出てくると、とたんに正論が遠慮せねばならないよう

な風潮がそこら中に見られるような気がするのは、私だけの偏見でしょうか。結果が出た後で経済産業相が、東電の努力に問題があった、なんて偉そうなことを言っている。いやしくも国のエネルギー政策の方向を一私企業に任せて平然としていて良いのか。この問題に対しては国の怠慢が大きいのと思います。

（平成十三年十二月五日）

刑法の見直しについて

昨年は災害が多かった。平成十六年の字が「災」だったと言つのも頷けます。新潟の大地震で日本だけに災が多い年なのかと思つていたら、最後にインド洋の大津波が来て世界的な「災」の年になりました。イラクでは相変わらず殺し合いが続いているし、パレスティナのテロもなくなりません。最近では他のニュースに隠れてあまり話題になりませんが、アフリカのエイズ患者も四千万人を超えたと聞いています。これらは皆、地球のお邪魔虫の人間が地球上から駆除される兆候かもしれませんよ。

災害もさることながら、昨年、日本ではおぞましい事件が多かった。一つ一つを思い

出してみたくもありませんが、私が一番悲惨だと思ったのは、奈良県で小学校の女の子が殺された事件でした。殺した後の酷いやり方を見ていて、これは特別の恨みを持った人が起こした事件に違いない、と思っていました。犯人を捕えてみたら「誰でも良かった」なんて、全くの変質者の起こした事件でした。犯人が捕まった後で、女の子のお父さんが「極刑では足りない」と言っていたそうですが、気持ちは理解できます。このケースでは極刑以外にありようがない、と思いますが、こんなケースでも犯人の精神鑑定がどうか、加害者の人権保護の問題になるのだろうか。

このところ被害者の人権保護が問題にされていますが、この問題はもつと真剣に論議されて良いものだと思います。リンチや復讐が表に出ることは避けなければならぬとしても、日本の刑法は加害者に甘すぎるのではないだろうか。私は刑法の勉強をしたことがないので、外国の刑法との比較が出来ないのですが、外国の刑法は日本に比べて格段に厳しいように思います。日本には死刑はあるものの、有期の刑は懲役でも禁固でも一五年が最高とされています。加重されても二〇年が最長とされているようです。

終身懲役なんてのではないし、無期懲役の場合でも、事実上は七年ぐらいで出て来るのが通例と聞いたことがあります。それも居心地の良い牢屋で人間として扱われているみたい。更正を目的としているからこう言っことになるのでしょうか。アジア系の人達なんて、娑婆での自分達の酷い生活より牢屋の中の方が居心地が良いから、犯罪を犯して捕まっても平気だ、なんて言っているそうではありませんか。捕まって牢屋に入れられたら大変だ、と思わせるのが牢屋ではないのだろうか。悪いことをした人は陽も差さない地下牢に入れて酷いものを食わせる、位で良いのではないだろうか。外国の刑法は「復讐」とか「目には目を」の姿勢が強く出ているのではないか、と思います。牢獄も酷いところが多いようだし、終身刑は勿論あるし、罪を加算して二〇〇年の刑とか三〇〇年の刑すらあると聞きます。アメリカでは電気椅子での処刑に被害者の関係者を立ち合わせる、なんて場面を映画で見たことがあります。この辺になると日本人の感覚とは大分違うのではないか、と思われれます。少なくとも私にはとても耐えられないでしょう。

これは私の理解ですが、日本の刑法は日本古来の恥の文化を反映しているのではない

だろうか。日本人は、自分の犯した罪は自分が一番意識している。他人からとやかく言われなくても自分が一番恥じを感じているから、刑罰をそれ程大きくしなくても良い。罪を憎んで人を憎まず、なんて誰が言った言葉か忘れましたが、そんな思想もその辺から出て来たのではないだろうか。それよりもその後の更生に力を貸してやるうと言つことなのでしょう。日本の刑法が施行されたのは明治四十一年ですから、まだ武士の心、恥の文化が残っていた時代のこと。でも、最近ではこの心はどこかへ消えてしまっている。凶悪犯罪の情報は外国からも入るし、それを真似する人もいるでしょう。外国人の犯罪を含めて、犯罪の質が変わつて来ているのではないか。これに合わせて刑法を見直す時期なのではないかと思ひます。今の刑罰の与え方は、被害者とその関係者の感覚に全く合っていないような気がしてなりません。

奈良の女児殺害事件だつて、この犯人は十年以上前に同じような犯罪を犯そうとしていた（未遂）と言つではありませんか。この時に軽い刑を言い渡して、こんな男を野放しにした当時の裁判官の責任はどうなるのだろうか。刑を軽くしようとした弁護人の責

任も問われるべきではないか。更生した、と判断してこの男を出所させた少年院（？）の責任はどのなのだろう。同じような心配が神戸の幼児殺害事件の酒鬼薔薇聖斗と発言う異常者にも当てはまります。聞くところによると、この当時の少年はもう出所して世の中に出て来ていると言つてはありませんか。こんな異常者が世の中をウロウロしている、家の隣にいるかも知れない、と考えるとゾツとします。子供を持つ親は心配でオチオチしていられないでしょう。被害者の関係の皆さんこそたまらない気持ちになるのではないだろうか。加害者の人権を守ることを重視するあまり、世の中を危険に晒しているのではないか、と言つ気がしてなりません。ミュージカルの「レ・ミゼラブル」で、ジャベル警視がジャン・バルジャンに向かって“Man such as you can never change!”と罵り叫ぶ場面があります。ジャン・バルジャンの場合は、完全に立派な人間になっているのに、ジャベルがしつこく追い回すので、ジャベルの方が悪者になります。こんなケースはむしろ少ないのであって、犯罪を犯す人はやはりそれだけの要因を持っていると考えるべきではないだろうか。犯罪の理由を社会に求めたり、その人が置かれ

た環境に求めたりし過ぎる傾向があるのではないだろうか。最近、性犯罪や幼児関連犯罪の前科を持つ人の情報を管理しよう、と言う動きが出て来て問題になりつつありますが、更生を妨げるようにはしないような配慮の下で、大いに進めるべき方向ではないかと思っています。

個人に対する犯罪もさることながら、世の中に迷惑を掛けたことに対する罪も見直されて良いのではないかと思います。放火なんて八百屋お七の昔から、火あぶりの刑と決まっています。放火は現刑法でも最高刑は死刑と言っていることになっていますが、放火で死刑になった人の例を聞いたことがありません。最近ではこの他にもコンピューターのハッカーや、ウイルスを作って世の中に迷惑を掛ける人がいます。一種の愉快犯的なものなのでしょうが、これらも迷惑を掛ける範囲の広さから考えると、重刑を適用しても良いのではないかと思います。偽札作りとか、カードの偽造とかも迷惑の範囲の広さに応じて刑の重さが決められる仕組みがあっても良いのではないだろうか。

私は性善説を信奉する方だと思っていますが、性善説が当てはまらない人もいます。闇

雲の性善説は危険。単なるお人好しになります。時代に合った刑法の見直し、加害者の扱い方、被害者の人権の尊重が論議されて良いのではないかと、思っています。

(平成十七年二月五日)

役人根性

(「事なかれ その場しのぎで 先送り」・茂木 賢三郎君に対する「コメント」)

貴兄の前掲の川柳は私も正に外務省に対して感じていたことなので、良くぞ詠んでくれた、と思つています。あの人は自分がその立場にいる間は、何事もなく何もしないのが一番、と考えているのでしょう。拉致問題なんかが一番良い例だと思ひます。拉致が発生した時に当時の外務官僚が何をしたか、と言つことです。国民と国益を守るために働くのが役人の筈で、我々はそのために税金で彼らを雇つているのに、自分の保身しか頭になかったのではないかと、二十年も経つて、騒ぎが大きくなったので、仕方なく対応しているのではないだろうか。ここまで世論を作り上げて来た横田さんご夫婦の長年の

努力、特に早紀江さんの母親としての執念は敬服に値しますが、今頃になって事実を明らかにしろ、なんて言っただけでさえ混乱状態にある北朝鮮で、ほじくり返すのは不可能に近いのではないだろうか。彼らの肩を持つ積りは毛頭ありませんが、これ以上は調べようがない、と言っのが本当のところかも知れません。

慰安婦の問題がこの時期にアメリカで大きく取り上げられつつあることについては、何か意図的なものを感じます。日本の国際的孤立化を狙って、中国や北朝鮮辺りが影で動いているのではないだろうか。慰安婦に強制があったことを認めた河野談話の背景は、やはり宮沢を含めた「その場しのぎ」だったようですね。その場を凌げれば良いのであって、先々でどんなことになるのか、の読みは全くない。お粗末のひと言です。その場しのぎで出した談話が、時間が経つと強制の事実を認めたことになってしまっただけで、昨今のアメリカでの騒ぎに繋がっているのだと思います。安倍さんもどんな読みがあったのかわかりませんが、「河野談話を継承する」なんて言っただけで良かったのだろうか。「事実を調べて見直す」位のことを言っただけで良い機会だったのではないだろうか。事実を八

ツキリ調査して見直すべきだと思いますが、一旦認めてしまったものを覆すことが出来るのだろうか。

歴史教科書問題でも事実の確認をしないまま、当時の宮沢官房長官が中国や韓国の批判を認めるような談話なんかを出している。これも当時の鈴木首相の訪中を目前に控えて、トラブルを避けようとした正に「その場しのぎ」だったのでしょうか。こうした外交上の問題については外務官僚の判断が働いたのに違いありませんが、宮沢・河野はA級戦犯です。

国益と言えば、日本の将来を長い眼で見たときに、食料自給の問題、エネルギー確保問題、近隣の気違い国家からの防衛問題、災害対策、環境問題など多くの問題があると思います。イザと言うときのために、何らかの対策を考えている役所があるのだろうか。国の将来を考えてくれている官僚がいるのだろうか。堺屋太一が「油断」を書いた頃には、通産省が石油問題について相当研究し、何らかの手を打とうとしていたことが窺えますが、現在ではどうなんだろう。これらは省のレベルを超えた段階で検討される

べきものだと思いますが。

私の思い過ぎしなら良いけど、最近の官僚がやっているのは受身の「その場しのぎ」ばかりで、将来の日本を見据えて積極的に国民と国益を案ずる姿勢がないのではないかと思っています。貴兄の川柳が世の中に警鐘を鳴らすことになることを願っています。

(平成十九年四月五日)

北京オリンピックに思う

北京でのオリンピックの開催が決まった時から、私は、中国にオリンピックをやる資格があるのだろうか、との疑問を持っていました。直接の切っ掛けはアジアカップ・サッカーでの醜い騒ぎでした。観客に品性のないこと、応援というより相手チームへの誹謗の醜いこと。こんな国でオリンピックなんかやったらトンでもないことになる、と思つたのです。本来、オリンピックというものは、「より早く、より高く、より遠く」(でしたっけ?)を競うものだった筈ですが、最近のスポーツは審判の判定技術に頼る部分

の大きい競技が増えています。体操競技やアイススケートなど美しさを競うものは当然のこととして、サッカーやハンドボール、レスリングや柔道なんかも審判の技術が問題になる。判定技術の優劣の差なら許せる部分もありますが、これがエコノミズムによる差だとしたらこれは許せない。アジアカップ・サッカーでの過度の応援振りやそれに後押しされたエコノミズム判定を見て、こんな悪意の判定が罷り通るようでは、中国なんかでオリンピックをやったら日本の成績は酷いものになるに違いない、と思ったのです。こんなオリンピックはボイコットすべきではないか、と考えていました。その後もボイコット論を後押しするような事実が続発しています。

まず公衆のマナー。列車なんかに乗るときの押し合いへし合いの騒ぎの醜さ。自分さえ良ければ、の感覚が強いので、他人を押し退けても自分の利益を守ろうとする。行列をして譲り合いをする姿勢なんか全く見えません。オリンピックで多数の外国人を受け入れるためにマナーの勉強をする、なんて全くみっともない話です。競技場での観衆のお行儀なんて考えるだけでゾッとします。孔子・孟子の時代には礼節を知った人たちが

いた筈です。この時代の中国人は何処へ行つてしまつたんだらう。

食の安全の問題。農薬入りギョーザの話は、私は何らかの意図的なものが根本にあると思つていますが、農薬による人的被害は中国では珍しいことではないようです。ある程度の被害はあつても仕方がない、と思われている節すらあります。これも自分が儲けるためなら他人に迷惑を掛けても構わない、という、自分さえ良ければ、の感覚がなせる業だと思えます。騙される方が悪いと言つ感覚なんでしょう。真意の程は確認していませんが、オリンピックでは参加各国からの食材の持ち込みは禁止されている、とも聞きます。これでは何を食べさせられるか判らない。中国にとって大事な試合の前に、相手のチームが毒を盛られることだつて心配せねばなりません。

民意の無視。鳥の巣とか呼ばれるメインの会場の周辺の住民は強制立ち退きを命ぜられ、酷い目に遭つていられると言われます。これは完全に民意の無視でしょう。三峽ダムを巡つての周辺の民衆の不幸を描いた「長江哀歌」と言つ映画が何かの賞を取りましたが、これも同じく完全に全体主義国家の思想です。日本の場合は国民の「個人の権利の尊重」

とやらが行き過ぎてゴネ得を誘発している傾向にありますが、国の面子の方が優先されて、国民を不幸に追い込むような国の行事に参加する必要があるのか、と云うことです。

大気の汚染。十数年前に行った時はそれ程感じませんが、最近の北京の空気の汚染は酷いようです。マラソンの有力選手が参加を辞退したのは当然のことだったと思います。最近になって環境対策を講じた車の販売を促進しているとのことですが、今頃になって遅すぎる。格好を付けるためのパフォーマンスに過ぎないと思います。多分、開催日の一ヶ月くらい前になったら、付近の工場の操業や施工中の土木工事を全面的にストップし、車も走らせない、なんて対策が取られるのではないかと予想しています。これで黄砂は別としてスモッグは大分減るでしょうが、これとて民主主義の国では絶対に出来ないこと、全体主義の国家だから出来ることでしょう。それでも、これを良い契機としてその後の北京の環境が良くなるようなら、少しでも意味のあることですが、こんな対策はその場限りのお化粧に過ぎないのではないかと危惧しています。

そしてチベット問題。チベットについては酷い弾圧の歴史があります。宗教とか人権

の問題だけが表に出て、過去の歴史についての言及がなされないのは、世界中の国々が現在の中国に遠慮しているのだろうか。中国共産党政権の強烈な弾圧と一二〇万人とも言われる虐殺の歴史は忘れ去られているようです。同じことを日本がやったら侵略、中国がやったら解放、とは良く言ったもの。中国の人たちはこんな歴史を教えられていないようです。我々がこんな奴らに「正しい歴史認識」とやらを教えて貰う必要はさらさらない。逆にこつした正しい歴史の事実を中国の国民に教えてやりたいと思います。昨今、世界各国で起こっている聖火リレー騒ぎも中国の一般に人たちには知らされていないとか、情報の統制も可能な怖い国なのですね。尤もあのダライ・ラマという人。チベット仏教徒からは大変に尊敬されている人、とのことですが、誠に失礼な話ながら、言動に何とも品が感じられないのが不思議です。何となく卑しい顔に見えるのは、私だけの僻目なのでしょうか。立派な行いを続けてあれだけの年になれば自ずから顔や言動に品格が出て来るのではないかと思いますが、私にはどうにもそれが見えないのです。私にそれだけの徳がないから判らないのかも知れませんが……。これは余計な話。

欧州の各国の首脳が開会式への出席を逡巡する動きが出ています。福田さんはどうするんだらうか。毅然とした態度で主張するところは主張して日本としての意志を示して欲しいと思いますが、胡錦濤主席が来日して圧力を掛けられて、パンダなんかで誤魔化されて、結局は出席することになるのではないのでしょうか。これが逆の立場だったらどうだろう。中国側は恥も外聞もなく、これをタテにして強烈なポイント稼ぎをするのではないか、と思います。オリンピックは今中国にとって最大の弱点です。ボイコットは出来ないとしても上手に外交の武器に使うことは出来ないんだらうか。日本人は弱みに付け込むのが不得手なんです。人の弱みに付け込むなんて美しくない、という感覚が未だに日本人の心に染み付いているのではないのでしょうか。私としては、そうした美意識を少しでも残しているところが日本人の良いところだと思っし、私の好きな部分でもあるのですが……。

中国との付き合い方、となるとこれは政治問題になるので遠慮しますが、この辺をキツチリ主張できない日本の現状を悲しく思っています。ところが、こんな当たり前の意

見を言つと「右寄り」と受け止められる風潮にあります。そのこと自体、日本はオカシナ国になってしまっているのだな、と思います。

(平成二十年六月五日)

永田鳥

さるところで、下記の一文を発見しました。面白いのでご紹介します。

「永田鳥」

日本には謎の鳥がいるというが、正体はよくわからない。

中国から見れば「カモ」に見える。

米国から見れば「チキン」に見える。

欧州から見れば「アホウドリ」に見える。

日本の有権者には「サギ」だと思われる。

オザワから見れば「オウム」のような存在。

でも鳥自身は「ハト」だと言いつ張っている。

タバコ値上げでは自分は「スワン」といい、

基地問題では「カワセミ」に変身する。

それでいて、約束したら「ウソ」に見え

身体検査をしたら「カラス」の様に真っ黒、

釈明会見では「キュウカンチョウ」になるが、

実際は単なる鵜飼の「ウ」。

もしかしてあの鳥は日本の「ガン」ではないか??

この話は霞ヶ関を中心に大分広まっているそうでご存知の方も多いかと思いますが、知らぬは「宇宙人」ばかりなり、なのでしょうか。

ハトポツポ首相の正体を良く現していると思いませんか？

このところ民主党政権に対する諸兄のお怒りも激しいものになって来ています。私も我慢が出来ないほどの怒りを感じていますので、重複しますが私の怒りの弁を聞いて下さい。

多少の行き過ぎがあつて、弱者を苛める結果になつたことには反省の余地があります。小泉首相が旧態然たる自民党を改革しようとした動きは正しい方向だつたと思います。改革されて良くなる筈のその後の自民党が情けなかつた。このままでは駄目だ、とにかく政権を代えてみよう、と言つのが国民の声で、総選挙では民主党が勝つたのではなくて自民党が負けたんだ、と言つ評価は正しかつたと思います。最低よりも少しはマシになるだろう、と期待した我々有権者が間違つていたということなのでしょう。

茂木兄は「権力者の思い上がり」と言つけれど、それ以前に権力者が何たるかが判つていないのが今の民主党ではないだろうか。その立場に立つた人が言つたりしたりすることが周囲にどれ程大きな影響を及ぼすのか、が理解出来ていないのではないだろうか。

国内で勝手なことを言っただけで回る分にはまだ許せるけど、これが外国に向けて発信されるとンでもないことになる。ポツポ首相の「Trust me」はあまりにも有名になりましたが、こんなバカな軽々しい外交があるんだろうか。国会対策委員長が韓国へ行つて「外国人参政権は確保する」なんて発言している。こんな発言はもつと咎められて良い。私は本件については反対論者ですが、仮に賛成の立場にあるとしても、政権党の要職にある人が未だ国内で論議中の問題を、当事国に向かってこんな約束まがいの発言をするなんて、考えられません（これを追求し切れない野党も情けないと思います）。首相をはじめとして、大臣連中の発言の軽さは驚くばかり。こういう発言をしたら何処にどう言う影響が出てくるのか、を十分に考えて言っているのだろうか。そう言う訓練が出来ていない人たちが権力を持たされてしまった、と言うことなのかも知れません。

権力に対する謙虚さと言う点では、話題に出すのも汚らわしいと思うけど、石川議員の問題だって、議員辞職が当然だと思えますが、辞職勧告の論議を何故国会でやらないのか。堂々と論議して、否決するならそれでも良いではありませんか。論議すらさせな

いと言つのは、数の力で自分の都合を押し付けようしていると言つこと。これが自民党だつたらやはり何らかの節度みたいなものが働いて違った形になっていたのではないかと思つのです。全く美しくないと思います。

首相が優柔不断で、何も決める勇氣を持っていない、と言つのが一番の問題点ですが、やはり悪の根源は小沢氏にあると思つ。私はどちらかと言つと小沢氏を買っていました。政治家と言つものはきれいことばかりでは何も出来ない。世の中の基準から見ても少しぐらいダーティでも、やることをやってくれば許される、と言つ感覚だったので。シラク首相の「エ・アロール？」（それがどうしたの？）が理解できる感じでした。でも、実際に小沢氏に権力を持たせてしまつたら、これは大変なことになると思つています。前号でも触れましたが、国会議員と言つものは、自分がやろうとしていて、その主張を国民に判定して貰つ。これを票の形で評価してもらつのが選挙だと思ついます。それを、まず選挙に勝つことが先決だ、なんて言つのは全くの本末転倒です。選挙に勝つてしまえば何でも自分の好きなことが出来る、と

言うことなのでしょう。恐ろしいことです。そのためには手段を選ばない。新人議員に
対して、国会審議なんかすつ飛ばして選挙運動をして来い、と言う教育をする。大勢の
子どもを中国に連れて行って、一人ずつ胡錦濤主席と握手をして貰って写真に撮ると
いうのも選挙対策そのものでしょう。これでは朝貢外交そのものではありませんか。選
挙を優先する、若しくは自分の力を誇示するために国の尊厳を貶める。全く許せない。
皇室のルールを破ってまでも中国の副主席を天皇に会見させたのもこの握手の交換条
件だったことは見え見えます。ゴールデンウィークにはアメリカへ行くと言っています
が、オバマ大統領に会えなければ行かない、なんて言っている。また同じ選挙対策のた
めにミットモないパーフォーマンスをやるうとしているのではないだろうか。国益より
も自身の権力の保持を大切にする姿勢が許せません。野党時代のシーファー大使やクリ
ントン国務長官に対する失礼な態度は、自分はアメリカには唯々諸々と従ってはいませ
んよ、と言う幼稚な意思表示のやり方で、これも自分を大きく見せるために国益を損な
う危険を冒す愚かなやり方だと思えます。陳情を全部自分のところに集中させておいて、

個所付けとやら気持ちの悪いもので力を誇示しようとする。これも選挙対策に違いありません。

彼は今の立場が一番居心地が良いのだと思う。政権に入っていないから表に出ないで権力が行使出来る。国会の場で追求されることもないので。今後、選挙対策の目的で幹事長職を離れるようなことがあるかも知れないけど、その場合も陰で権力を行使する閣将軍的な力は残す手立ては考えます。

このまま民主党が参議院議員選挙で勝つようなことになれば、その後三年間はこの国がこの人の好きなように操られることになります。その三年の間に更に権力を長引かせる手立てが取られるのではないだろうか。ナチズムの到来です。恐ろしいことです。少なくともこの夏の選挙は民主党に勝たせてはならない、と思っています。

(平成二十二年二月十日)

補 長崎県知事選挙

・長崎県知事選挙の結果が全国的な話題になりました。長崎県民が小沢民主党への批

判を真つ先に示す結果になったと思つています。前回の総選挙では長崎は四つの小選挙区全部で民主党に勝たせてしまいました。今回は候補者選びが遅れた上、知名度も低かつた野党推薦の前副知事が三一万六千票対二万二千票と言う大差で与党候補を破つたのです。与野党とも流石に力を入れた選挙戦で双方からの応援合戦も激しいものがありました。与党からは露骨な利益誘導の個所付けの約束もあつたそうですが、これを撥ねつけた長崎県民の良識は捨てたものではありません。この結果は小沢批判に他ならないと思つています。今回の投票率が前回より七・八%も高い六〇・〇八%だつたこともこの批判の声が如何に高いものだつたか、を示していると思ひます。私のところにも両陣営から何度も何度も電話がありました。昨年夏の総選挙の際、民主党から立つて当選した後輩の宮島大典君を応援したので、宮島事務所からの呼び掛けも盛んだつたのですが、元々宮島君には「民主党のトップは大嫌いだけど、君は応援する。内部から民主党を変えてくれ」と言つて応援したもので、呼び掛けに対しては「今回は小沢を勝たせてはならないと思つている

ので入れません」とハッキリ答えていました。事務所から電話する人同士の連携が取れていないのか、違う人の声で何度も電話があるので、同じことを何度も言っている機会が由来しました。運動の前線からのこんな声が中央に届くことによつて変わることもあるのではないか、と思つて言っていたのですが、同じ事を何度も言わせるな、と思いつつも、逆に何度もアピール出来たのはむしろ幸せでした。今や巷では、農水省の局長の職を擲つて引つ張り出された四十歳の与党候補に対して、小沢に酷いことをされた、と言つ同情の声が出て来ている始末です。同日行われた町田市市長選でも同じような現象が起こっているようです。

(平成二十二年三月十五日)

民主党政権

昨年8月の総選挙で民主党が大勝して民主党政権が出来ました。私は平成元年卒の後輩の宮島大典君が自民党代議士の頃から応援していました。その宮島君が前々回の選挙

で自民党に酷い目に遭わされ、民主党に鞍替えしていたので、今回私は彼に、民主党を内部から変えてくれ、と言う注文を付けて民主党に投票することにしました。結局長崎は四つの選挙区とも民主党が取りました。

民主党には優秀な若い人が大勢いると思うのですが、私はトップの五人が大嫌いでした。何を言っているのか分らない、正に宇宙人の鳩山、何を考えているのか判らない悪人面の小沢、パーフォーマンス・オンリーの菅、戦後の日本を滅茶苦茶にした日教組の輿石、山岡宗八の娘婿とは思えない下品な顔つきの山岡。こんな人達に日本の政治を任せていたら、どんなことになるんだろう、と最初から思っていました。

案の定、あの政権は最低でしたね。まず鳩山は、上に立つ人間がどうあるべきかの訓練が全く出来ていなかった人だと思えます。「最低でも県外」、「トラスト・ミー」、「CO2削減二五％」なんて、言っていることが軽いという以上に全く責任が伴っていない。先を読んだ発言が出来ない。上に立つ人間の発言が周囲と将来にどんなに大きな影響を及ぼすのか、が最後まで分からなかった人ではないだろうか。所謂、洞察力が全

くなかった人ではなかったかと思うのです。会社で言えば、課長以下の判断しか出来ない人だったと思います。責任を持って人の上に立ったことが一度でもあったのだろうか。そんな人を国のトップの総理大臣にしてしまった我々が大きな間違いを冒してしまっただと言ふことで、世界中に恥を晒したと言ふことになります。マザコンのお金の問題は論外として、沖縄の基地問題では日米の信頼関係を危うくするし、纏まりかけていた国内も滅茶苦茶にしてみました。散々混乱させた挙句、元に戻ることもなくなったけど、国際的な信用を回復するにしても、散々煽り立てておいて梯子を外された沖縄の人達を収めるにしても、これを修復するのは大変でしょう。混乱の責任を取って辞めたけど、この罪は総理を辞めても議員を辞めても償えるものではない。切腹しても償えないぐらいの大きな罪を犯したと思っっています。なのに辞任の理由を「社民党を政権から離脱させた責任」なんて言っている。社民党の離脱は当たり前前で、もっと早く追い出さねばならなかったところでしょう。そんなことは全く枝葉末節。日本を混乱に巻き込んだ罪を背負って、力不足を恥じて土下座して謝って辞めるべきでした。唯一、評価出来るの

は一緒に小沢を引き摺り下ろしたことでした。そうでもしなければ、小沢を降ろすことは出来なかつたでしょうから。

小沢も思つた以上に酷かつた。陳情の一元化や選挙を仕切ることで権力を自分自身に集中させた。国政よりも選挙に勝つことを第一義とし、新人議員にも国会より選挙区廻りを大事にしると指導するなんて、本末転倒のことをやっていました。選挙と言つのは自分の考える政策を主張し、その主張に賛同する人に応援してもらつて票を頂くものでしょう。それを選挙に勝つために政策を作るなんて正に逆だと思つのです。胡錦濤主席との握手問題は、国を貶めて自分の選挙に利用すると言つ、許せないことをやつたと思つています。子供手当にしても、高校無償化にしても、農家への個別所得補償も、高速料金無料化も選挙対策としか思えませんでした。天皇に対する態度、検察庁に対する姿勢なんかも酷くて、こんな人に力を与えたら、何をやりだすか分からない。正にヒツトラーのナチズムに陥る危険を感じていました。長崎の知事選に小沢以下民主党の幹部が続々と来崎したようですが、自民党候補に勝たせたら酷い目に遭わせるぞ、と言つ恫

喝も激しかったと聞いています。賢明にも長崎県民は民主党の候補を落としたのですが、その復讐が直ぐに始まっています。諫早湾干拓の水門を開くか開かないか、の議論は全国的な話題になっているのでご存知かと思えます。その是非は別として、開門賛成派が佐賀や福岡県、反対が長崎県の図式だったのですが、早速開門の方向が決まりました。これなんか露骨な復讐ではないかと思っています。

で、菅の出番になりました。私は昔からこの人はパーフォーマンスだけの人だ、と思つて来ました。国会での質問の際の大袈裟なパーフォーマンス、厚生大臣当時のカイワレを食べて見せるパーフォーマンス、代表当時諫早湾の干拓地に来て泥んこになってムツゴロウを拾い上げて、側にいた何の関係もない役人を怒鳴りつけるパーフォーマンス、女性問題で代表を辞任したとき、頭を剃つてお遍路歩きをしたパーフォーマンスなど。副総理になってからこれがあまり目立たなくなつたのは、次を意識して静かにしていよう、と言う打算があつたものと思えますが、首相になってからの、「最小不幸を指す政権」なんてキャッチフレーズは仲々聞かせますし、財政再建と福祉問題は超党派でや

ろう、と言う姿勢も評価できます。外交問題も超党派でやって貰いたいものだ、と思つています。消費税一〇%を打ち出したのも、非現実的な夢物語から現実を考える姿勢に変わったこととして、むしろ評価しています。軽減税率の考えを打ち出していますが、茂木兄がこの件で石教授と議論していたのはもう何年前のことだったでしょうか。私は軽減税率の議論は境界線の議論に収斂するのではないかと思つています。新しい内閣として何もやらないで、期待値だけが高い内に参議院選挙をやつてしまおう、と言うのは卑怯なやり方ですが、大野木兄の言う吹き出物の亀井を切つたのは快挙でした。少しは期待が出来るのかな、と思いたくなりますが、民主党に勝たせたら、また小沢の亡霊が出て来るのではないか、と言う恐れがありますので、今回は民主党に勝たせてはいけません、と言う気持ちに変わりはありません。

だからと言つて、どこに勝つてもらえば良いのか、が分からないのが悲しいところで。新しい大臣が出来るかと直ぐに新しい「政治と金」とやらが云々され、それしか攻め手と言つか論点がないと言つのも日本の政治が貧しいと言つことなんだな、と思えます。

政策で論議するのが本来の姿だと思うのですが。

(平成二十二年六月二十日)

(追伸)

参議院議員選挙の結果が出ました。民主党が大敗して良かった。消費税問題が敗因、と言う評価が多いけれど、私は消費税がなくても負けたんではないか、とと思っています。消費税の問題は避けて通れない問題。選挙に不利になることを承知の上で菅首相が選挙直前に持ち出したとすれば、むしろ評価すべきでないかとすら思っています。敗因は、鳩山前首相の無能と小沢の独善的な恐怖政治にあったと思います。これで政権運営が謙虚なものになれば良いことだと思います。それと民主党の個人が自由にモノが言えるようになれば、違ってくると思います。大体、何から何まで党で決めて、賛否に党議拘束を掛けるなんてやり方が間違っていると思う。代議士は個人が自分の意見を持っている筈ですから、それを出す場が必要でしょう。特に、参議院の場合は、党をなくすか、党の括りを緩いものにして、議員個人が個々の問題に対して、自由に賛否を言えるようにすべきではないか、と考えます。

国民新党や社民党、共産党が議席を減らしたのも良かったけど、山梨選挙区で大苦戦の結果、輿石が通ったのが残念でした。自民党の新人に、勝て！勝て！と応援していました。

(平成二十二年七月十二日)

三島由紀夫

昭和四十五年のクリスマススの日に市谷の自衛隊本部で衝撃的な自刃をした三島由紀夫が、その四ヶ月ほど前に将来の日本人像を予想して残した有名な言葉があります。

曰く

「無機質な 空っぽな ニュートラルな 中間色の 抜け目がない

ある経済的大国が 極東の一角に残るであろう」

私は別に三島由紀夫の文学が好きなのは、読んだ本もあまり多くはないと思いますが、当時から天才と呼ばれ、生きていたら川端康成より先にノーベル文学賞を取っ

たであろう、とまで言われている人です。私は彼の日本の将来を危ぶむ姿勢には共感を覚えつつも、最後の頃の「楯の会」に見られるような、自己顕示欲の強い、エキセントリックで狂信的な態度には反発を感じていた方です。ナルシストの面も強かったのではないかと感じて、この面も好きになれなかったのですが、この言葉にはその当時から何か感じるものがありました。

それから四〇年後の今、日本と言う国は正にこの予言通りの国になりつつあるのではないか。むしろなってしまうのではないか。やはり天才と謳われた人の言うことは凄いい、と思います。

国のあるべき姿を求めるのではなくて、ひたすらに大衆に迎合し人気を求める政治家、公僕としての務めはどこへやら、自分の天下り先ばかりを心配している官僚ども、事業に対する夢を忘れ、短視眼的に金儲けに奔走する実業家、金を右から左に動かすことで金儲けをした人が勝ち組と呼ばれる世の中、聖職と言われた役割を忘れたのではないかと思われる教師、仁術なんか何処かへやってしまった医者。いずれも金・金に浮かされ

ているような世の中になってしまっています。国の芯とか、誇りなんかはどうでも良い世の中になってしまっているのが今の日本ではないでしょうか。正に三島由紀夫が予言した通りの国になってしまっているのではないだろうか。

文芸春秋八月号にこの楯の会の初代の学生長をやっていたと言う人が、この言葉を民主党政権のリーダーに当て嵌めて語っているのが面白かったので、ご披露します。本当にこの通りだな、と思わされます。

まず、「無機質な」、「空っぽな」、の部分は鳩山由紀夫。あのうつろな眼、心を打つことのない飾りばかりの空虚な言葉、は全く無機質で空っぽです。「経済的大国」の部分は、裕福な、と置き換えてこれも鳩山由紀夫。首相を辞めるときに、議員も辞める、と言ったので、当然のことだ、と、この点は評価していたのですが、最近では前言を翻そうとしているような言動が目立つ。大体、こんな無能な落第生がまだその辺で何か言っているのがオカシイと思います。それも中国やロシアなんかに行つて、日本の代表みたいな顔をして挨拶したりしている。私だったら、人前に顔を出せない程恥ずかしい思い

をするだろうと思うのですが、自分は何とも思っていないのだろうか。今以って「国民の皆さまのお暮らしを大事に・・・」なんて齒の浮くような言葉を連発している。こんな人に一時期でも日本の代表の座を与えたことを恥ずかしく思います。国民の人気取りをするのが政治家ではない。国の安全とか、国益を守り、国の誇りを大切にする政治家であって欲しい。安全が一番大切なインフラだ、と思っています。例えばその時期の国民に嫌われても、国の未来を見据えた正しい行動を取るのが真の政治家だろうと思います。

「ニュートラルな」、「中間色の」、「抜け目がない」の部分は菅直人。日本と言う国をどの方向に進めて行こうとしているのか、と言う自分の信念と言うものが見えず、その場限りの人気取りばかりを考えて、抜け目のないパフォーマンスで世渡りをしている。としか思えない姿は全く三島由紀夫の言葉がピッタリ当て嵌まるような気がします。菅直人は、野党として無責任に批判ばかりしている間は、それはそれなりに迫力もありましたが、政権を担当する力なんて元々なかったのでしょうか。小沢一郎が自民党との大連立に失敗して、代表を辞めるときに、「民主党には政権を取る力がない」と言いました

が、正にその通り。内外でこの大変な時に変な人たちに日本を任せてしまつて、これらの日本はどうなるんだろう、と案じているのは私ばかりではないと思います。

(平成二十二年八月十九日)

【エピソード】

民主党の代表選挙。全く醜い無駄な騒ぎでした。まるでガキの争い。私は菅大嫌い人間の一人ですが、確かに思つていた通り、菅には日本の代表を務める能力はないみたい。自分では何も出来ない人、直ぐにもやらねばならないことを理由を捜して先送りする、何よりも言葉が軽くて、言つたことを直ぐに撤回したりする。責任ある人の発言ではありません。でも、その立場に立たせてしまったのですから、それこそない衆知を集めてでも何とかやつて貰わねばならない。国内的にも国際的にも一刻の猶予も許されない時期に、党内の争いで政治に空白を作つて良いと思つてゐるんだろうか。それが民主党の感覚なんだろうか。三ヶ月で首相を交代させるなんて、国際的にも恥です。もう既に日本と言つて国を相手にする国はいなくなつてゐるのではないだろうか。断固とした姿勢が

出せないから、中国なんかには完全に舐められています。ここは前原外相に期待したいと思っています。

まず、鳩山なんか顔を出すのが間違っている。信頼も徳も人望もなく、調整能力なんて全くない人間だと言うことが自分では分からないのだろうか。大体、三ヶ月前に落第点を付けられて、降ろされた人が恥も外聞もなくしゃしゃり出て来ること自体が間違っています。菅と小沢の両方に良い顔をするだけの全く意味のない時間の無駄でした。失敗の直後、ロシアに行つてメドベージェフ大統領に会っている。あんな空ろな眼と空虚な言葉で、日本の代表なんて顔をしているなんて、日本人の恥だと思えます。

輿石だとか、山岡だとかがまたぞろ顔を出したのも気に入らなかった。鳩山、小沢、菅を加えてこの五人がいなくなると、民主党もマシにならないんじゃないだろうか、との思いを強くしました。

小沢は金の問題もさることながら、政治姿勢に危惧を持ちます。天皇に対する無礼な態度、検察に対する高圧的な姿勢。それと選挙に勝つことを第一義にしている姿勢は間

違っていると思う。選挙に勝ったら自分勝手が何でも出来る、と思っているとしたら恐ろしいことです。自分の選挙を有利に運ぶために、国を貶めた胡錦濤主席との握手問題は許せません。普天間の問題にしても、この姿勢が如実に現れていると思う。基地問題で沖縄が日本全国民の犠牲になっていることは自明の事実です。アメリカとの間で合意したら、全国民が沖縄をお願いして我慢してもらわねばならない。国内が纏まらないから、と言って一旦合意した交渉相手のアメリカに尻を持って行くのは間違っています。これではまるで子供の使いです。沖縄に候補者を立てても勝てないから、と言うことで民主党は参院選では沖縄には候補者を立てませんでした。選挙の責任者だった小沢がやったことしよう。選挙戦と言うのは、自分の主張を聞いてもらう一番の機会です。本気で沖縄と話し合おうと言うのなら、ここに幹事長でも党首でも立場を擲って自分で立って、沖縄県民に自分の主張を訴えて、理解してもらう努力をするのが本当の姿勢ではないのだろうか。そんな姿勢も示さないで、自分は交渉の当時は幹事長だったから、交渉には責任がない、なんて逃げにもならない逃げを打っている。「文殊の知恵」を出

せば解決できる、なんて全く言葉の遊びに過ぎないと思います。それと許せないのが、自分勝手な傲慢な態度。大体、首相が会いたいと言っているのに会えない、なんてことが許されているのが可笑しい話だと思います。都合が悪くなると雲隠れするのも定番になっています。これではまるでガキの態度。大事な党の大会に欠席して勝手なことをやっている。こんな無責任な人には国を任せるなんてことは金輪際出来ません。それなのに民主党にはそんな人を支持している議員が半数もいるなんて、全く信じられないことです。

で、選挙の結果、どうやら収まるところに収まった感じですが、これからが大変。自分たちの醜い争いよりも、日本の国を良い方向に向けることの方に力を注いで貰いたいものです。

本稿を含め、このところの民主党政権への怒りの弁は、応援している後輩の民主党代議士の宮島 大典君には送っておりますが、どう反応してくれませうやら。

(平成二十二年九月十五日)